



Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.2

## Samurai Residences around Sendai Castle (BK13 site)

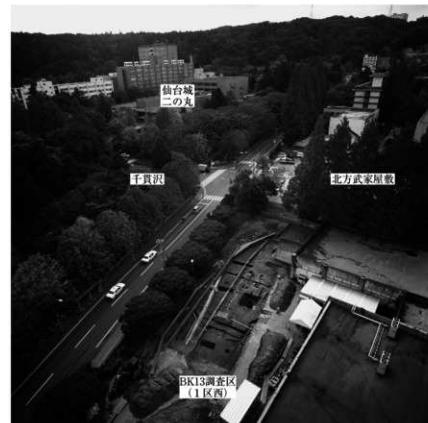
- Excavation reports of Loc.13 of samurai residences located at the side of

north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,  
Tohoku University

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点

# 東北大学埋蔵文化財調査室調査報告2 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第13地点

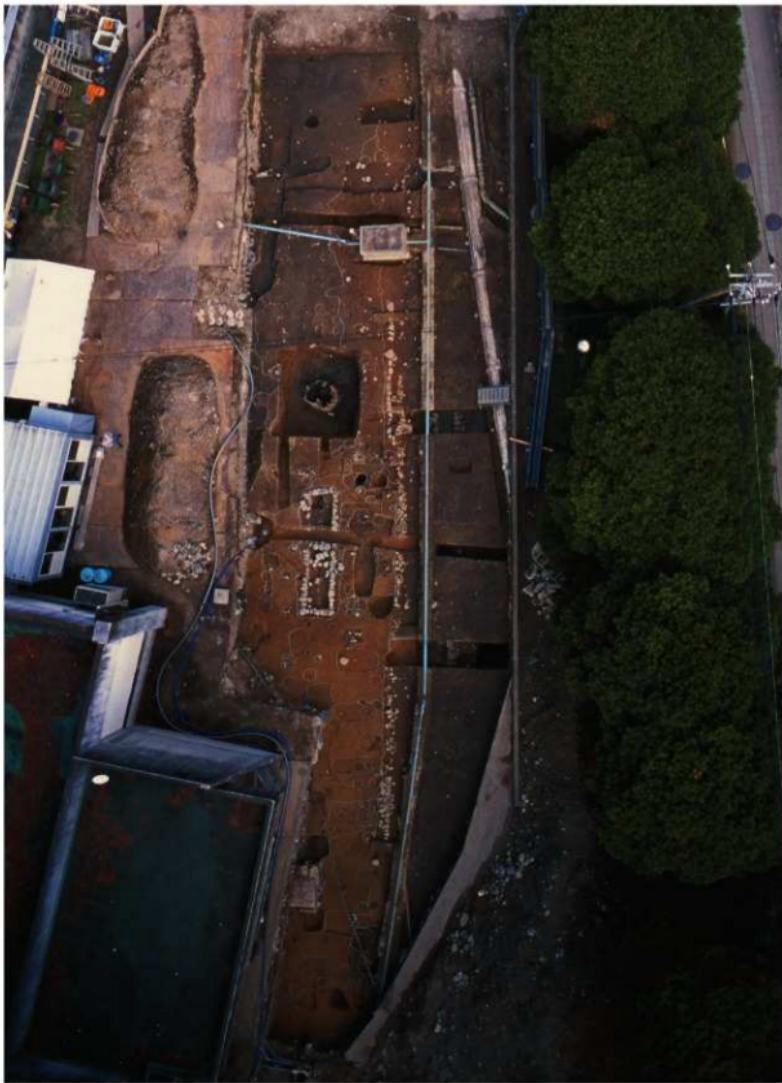


仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点 (BK13)  
東から仙台城二の丸・千賀沢を望む

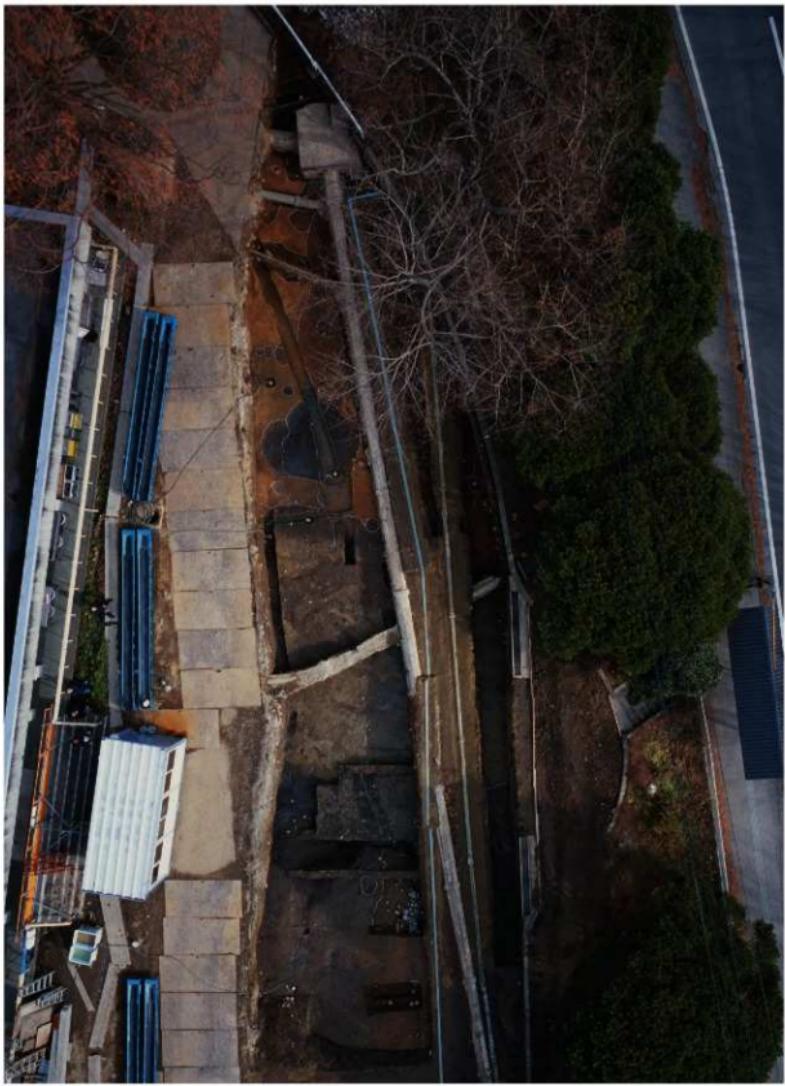
東北大学埋蔵文化財調査室調査報告2  
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区  
第13地点

東北大学埋蔵文化財調査室  
2013





武家屋敷地区第13地点1区西全景（左侧が北）



武家屋敷地区第13地点1区東全景（左側が北）

## 序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の2冊目として、2008年度から2009年度にかけて実施した、川内北地区厚生会館増改築に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査成果を報告いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』という新たなシリーズで、東北大学構内における埋蔵文化財調査報告書を刊行しております。本報告書は、その2冊目となります。以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』として、独立させて刊行していくこととしております。

今回報告する二の丸北方武家屋敷地区第13地点では、掘立柱建物をはじめ、江戸時代の遺構が多数検出されました。沢状の遺構も検出されております。これらを城下絵図などと照らし合わせて検討した結果、今回の調査地点は、二の丸裏門への入り口近くに置かれた、「北下馬廻」の周辺に相当することが確実となりました。仙台城周辺の武家屋敷地区に置かれた施設を研究していく上で、重要なデータを加えることになったと考えております。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室  
室長 阿子島香

## 例　言

1. 本調査報告は、東北大學構内において、東北大學埋蔵文化財調査室が2008年度から2009年度にかけて行った、川内北キャンパスの厚生会館増改築工事に伴う遺跡調査成果をまとめたものである。
2. 報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）  
本体工事分（1・2区） 2008年9月1日～2009年3月30日  
藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮・菅野智則・百々千鶴  
付帯工事分（3～8区） 2009年6月15日～9月11・18日、10月1日、11月5日、12月10日、  
2010年2月3・4日  
藤沢　敦・柴田恵子・菅野智則・百々千鶴
3. 調査・整理作業は、東北大學埋蔵文化財調査室が行った。
4. 本報告の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・菅野智則が担当した。
5. 本文は、藤沢敦・柴田恵子・菅野智則が執筆したほか、石器・石製品については傳田惠隆氏（東北大學大学院文学研究科考古学研究室）、動物遺存体については、川口貴史氏（当時：東松島市奥松島郷文村歴史資料館）に執筆を依頼し、報告をいただいた。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章：藤沢敦  
第Ⅳ章、第Ⅴ章：菅野智則  
第VI章 1～6・8：柴田恵子、7：傳田惠隆、9：川口貴史  
第VII章：藤沢敦、菅野智則

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。
6. 遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。遺物実測図のうち、石器・石製品については手描きのトレースによって原版を作成した。それ以外の遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージヤーを用いたデジタル写真から作成した。
7. 遺物写真については、有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。
8. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

仙台市教育委員会、仙台市博物館、東北大學考古学研究室、佐藤洋（仙台市教育委員会）、  
菅野正道（仙台市博物館）、鹿又喜隆（東北大學大学院文学研究科考古学研究室）、  
瀧谷悠子（東北大學大学院文学研究科日本史研究室）
9. 出土遺物・調査記録は、東北大學埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

## 凡 例

- 方位は真北に統一してある。
- 図1は、国土地理院の1万分の1地形図「青葉山」を使用した。
- 川内地区的仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷にある地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」(縮尺500分の1)を使用した。
- 国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。
- 遺物の実測図および写真的縮尺は、それぞれに示した。
- 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」1 … 年報1  
「東北大大学埋蔵文化財調査室年次報告」2008 … 年次報告2008  
「東北大大学埋蔵文化財調査報告」1 … 調査報告1

- 挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。



これら以外については、それぞれに指示した。

# 目 次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史	1
1. 仙台城と周辺武家屋敷の立地	1
2. 仙台城と仙台城下の武家屋敷	4
(1) 仙台城の歴史	4
(2) 仙台城周辺の武家屋敷	5
3. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査	11
第Ⅱ章 調査の方法と経過	16
1. 調査地点の位置	16
2. 調査にいたる経緯	16
3. 調査の方法と経過	18
(1) 発掘調査の経過	18
(2) 記録方法	20
(3) 遺構の名称について	21
(4) 遺物の取り上げについて	21
(5) 整理作業	22
第Ⅲ章 基本層序と時期区分	23
1. 基本層序	23
2. 遺構の変遷段階の設定	23
第Ⅳ章 検出遺構	29
1. I 区西の遺構	29
(1) I 期	29
(2) II a 期	29
(3) II b 期	30
(4) III 期	31
(5) IV 期	31
2. I 区東・8 区の遺構	31
3. 1 号溝と 4 号遺構	39
4. 2 ~ 4 区の遺構	49
第Ⅴ章 出土遺物	53
1. 陶磁器	53
2. 土師質土器	58
3. 瓦質土器	59
4. 土製品	59
5. 瓦	60
6. 木製品・漆塗製品	63
7. 金属製品	63
8. ガラス製品	64
9. 石器・石製品	64
10. 動物遺存体	65
第VI章 検出遺構の検討	101
1. 沢状遺構の変遷	101
2. 離との関連	102
第VII章 まとめ	106

引用・参考文献

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

英文要旨

写真図版

## 図 目 次

図1 仙台城と二の丸の位置·····	2	図27 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (1)·····	66
図2 仙台城周辺の地形区分図·····	3	図28 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (2)·····	67
図3 川内地区周辺の絵図・地図 (1)·····	6	図29 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (3)·····	68
図4 川内地区周辺の絵図・地図 (2)·····	7	図30 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (4)·····	69
図5 川内北地区調査地点·····	13	図31 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (1)·····	70
図6 武家屋敷地区第13地点調査区の位置·····	17	図32 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (2)·····	71
図7 武家屋敷地区第13地点調査区模式図·····	19	図33 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (3)·····	72
図8 武家屋敷地区第13地点遺構変遷模式図·····	24	図34 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (4)·····	73
図9 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (1)·····	32	図35 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (5)·····	74
図10 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (2)·····	33	図36 武家屋敷地区第13地点出土土師質土器·····	75
図11 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (3)·····	34	図37 武家屋敷地区第13地点出土瓦質土器·····	75
図12 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (4)·····	35	図38 武家屋敷地区第13地点出土土製品·····	76
図13 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (5)·····	36	図39 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (1)·····	77
図14 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (6)·····	37	図40 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (2)·····	78
図15 武家屋敷地区第13地点 I 区西の遺構 (7)·····	38	図41 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (3)·····	79
図16 武家屋敷地区第13地点 I 区東の遺構 (1)·····	41	図42 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (4)·····	80
図17 武家屋敷地区第13地点 I 区東の遺構 (2)·····	42	図43 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (5)·····	81
図18 武家屋敷地区第13地点 I 区東の遺構 (3)·····	43	図44 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (6)·····	82
図19 武家屋敷地区第13地点 I 区の遺構·····	44	図45 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (7)·····	83
図20 武家屋敷地区第13地点 1区東・5～8区の遺構 (1)·····	45	図46 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (8)·····	84
図21 武家屋敷地区第13地点 1区東・5～8区の遺構 (2)·····	46	図47 武家屋敷地区第13地点出土古錢·····	85
図22 武家屋敷地区第13地点 1区東・5～8区の遺構 (3)·····	47	図48 武家屋敷地区第13地点出土煙管·····	85
図23 武家屋敷地区第13地点A層堆積状況·····	48	図49 武家屋敷地区第13地点出土 その他銅製品 (1)·····	85
図24 武家屋敷地区第13地点 2～4区の遺構 (1)·····	50	図50 武家屋敷地区第13地点出土 その他銅製品 (2)·····	86
図25 武家屋敷地区第13地点 2～4区の遺構 (2)·····	51	図51 武家屋敷地区第13地点出土鐵製品·····	86
図26 武家屋敷地区第13地点 2～4区の遺構 (3)·····	52	図52 武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品·····	87
		図53 武家屋敷地区第13地点周辺の絵図·····	101
		図54 「北下馬廻」の絵図·····	103
		図55 武家屋敷地区第13地点 検出遺構と絵図との対比·····	104

## 表 目 次

表1 武家屋敷地区第13地点関連絵図人名	10	表21 武家屋敷地区第13地点出土 土製品観察表	96
表2 仙台藩の家格	10	表22 武家屋敷地区第13地点出土古代瓦観察表	97
表3 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧	12	表23 武家屋敷地区第13地点出土軒丸瓦観察表	97
表4 武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表(1)	25	表24 武家屋敷地区第13地点出土軒平瓦類観察表	97
表5 武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表(2)	26	表25 武家屋敷地区第13地点出土軒棟瓦観察表	97
表6 武家屋敷地区第13地点時期別遺構一覧表	27	表26 武家屋敷地区第13地点出土丸瓦観察表	97
表7 武家屋敷地区第13地点遺構属性表	28	表27 武家屋敷地区第13地点出土平瓦1類観察表	97
表8 武家屋敷地区第13地点出土磁器集計表	88	表28 武家屋敷地区第13地点出土平瓦観察表	98
表9 武家屋敷地区第13地点出土陶器集計表	89	表29 武家屋敷地区第13地点出土棟瓦観察表	98
表10 武家屋敷地区第13地点出土瓦集計表	90	表30 武家屋敷地区第13地点出土板堀瓦観察表	98
表11 武家屋敷地区第13地点出土 土師質土器・瓦質土器集計表	91	表31 武家屋敷地区第13地点出土面戸瓦観察表	98
表12 武家屋敷地区第13地点出土金属製品集計表	91	表32 武家屋敷地区第13地点出土輪違観察表	98
表13 武家屋敷地区第13地点出土 その他の遺物集計表	91	表33 武家屋敷地区第13地点出土 その他の瓦観察表	98
表14 武家屋敷地区第13地点出土 磁器観察表(1)	92	表34 武家屋敷地区第13地点出土古銭観察表	99
表15 武家屋敷地区第13地点出土 磁器観察表(2)	93	表35 武家屋敷地区第13地点出土煙管吸口観察表	99
表16 武家屋敷地区第13地点出土 陶器観察表(1)	94	表36 武家屋敷地区第13地点出土銅製品観察表	99
表17 武家屋敷地区第13地点出土 陶器観察表(2)	95	表37 武家屋敷地区第13地点出土鉄製品観察表	99
表18 武家屋敷地区第13地点出土 土師質土器皿観察表	96	表38 武家屋敷地区第13地点出土 石器・石製品観察表	100
表19 武家屋敷地区第13地点出土 土師質土器(皿以外)観察表	96	表39 武家屋敷地区第13地点出土 ガラス玉観察表	100
表20 武家屋敷地区第13地点出土 瓦質土器観察表	96	表40 武家屋敷地区第13地点出土貝類集計表	100
		表41 武家屋敷地区第13地点出土 魚類・哺乳類集計表	100

## 図版目次

図版1 武家屋敷地区第13地点全景 (1).....	123
図版2 武家屋敷地区第13地点全景 (2).....	124
図版3 武家屋敷地区第13地点全景 (3).....	125
図版4 武家屋敷地区第13地点全景 (4).....	126
図版5 武家屋敷地区第13地点全景 (5).....	127
図版6 武家屋敷地区第13地点の遺構 (1).....	128
図版7 武家屋敷地区第13地点の遺構 (2).....	129
図版8 武家屋敷地区第13地点の遺構 (3).....	130
図版9 武家屋敷地区第13地点の遺構 (4).....	131
図版10 武家屋敷地区第13地点の遺構 (5).....	132
図版11 武家屋敷地区第13地点の遺構 (6).....	133
図版12 武家屋敷地区第13地点の遺構 (7).....	134
図版13 武家屋敷地区第13地点の遺構 (8).....	135
図版14 武家屋敷地区第13地点の遺構 (9).....	136
図版15 武家屋敷地区第13地点の遺構 (10).....	137
図版16 武家屋敷地区第13地点の遺構 (11).....	138
図版17 武家屋敷地区第13地点の遺構 (12).....	139
図版18 武家屋敷地区第13地点の遺構 (13).....	140
図版19 武家屋敷地区第13地点の遺構 (14).....	141
図版20 武家屋敷地区第13地点の遺構 (15).....	142
図版21 武家屋敷地区第13地点の遺構 (16).....	143
図版22 武家屋敷地区第13地点の遺構 (17).....	144
図版23 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (1).....	145
図版24 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (2).....	146
図版25 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (3).....	147
図版26 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (4).....	148
図版27 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (1).....	149
図版28 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (2).....	150
図版29 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (3).....	151
図版30 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (4).....	152
図版31 武家屋敷地区第13地点出土 土師質土器・瓦質土器.....	153
図版32 武家屋敷地区第13地点出土 土製品・瓦 (1).....	154
図版33 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (2).....	155
図版34 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (3).....	156
図版35 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (4).....	157
図版36 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (5).....	158
図版37 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (6).....	159
図版38 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (7).....	160
図版39 武家屋敷地区第13地点出土 古銭・煙管・その他の金属製品 (1) .....	161
図版40 武家屋敷地区第13地点出土 その他の金属製品 (2)・動物遺存体 .....	162
図版41 武家屋敷地区第13地点出土 石器・石製品・ガラス玉 .....	163



# 第Ⅰ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

## 1. 仙台城と周辺武家屋敷の立地

仙台平野は、宮城県のほぼ中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狹義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯によって区切られ、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台町段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その裾に広がる河岸段丘上に立地している。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町一利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどがこの広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地し、仙台城下を引き継ぎ発展してきた。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる（図1）。

本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115～138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視して、このような急峻な地形を利用して造られたと考えられている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54～71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する（図2）。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れおり、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が千貫沢を渡るところに造られた千貫橋付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

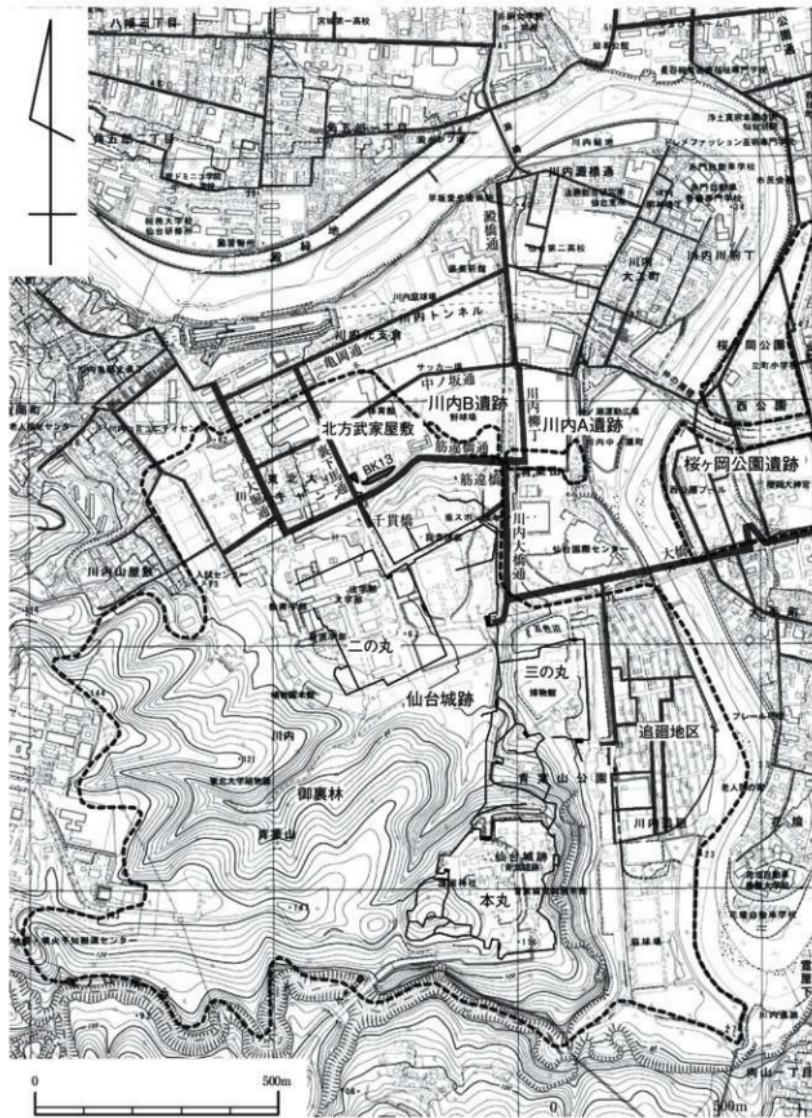


図1 仙台城と二の丸の位置  
Fig. 1 Distribution of Sendai Castle

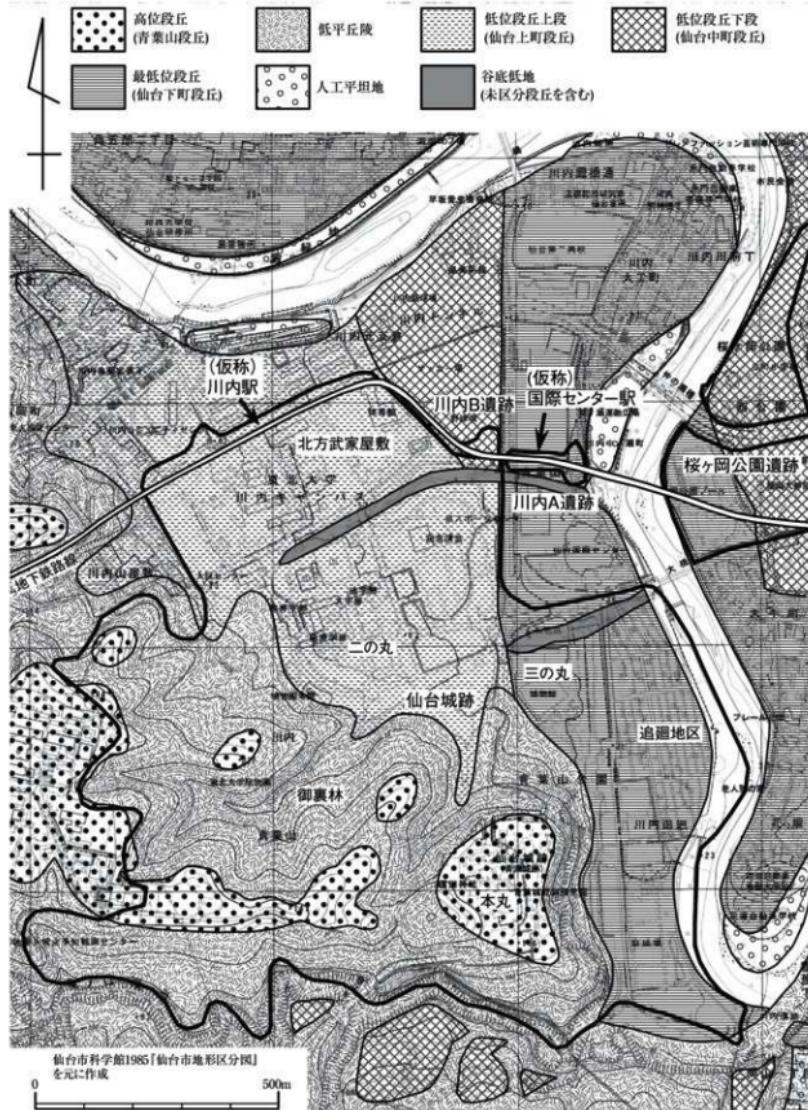


図2 仙台城周辺の地形区分図  
Fig. 2 Topographical map around Sendai Castle

## 2. 仙台城と仙台城下の武家屋敷

### (1) 仙台城の歴史

仙台城は、慶長15年（1600年）から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中核として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003年に国史跡に部分指定されている。

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なままであった。1998年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森・渡部2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573～92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、慶長7年（1602年）には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、慶長15年（1610年）に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によつて、3時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、元和2年（1616年）の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅱ期石垣も、寛文8年（1668年）の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森・渡部2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要がある。いずれにせよ、二の丸第9地点などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（年報8・9）。

元和6年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、慶長4年（1599年）に徳川家康の六男忠輝と婚約し、慶長11年（1606年）に奥入れする。しかし、元和2年（1616年）に忠輝が、大阪夏の陣の際の逃亡・怠戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに元和6年には仙台に移ることになった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。正保2年（1645年）の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸第5地点の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（年報6・7）。

伊達政宗は、寛永4年（1627年）、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周間に堀と土塁をめぐらした城郭である。寛永5年（1628年）に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若

林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第5次調査と第8次調査で調査された1号建物跡が、仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（仙台市教委2006・2008）。

伊達政宗は寛永13年（1636年）に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、寛永15年（1638年）に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるようになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになつたと考えられる。

寛永15年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が寛文元年（1661年）に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるようになつた。

17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、文化元年（1804年）の火災では全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として維持されていく。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は慶応4年（明治元年・1868年）9月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに押領し存続が許された。明治2年（1869年）の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。明治4年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本營として引き続き利用された。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、明治37年（1904年）に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わっていく。

昭和20年（1945年）7月21日の仙台空襲の際には、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失してしまう。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、アメリカ軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。昭和32年（1957年）のアメリカ軍からの返還を受け、二の丸地区のほとんどは東北大學が使用することとなり、一部は仙台市の公園となり、現在に至っている。

## （2）仙台城周辺の武家屋敷

仙台城下は、仙台城の造営と併行して、その建設が進められていく。慶長6年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図を以テ諸士等ノ屋敷割御付ラル。」との記録が残されている（『真山公治家記録卷之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。江戸時代の地図である『仙台萩』には、慶長7年（1602年）に、仙台に移る以前の本拠であった岩出山の土民に、仙台へ移るよう命令したことが記されている。その戸数などは不明ながら、家臣団や町方をはじめ多数が移住したと見られている。仙台城下の範囲は、その後徐々に拡大し、それに伴い再配置が行われる場合もあったが、基本的な



1. 正保二年（1645年） 奥州仙台城絵図



2. 宽文四年（1664年） 仙台城下絵図



3. 宽文八・九年（1668・69年） 仙台城下絵図



4. 延宝六～八年（1678～80） 仙台城下大絵図



5. 延宝九～天和三年（1681～83年） 仙台城下絵図



6. 元禄四・五年（1691・92年） 仙台城下五疊卦絵図



7. 享保九年（1724年）以降 仙台城下絵図

1・2・6 「絵図・地図で見る仙台」

5・7 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」

3・4 「仙台城下絵図の研究」

図3 川内地区周辺の絵図・地図（1）  
Fig. 3 Picture maps around the Kawauchi area (1)



8. 宝暦十一～明和三年（1760～66年） 仙台城下絵図



9. 天明六～寛政元年（1786～89年） 仙台城下絵図



10. 安政三～六年（1856～59年） 安靜補正改革仙台府繪図



11. 明治8年（1875年） 宮城郡仙台町地引図



12. 明治13年（1880年） 宮城県仙台区全図



13. 明治15年（1882年） 仙台区及近傍村落之図



14. 明治26年（1893年） 仙台市測量全図

9・10・14 「絵図・地図で見る仙台」

8・11～13 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」

Fig. 4 Picture maps around the Kawauchi area (2)

構成は踏襲されていく。川内地区は、一部の寺社と職人屋敷を除くと、侍屋敷として使われていた。

仙台城下の様相を知ることができる基本的な資料は、城下絵図である。これらの城下絵図には、年代が近接するものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが、図3・4である。道路の変化を見るため、明治時代の地図についても、併せて示しておいた。

仙台城下を描いた知られている最も古い絵図は、正保2年(1645年)の『奥州仙台城絵図』である(図3-1)。これは幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されていないが、仙台城の周辺には「侍屋敷」と記されており、この時点では武家屋敷が広がっていることが判る。これまでの川内北地区での調査でも、各所で江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が発見されており、この区域では江戸時代初頭から屋敷地が整備されていったものと考えられる。

正保絵図以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家の屋敷が多い。東北大大学の川内北地区も、比較的上級の家の屋敷が置かれていた。川内地区全体の屋敷の様相については、調査報告1において、城下絵図をもとにした検討結果を掲載しているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

仙台城下絵図で、川内地区的道路の位置を見ると、正保絵図(図3-1)以降、明治15年(1882年)の地図(図4-13)に至るまで、基本的に変化がないことが判る。江戸時代における道路の位置の復元についても、調査報告1において詳しく検討しているので、ここではごく概略を述べることとする。

二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに「筋違橋通」が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路としては「中ノ坂通」と「亀岡通」の2本がある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は1本だけである。現在のような道路は明治26年(1893年)の地図(図4-14)において、初めて見られるようになる。これと同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鉤の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。明治22年(1899年)の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、明治25年(1892年)に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋架橋と同時かどうかは確認できていないが、明治21年(1888年)の第二師団の設置以降、一連の過程で川内地区的整備が進められていったものと考えて良いであろう。

明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。南北方向の道路については、ある程度復元根拠がある。しかし東西方向の道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」については、復元根拠を欠いており、正確な位置を復元することは難しい。このような限界を踏まえて、図1では、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元している。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側を東西に走るのが「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ並行して西側にあるのが「大堀通」である。筋違橋から北へ延び「中ノ坂通」に至るのが「川内柳丁」、さらに北へ延び澁橋へ至るのが「澁橋通」である。

今回報告する武家屋敷地区第13地点(BK13)は、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にあたる場所であると考えられる(図1)。江戸時代の絵図と対比させて考えると、調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から1軒目と2軒目の屋敷の南端付近に相当すると考えられる。この1軒目の屋敷と2軒目の屋敷の間には、千貫沢の支流の沢が流れていたことが、いくつかの絵図から判

明する。この支流の沢と考えられる造構（4号造構）が検出されており、調査区がこの2軒の屋敷にまたがることとは間違いないものと思われる。

西側の「裏下馬通」との交差点から1軒目の屋敷の道路沿いには、「北下馬厩」が存在したことが、いくつかの絵図から判明する。第VI章で検討するが、今回の調査区に、この「北下馬厩」が入ってくる可能性も多い。仙台城の周囲には、3ヶ所に厩が設けられていた。「大手門」の東側には、「外繁」とも呼ばれた「下馬厩」があり、もっとも規模が大きかった。二の丸裏門である「台所門」に東から入っていく「扇坂」の入口近くには「扇坂下馬厩」がある。「台所門」に北側から入る千貫橋の外側に置かれていたのが「北下馬厩」で、20頭を収容できた。これは、「大手門」近くの「下馬厩」に次ぐ規模であった。

調査区に相当すると考えられる2軒の屋敷について、これらを使用していた人名を、城下絵図から拾い出したものが表1である。記載されている人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格などについて、次に見てみたい。記載された家臣の全てについて、詳細が判明している訳ではないが、おおよそは判明する。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、1貫（1000文）を10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拝領者が記載されている藩政用絵図が、寛文4年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、1貫を10石と換算すれば良いこととなる。

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表2）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。

絵図の記載を見ると、北側の区画と合わせて大きな区画としている場合がある。特に西側の1軒目の屋敷では、ほとんどの絵図で大きな区画となっている。2軒目でも、享保9年以降（1724～）の絵図では、北側の区画と合わせて大きな屋敷地となっている。

西側の1軒目の屋敷では、17世紀に記載の無い場合が多く、これは空き屋敷を示すものと思われる。それ以外の使用者の記載のあるものでは、かなり家格の高い重臣が使用していることが判る。最も家格の高い一門の三沢氏、準一家の高泉主計、一族の大立目下野が続く。黒沢要人や布施備前は、これらよりは家格の低い着座であるが、それでもかなりの重臣である。禄高は黒沢要人が300貫文、布施備前は170貫文と、かなり高い。二の丸裏門の「台所門」を出て、「下馬厩」が置かれている脇という、重要な場所であり、それにふさわしい重臣が屋敷地を拝領していたと言えるであろう。

東側の2軒目の屋敷は、西側より家格・禄高ともに低い。家格や禄高が判然としないものも多い。それでも、元禄4・5年（1691～92）の絵図では、召出で130貫文という高い禄高の太田次郎兵衛の名前が見える。享保9年以降（1724～）の絵図では、虎の間番士ではあるが62貫文と高い禄高の岩山綱殿介が使用している。これらは、家臣の中でも比較的のものと言うことができるであろう。

以上のように、武家屋敷地区第13地点の調査区の周辺は、江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域と言える。特に西側の「裏下馬通」の交差点に面した屋敷は、家格・禄高とともにかなり上級の家臣が使用していた場所である。

表1 武家屋敷地区第13地点閑連絵図人名  
Tab. 1 List of names of samurai lived at this location

年代（西暦）	図	「筋違傍通」沿い			
		「奥下馬道」交差点から1区画目	「奥下馬道」交差点から2区画目	不明	20貫文
寛文4年（1664）	図3-2	記載無し	大河内善左衛門	不明	20貫文
寛文8・9年（1668～69）	図3-3	記載無し	大河内善左衛門	不明	20貫文
延宝6～8年（1678～80）	図3-4	三沢頼母 北側と同一区画	一門 100貫文	大河内善左衛門	不明 20貫文
延宝9年～天和3年（1681～83）	図3-5	記載無し	大河内善左衛門	不明	20貫文
元禄4・5年（1691～92）	図3-6	三沢左京 北側と同一区画	一門 100貫文	太田次郎兵衛	召出 130貫文
享保9年以降（1724～）	図3-7	黒沢要人 北側と同一区画	着座 300貫文	岩山範殿介 虎間	62貫文 北側と同一区画
宝曆10年～明和3年（1760～66）	図4-8	大立目下野 北側と同一区画	一族 100貫文	記載無し	
天明6年～寛政元年（1786～89）	図4-9	高泉主計 北側と同一区画	準一家 270貫文	古内進	不明 不明
安政3～6年（1856～59）	図4-10	布施櫻前 北側と同一区画	着座 170貫文	佐伯勇五郎	不明 不明

表2 仙台藩の家格  
Tab. 2 List of status in Sendai-han

家格	人數	備考
一門	11	角田石川氏・豆理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	鰐貝・秋保・柴田・小堀川・堤森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中日・豆理・榮田・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・翠名・本宮・高泉・葛西・上邊野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町（棚沢郡）・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島（江刺郡）・宮内・中島（伊具郡）・茂庭・遠藤・貴藤・畠中・片平・下郡山・沼沼・大町（宮城郡）・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番席の三家（遠藤・但木・後藤）
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀札に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月室会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月室会に召し出される家柄
平上（1000石以上）	6	
平上（500石以上）	68	
平上（100石以上）	994	
合計	1258	

### 3. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査

東北大大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する（図1）。

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。この内二の丸地区については、東北大大学の施設整備事業などに先立ち、東北大大学によって調査が実施されてきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となった。2001年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始され、現在も継続中である。表3に、仙台城と、周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

仙台城周辺の武家屋敷地区についての調査は、近年急速に調査事例が増加している。

1978年、川内北地区のブルー西側の排水管理設工事の際、石組みの井戸などが発見された。この時、東北大大学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査にとどまざるをえなかった。この時には、川内北地区は周知の遺跡の範囲内ではなく、新たに周知の遺跡として登録する措置もとられていない。

東北大大学に埋蔵文化財調査委員会が1983年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置がとられるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986年度に調査を実施した二の丸第8地点は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（年報4）。二の丸に伴う堀の調査のため、調査地点名称は二の丸地区的名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。これらの調査は、川内南地区が周知の遺跡である仙台城跡の範囲内に含まれていたことから、周知の遺跡の隣接地という位置づけで、調査を実施していたものである。

これらの調査によって、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸地区的遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していること、二の丸のすぐ北側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のはとんどが、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含まれることになった。ただし、川内北地区の中でももっとも東側のグラウンドについては、それまで実施した立会調査によって、確実に江戸時代に遡る遺構面が残存している場所は確認できていなかった。またこのグラウンド部分は、西側よりは段丘崖によって一段低くなっている区域であり、二の丸地区が立地する段丘面より、一段低い段丘面であった。これらの理由から、仙台城跡の範囲拡大にあたって、グラウンドの区域は含まれなかつた。

東北大大学埋蔵文化財調査委員会に始まり、東北大大学埋蔵文化財調査研究センターを経て、現在の埋蔵文化財調査室に至る、東北大大学の構内遺跡調査組織による、施設整備などの工事に伴う二の丸北方武家屋敷地区における調査は、2012年度までに第1～15地点の調査が実施されてきた（図5）。この内、1985年度に実施した第2地点（BK2）と第3地点（BK3）の調査は、結果的に立会調査で終了したため欠番としている。したがって、13地点で調査が実施されていることとなる。

第1地点（BK1）は、2001年度に調査を実施した第7地点と一部重なる区域で、1984年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、2

表3 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧  
Tab.3 List of excavations of Sendai Castle and *Samurai* Residences around Sendai Castle

年度	仙台市調査		東北大學構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
	国庫補助確認調査以外	国庫補助要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方 武家屋敷地区	二の丸北方 武家屋敷地区	その他の 周辺武家屋敷
1974 昭和49			文系厚生施設緊急調査（仙台市教委）		ブルブル水害緊急調査（考古学研究室）	
1978 昭和52			第1地点試掘			
1982 昭和57	三の丸博物館新築（76集）	第1地点（年報1） 第2地点（年報1） 第3地点（年報1）				
1984 昭和59		第4地点（1987年度継続）	第1地点試掘			
1985 昭和60		第5地点試掘	第4地点試掘			
1986 昭和61		第7地点（年報4） 第8地点（年報4）				
1987 昭和62		第4地点（年報5） 第5地点（翌年度継続）				
1988 昭和63		第5地点（年報6）				
1989 平成1		第5地点付帯部（年報7） 第9地点試掘	第5地点（年報7）			
1990 平成2		第9地点（年報8）				
1991 平成3		第10地点（年報9）				
1992 平成4		第11地点試掘 第12地点試掘 第13地点（年報10）				
1993 平成5		第12地点（年報11） 第14地点（年報11）				
1994 平成6		第15地点（年報12）	第4地点（翌年度継続）			
1995 平成7		第11地点（年報13）	第4地点（年報13）			
1996 平成8	本丸1次石垣修復確認調査		第6地点（年報14）			
1997 平成9	本丸1次石垣修復（翌年度継続）	第16地点（年報15）				
1998 平成10	本丸1次石垣修復（翌年度継続）	第17地点試掘				
1999 平成11	本丸1次石垣修復（翌年度継続）					
2000 平成12	本丸1次石垣修復（翌年度継続）	第17地点（年報18）				
2001 平成13	本丸1次石垣修復（翌年度継続）	第1次大広間1次 第2次清水門（259集）	第7地点（年報19）			
2002 平成14	本丸1次石垣修復（翌年度継続）	第3次大番士土手堀 第4次櫓橋 第5次本丸大広間2次（264集）		第8地点（年報20）		
2003 平成15	本丸1次石垣修復（271集）	第6次全城分柵 第7次大広間3次 第8次登城路 第9次広瀬川護岸石垣（270集）		第9地点（年報21）		
2004 平成16	中門・清水門復旧整備（259集）	第10次大広間1次 第11次広瀬川護岸・ 逆曲輪抱石垣（285集）			東西線試掘（289集）	川内A・桜・岡公園東西線 試掘（289集）
2005 平成17	清水門周辺復旧整備（299集） 登城路1次（300集）	第12次大広間5次 第13次三の丸1次 第14次広瀬川護岸・ 中門石垣（297集）			東西線試掘（302集）	川内A周辺・岡公園東 西線試掘（302集）川内A 道路東西線（312集）
2006 平成18		第15次大広間6次 第16次三の丸2次（306集）	第10地点（年報24） 第11地点（年報24） (翌年度継続)	東西線（亀戸トンネル開削部・312集）		川内A周辺・川内B東西線 試掘（316集）追削道構 造1次（353集）
2007 平成19		第17次大広間7次 第18次三の丸3次 第19次本丸西北石垣（330集）	第11地点 (調査報告1) 第12地点 (調査報告1)	東西線（川内駅延・ 立堀部・386集）		川内A東側・川内B東西線 試掘（316集）追削道構 造2次（350集）
2008 平成20		第20次大広間8次 第21次造酒屋敷1次 第22次本丸西北石垣（345集）	第13地点（本体部分 ・調査報告2）	東西線（延坂トンネル ・402集）		東西瀬川内A・広瀬川右岸 橋梁部（402集）・川内B (延坂トンネル部・385集)、 桜・岡公園（広瀬川延坂部・ 桜・岡公園2次（西公園再 整備・335集）追削道構 造3次（350集）
2009 平成21	登城路2次（354集）	第23次造酒屋敷2次 第24次大広間追加 第25次広瀬川護岸石垣（374集）	第13地点（付帯工事 ・調査報告2）	東西線（延坂トンネ ル部・402集）		東西瀬川内A（広瀬川右岸 橋梁部・402集）
2010 平成22		第26次造酒屋敷3次 (395集)			第2次雨水管（356集）	東西瀬川内B（延坂トンネ ル部・401集）追削コート 周辺試掘
2011 平成23			第14地点 (翌年度継続)			
2012 平成24	大手門北側石垣土 壁・中門北側石垣（震災 復旧）	第14地点 (調査報告中)断 第15地点 (翌年度継続)				追削公園センター

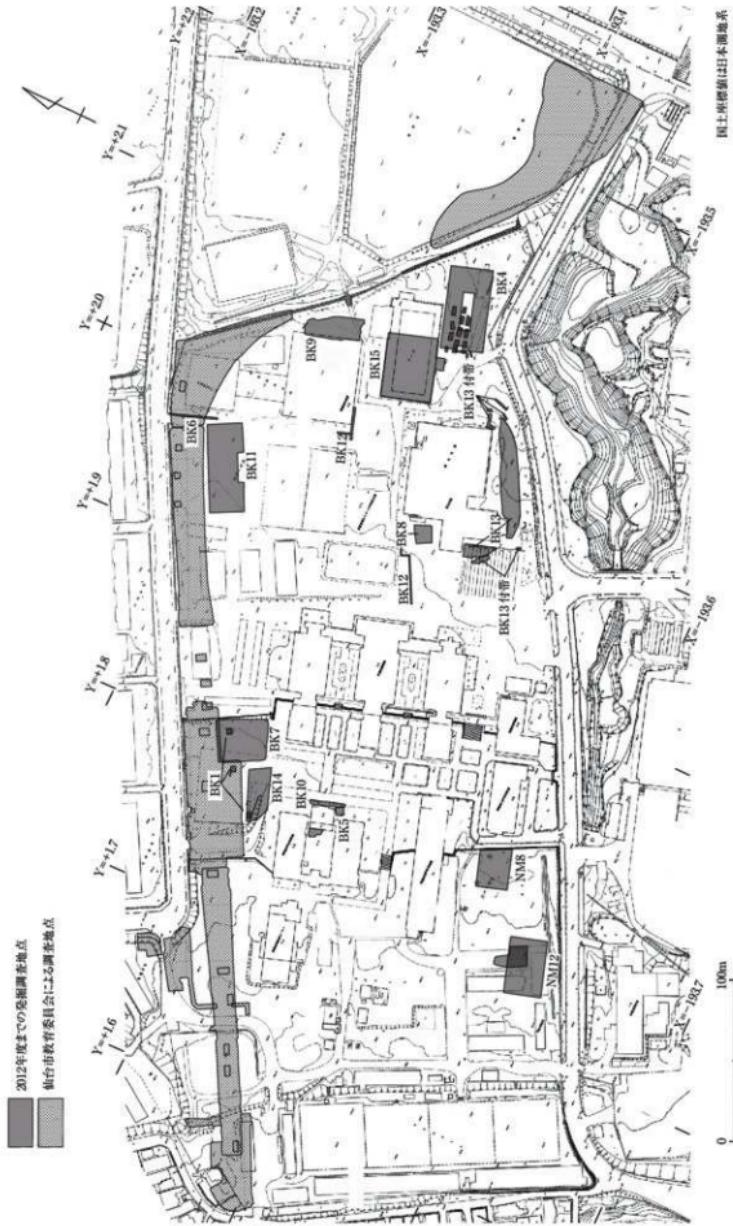


Fig. 5 Location of excavations at Kawauchi-Kita campus (NM i.e. Secondary Citadel)

× 2 mの試掘調査区を 3ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認されている。試掘調査実施後は、課外活動施設の建設場所が変更されたため、第7地点の調査が行われるまで、それ以上の調査は実施されなかった。

第4地点（BK4）は、1985年度に試掘調査を実施し、1994～1995年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設がこの地点に建設されることとなり、本調査を実施した。調査面積が 1,143m<sup>2</sup>という、二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（年報13）。

第5地点（BK5）は、教養部学生実験施設（当時、現学生実験棟）にエレベーターを設置するのに伴い、1989年度に実施した。40m<sup>2</sup>という小規模な調査であったが、溝が検出されている（年報7）。

1996年度に実施した第6地点（BK6）は、給水管理設に伴う調査である。調査面積は15m<sup>2</sup>と少なかったが、比較的多くの遺構が検出されている（年報14）。

2001年度に実施した第7地点（BK7）は、マルチメディア教育研究棟新館に伴う調査である。調査を行った面積が810m<sup>2</sup>と、まとまった規模の調査としては、第4地点に続く調査となった。礎石建物・掘立柱建物・掘立柱列や溝・井戸など、江戸時代の各時期の遺構が検出された。特筆されるものは、大規模なゴミ穴が検出され、様々な種類の遺物が大量に出土したことである。このゴミ穴からは、享保年間の年号が記されたものを含む、多数の荷札木簡が出土している。木簡の記載内容や、捨てられたゴミの内容から、堀をはさんだ二の丸地区のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる（年報19第1～5分冊）。

第8地点（BK8）は、厚生会館前の上屋取設工事に伴い、2002年度に調査を実施した。28.6m<sup>2</sup>と小規模な調査であった。溝やピットなどが検出されている（年報20）。

第9地点（BK9）は、課外活動施設（川内ホール）新館に伴い、2003年度に調査を実施した。体育館西側の、グラウンドとの段差に近い区域での調査であった。363.5m<sup>2</sup>とやや規模の大きな調査であったが、段丘崖にかかる区域での調査であったため、遺構密度はさほど高くなかった。小規模な石垣や溝、掘立柱列などが発見されている（年報21）。

第10地点（BK10）は、学生実験棟改修に伴い、2006年度に調査を実施した。建物の東側と、中庭の2ヶ所で調査を行った。建物東側の調査区は、第5地点の調査区に隣接し、溝・井戸などが検出されている。中庭の調査区では、道路測溝の可能性のある、石垣が発見されている（年報24）。

第11地点（BK11）と第12地点（BK12）は、仙台市高速鉄道東西線（以下地下鉄東西線と略記）機能補償に関係する調査である（調査報告1）。第11地点は、サブアリーナ棟新館に伴うもので、調査面積は1,401m<sup>2</sup>で、大規模な調査となった。掘立柱建物・溝・井戸や大規模に掘り込まれた遺構など、多数の遺構が検出された。第12地点は、屋外給排水管設備の巡回工事に伴うもので、遺構面まで掘削が及ぶ区域のみを調査したため、59.6m<sup>2</sup>と小規模な調査であった。

第13地点（BK13）は、厚生会館増改築に伴う調査で、本書で報告するものである。2008年度に増築建物本体部分（774.8m<sup>2</sup>）、翌2009年度に付帯工事部分（44.85m<sup>2</sup>）の調査を実施している。

第14地点（BK14）は、地下鉄東西線川内駅（仮称）の駅前整備に伴う調査である。2011年度から調査を開始し、2012年度も一部を継続して調査を実施したが、次の第15地点の調査を先行して実施することが必要となつたため、調査途中で一時中断している。全体の調査予定面積953m<sup>2</sup>の内、496m<sup>2</sup>の調査が終了している。掘立柱列・溝や井戸などが検出されている。

第15地点（BK15）は、課外活動施設新館に伴う調査で、2012年度から調査を実施している。1,455m<sup>2</sup>と、東北大が実施した北方武家屋敷地区の調査では、最大規模の調査となっている。当地点は、2013年度に継続して調査を実施する予定である。

この第14地点と第15地点については、2012年度末の段階では調査が継続中であるため、調査が終了した後に整理作業を行い、調査報告書を作成する予定である。

一方、仙台市教育委員会による調査も、地下鉄東西線建設に伴う調査を中心に、多数実施されるようになっている。地下鉄東西線関係の本調査に先立ち、2004年度から2006年度にかけて試掘調査が行われている。本調査と併行して、2007年度にも東北大大学のグラウンド部分で試掘調査が行われている。これらの試掘調査は、仙台城二の丸北方武家屋敷地区だけでなく、その東側の東北大大学のグラウンド部分と仙台商業高等学校グラウンド跡地の区域、広瀬川を渡った対岸の西公園の区域でも、試掘調査が行われている。これらの試掘調査の結果、仙台商業高等学校グラウンド跡地の一部が川内A遺跡、東北大大学グラウンドの一部が川内B遺跡、広瀬川を渡った対岸の西公園部分が桜ヶ岡公園遺跡として、新たに周知の遺跡として遺跡登録がなされ、記録保存のための調査が行われるようになった。

仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005年度の川内A遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では2006年度から2009年度にかけて、川内B遺跡では2008年度と2009年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007年度と2008年度に調査が行われている。これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。

仙台城三の丸地区の東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討が進められている。公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006年度から2008年度に、遺構確認調査が実施されている。これらの確認調査を踏まえて、2012年度からは、追廻公園センター建築計画に伴う調査も開始されている。

これらの調査が行われてきた結果、川内地区は、仙台城下の武家屋敷の中では、もっとも広い範囲で考古学的調査が実施してきた地区となっている。特に、川内北地区の二の丸北方武家屋敷地区は、もっとも高い密度で考古学的調査が実施されている区域となってきている。

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

### 1. 調査地点の位置

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）の調査は、川内北地区の厚生会館の増改築に伴う調査である。川内北地区のはば中央南により、川内北地区厚生会館が置かれている。川内北地区の厚生会館には、食堂・購買部などが置かれており、川内地区全体の厚生施設の中心となる建物である。この既存施設の一部を取り壊し、南側に食堂を増築することとなった。緑地や通路となっていた区域で、西から東へごく緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦な場所である（図6）。

調査区の南側には、川内南地区と川内北地区を区切る道路があり、その南側には千貫沢が流れている。この千貫沢北側の道路は、江戸時代の道路「筋違橋通」をほぼ踏襲したものと考えられる。また、川内南地区へ至る道路が千貫沢を横切るところは土橋となっており、その東側には石垣が残っている。これは、江戸時代から続く千貫沢の土橋（千貫橋）で、石垣は改修は施されているものの、江戸時代から続くものである。

これらとの位置関係から、今回の調査区を、江戸時代の城下絵図と対比することができる。第Ⅰ章で検討したように、今回の調査地点は、「筋違橋通」と「千貫橋」から北へ延びる「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にある場所であると考えられる（図1）。調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から1軒目と2軒目の屋敷の南端付近に相当すると考えられる。江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域である。特に西側の「裏下馬通」の交差点に面した屋敷は、家格・禄高とともにかなり上級の家臣が使用していた場所である。

今回の調査地点の周辺は、比較的調査が行われている区域である。東側には課外活動施設新常に伴う第4地点の調査区がある。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出されている（年報13）。厚生会館をはさんで北西側には、厚生会館前の上屋取設工事に伴う第8地点の調査区がある。小規模な調査であったが、溝やピットなどが検出されている（年報20）。厚生会館の北側には、仙台市高速鉄道（地下鉄）東西線機能補償に関わって実施した、屋外給排水管設備の迂回工事に伴う第12地点の調査区がある。これも小規模な調査であった（調査報告1）。

### 2. 調査にいたる経緯

川内北地区的厚生会館の増改築工事が、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されることとなった。厚生会館の南側に食堂を増築する部分については、一部は既存厚生会館を取り壊すが、大部分は緑地や通路となっていた区域であった。この区域では、これ以前にも給水管敷設などの際に立会調査を実施し、江戸時代の遺構面が良好に残されていることが判明していた。江戸時代の遺構面までの深さは、おおむね現地表から60cm程度と見込まれていた。

新たに建設される建物は、木造平屋建のため、基礎杭は打たず、平基礎の形で建築されることとなった。増築建物は、既存食堂と床レベルを合わせる必要があったため、現地表より設計床レベルが、かなり高くなかった。そのため、基礎掘削は比較的浅く済み、新しい盛土の範囲内におさまる深さで計画することが可能となった。建設場所は、西側が高く、東側に向かってごく緩やかに傾斜して下っている。西側は、江戸時代の遺構検出面の近くまで掘削されるが、遺構面までは達しない見込みであった。東側では表層を除去する程度か、ほとんど掘削されないこととなった。

これら工法について施設部担当者と協議する一方、対処方針について、仙台市教育委員会文化財課と協議を行った。今回の建築工事では、江戸時代の遺構面は削平されない見込みであったが、木造平屋建ではあるものの恒久的な建造物である。鉄筋コンクリート造りの建物よりは、耐用年数はかなり短くなるが、仮設的な建物とは言い

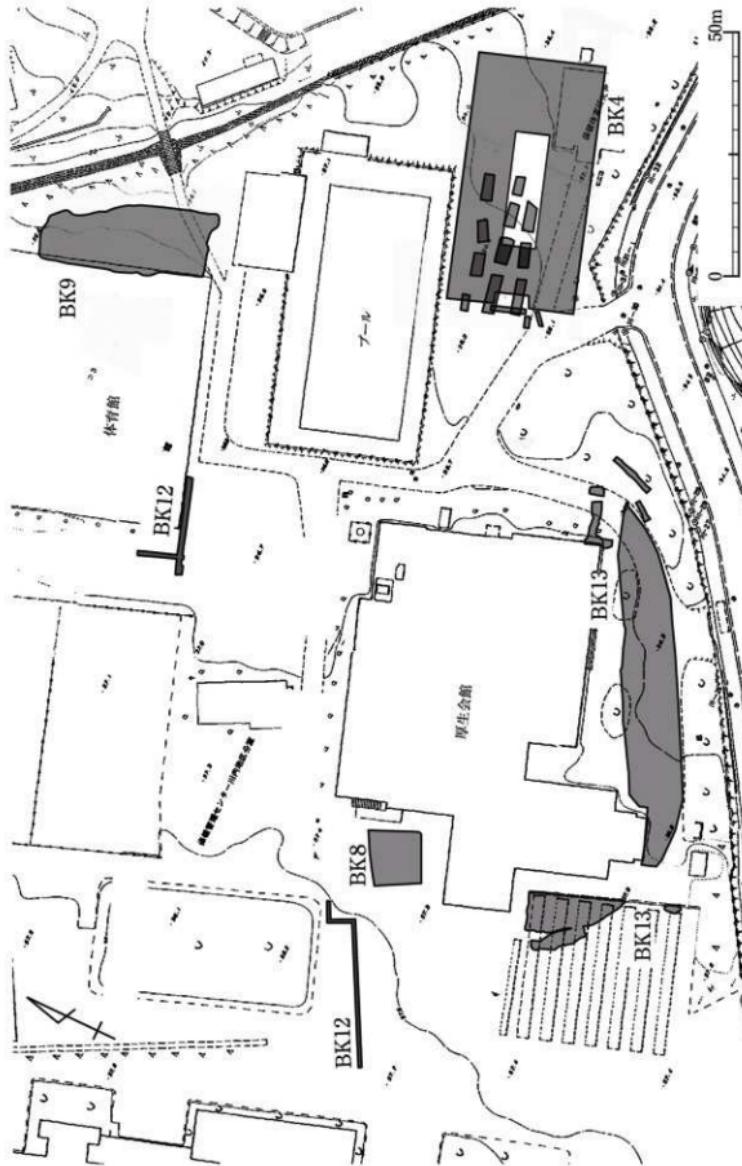


図6 武家屋敷地区第13地點調査区の位置  
Fig. 6 Location of BK13 (BK13 i.e. Location 13 of samurai residence)

難いものであった。そのため、事前調査の範囲をどこまでとするか、仙台市教育委員会と協議して検討を行った。その結果、増築建物の範囲全体を調査対象として、江戸時代の遺構面を検出して、基礎工事の深さとの関係を確認する。その上で、遺構の分布状況や種類、遺構の埋土の深さなどを調査して、遺構埋土をどこまで掘り上げて調査するかを検討していくこととした。

増改築工事に関わる、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事については、地下の遺構を破壊しないために、できるだけ掘削深さが浅くなるよう、施設部担当者に依頼して、設計の際に配慮していただいた。そのためほとんどの工事は、江戸時代の地層に影響を与えない、新しい盛土の範囲におさまる深さとなった。しかし、污水・雨水排水管の一部については、江戸時代の遺構確認面まで、工事による掘削が達することが予想された。そのため、工事による掘削の際に調査室担当者が立会調査を行い、必要な部分は工事を中断し、本調査を実施する体制を組むこととした。

### 3. 調査の方法と経過

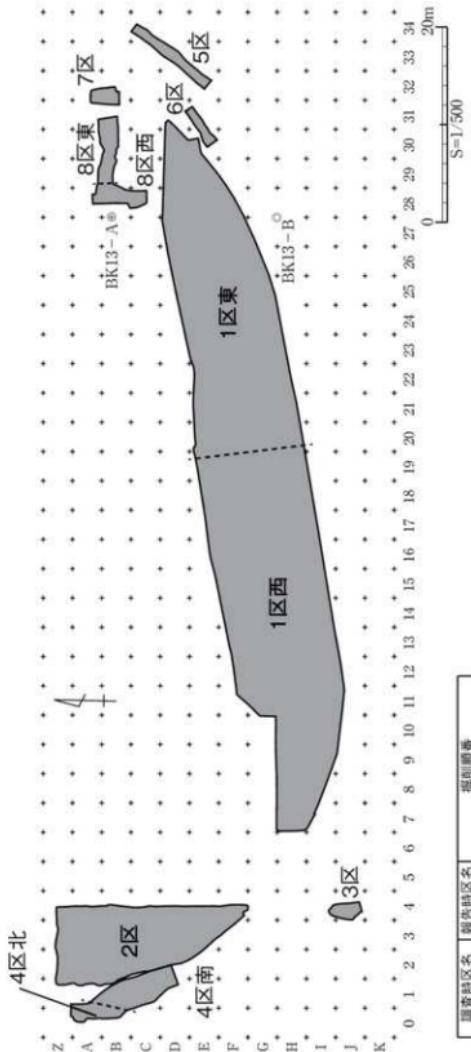
#### (1) 発掘調査の経過

調査区対象範囲は、建物本体の建築範囲と、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事範囲に大きく分けられる。増改築工事は、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されるため、工事に先立って2008年度に建物本体部分の調査を実施した。付帯工事部分については、工事が実施される2009年度に調査を行うこととした。なお調査区の名称は、調査時点での名称では、ややわかりづらいため、報告書作成段階で整理した。遺物に付された注記は、調査時点での調査区名となっている。そのため、以下に調査時点の調査区名と、本報告での調査区名を示しておく。

建物本体部分	本体区	→	1区
	本体西区	→	2区
付帯工事部分	西1区	→	3区
	西2区	→	4区北
	西3区	→	4区南
	東1区	→	5区
	東2区	→	6区
	東3区	→	7区
	東4区	→	8区東
	東5区	→	8区西

2008年度に実施した本体部分の合計の調査面積は774.8m<sup>2</sup>である。既存厚生会館が南側に突出している場所をはさんで、本体部分の調査区は2ヶ所に分かれる（図7）。東側の主要な調査区を、1区とした。1区は、排土置場が他に確保できないことから、半分づつ調査を行うこととした。西側半分（1区西）を先行して調査し、それが終了した後に、東側半分（1区東）を調査した。1区では、遺跡の保存状態は比較的良好であった。1区の調査は、9月1日から12月26日の期間で実施した。既存建物の西側は、2区とした。既存建物の西側に、メタセコイヤが植樹されており、安全確保の関係から、これらを伐採してから調査を行う必要があった。メタセコイヤの伐採は、建築工事にまとめて発注することになった関係で、それらの準備が整った、3月4日から31日に調査を実施した。2区は、戦前の陸軍第二師団時代のレンガ基礎、戦後の米軍時時代のコンクリート基礎が広い範囲で見られ、遺跡の保存状態はあまり良好ではなかった。

調査にあたっては、明治時代の陸軍第二師団の時期と考えられる層序より上位を、1層・搅乱として一括し、重機によって除去した。重機で除去しきれなかった第二師団期以降の盛土と、搅乱の埋土については、手掘りに



調查點名	調查點名	攝影時間												日本測地系												世界測地系											
		本体測量			1回目			2008年9月			Y座標			X座標			Y座標			X座標			Y座標			X座標			Y座標			X座標					
本体区 東半分	1区南	本体測量	1回目	2008年9月	BK13-A	+100	-100	±0	-193456.09	+2044.83	-193457.87	+1744.50																									
本体区 東半分	1区東	本体測量	2回目	2008年11月	BK13-B	+100	-100	±0	-193440.02	+2000.27	-193441.69	+1739.37																									
本体区 西半分	2区	本体測量	3回目	2009年3月																																	
付帶西 1区	3区																																				
付帶西 2区	4区北																																				
付帶西 3区	4区南																																				
付帶東 1区	5区																																				
付帶東 2区	6区																																				
付帶東 3区	7区																																				
付帶東 4区	8区北																																				
付帶東 5区	8区南																																				

調查點名	調查點名	本体測量	1回目	2008年9月	日本測地系	世界測地系
付帶東 1区	5区	付帶工事掘削		2009年6月		
付帶東 2区	6区					
付帶東 3区	7区					
付帶東 4区	8区北					
付帶東 5区	8区南					

圖7 武家屋敷地區第13地點調查區模式圖  
Fig. 7 Pattern diagram of location at BK13

よって除去した。二の丸北方武家屋敷地区の調査では、明治時代初頭の畠の耕作土と考えられる地層が、各所で確認されている。今回の調査においても、調査区の東側で、類似した地層（A層）が分布していた。1区では、調査区内に使用中の給水管があり、これらについては残して調査を実施せざるを得なかった。A層の分布範囲に、この給水管がかかっており、そのため充分な検討ができるないが、層相から明治時代初頭の地層に類似すると考えられる。このA層については、手掘りで掘り下げる調査を行っている。

1区では、遺構密度は高く、多数のピットが検出された他に、大型の溝、大型の掘り込みを持つ遺構や、沢状の遺構などが確認された。2区では、大型の掘り込みを持つ遺構などが確認された。遺物は、陶磁器・土器類、瓦などコンテナ16箱分が出土した。

1区・2区の調査の結果、遺構面まで基礎工事に伴う掘削が及ばないことが確実となった。また、大型の遺構は、部分的に埋土の掘り下げを行ったが、現地表面より2mを越える深さとなるものも存在することが判明した。これらの遺構を全て掘りあげて調査すると、地耐力が落ちることから基礎杭を打たざるを得なくなり、結果的に遺構の破壊が避けられなくなることが明らかとなった。また、限られた範囲内で、2mを越える深さの遺構を調査することは、安全性の面から困難であった。これらの状況を勘案し、遺構の掘り下げは一部にとどめることとした。検出遺構の記録作成後、山砂を約10cmの厚さで全面に敷き、その上に排出土を埋め戻した。

付帯工事部分では、工事による掘削に調査室担当者が立会調査を行い、必要な部分で調査を実施した。調査を実施した順序にしたがって、増築建物の西側を3区・4区、東側を5～8区とした（図7）。本調査を実施した面積は、449m<sup>2</sup>であった。これ以外の部分については、工事による掘削が江戸時代の地層に及ばないことが確認されたため、立会調査で調査を終えている。本調査は、6月15日からの8月5日までの期間に、断続的に実施した。それ以降は、立会調査のみである。

付帯工事部分では、工事による掘削される深さまで調査を行うことを基本とした。工事による掘削が、遺構確認面でとどまる場合には、遺構プランの確認までにとどめている。遺構埋土まで掘削が及ぶ場合には、遺構埋土を掘り上げて調査を行っている。調査範囲が狭いこともあり、検出された遺構はさほど多くなかった。遺物は、江戸時代の陶磁器類や瓦などが、2箱出土した。

今回の調査では、出土物の置き場の関係から現地に余裕が無く、安全の確保が難しいことから、現地説明会などの一般向けの公開は行っていない。

## （2）記録方法

調査にあたっては、既存の厚生施設の方向に合わせて、3mグリッドを作成した（図7）。A～27区の南東コーナーを原点として、グリッドラインに沿って局地座標を設定し、実測作業は局地座標を利用して行った。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図7に示した。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で17°52'00"西偏している。

B K13-A	局地座標 X = - 1.000	日本測地系 X = - 193,456.609	世界測地系 X = - 193,147.877
	Y = ± 0.000	Y = + 2,044.493	Y = + 1,744.595
B K13-B	局地座標 X = - 18.000	日本測地系 X = - 193,440.429	世界測地系 X = - 193,131.697
	Y = ± 0.000	Y = + 2,039.277	Y = + 1,739.379

なお、本年報にも掲載した、縮尺500分の1地形図などは、旧来の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国土座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとしている。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示している。

今回の調査では、遺構の掘り込みは一部にとどめたため、多くの遺構はプランの確認状況で記録を作成することとなった。本体部分の1区西と1区東の平面図については、写真測量によって作成した。作業は国際文化財株

式会社に委託して、ラジコンヘリによる空中写真撮影と、空撮写真による写真測量を行っている。断面図については、手作業によって実測作業を行った。これ以外の本体部分2区と付帯工事の3~8区については、全ての記録図面を手作業によって作成している。

記録写真は、35mmフィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。1区西・1区東の全景写真では、6×7のカラーリバーサルとモノクロ写真も撮影している。ラジコンヘリによる空撮では、6×6のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

#### (3) 遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回使用した遺構名称は、次の通りである。

##### 遺構・建物・柱列・溝・井戸・ピット

従来は、比較的大型の掘り方を有する遺構については、「土坑」との名称を使用してきた。の中には、池状を呈する大型のものから、比較的大型のピットと呼べるようなものまで、規模の面でも性格についても、様々なものが想定される遺構が含まれている。そのため、一定の性格を想定させる呼称を避け、比較的大型の遺構を一括する呼称として、「@号遺構」との呼称を採用することとしている。従来は土坑と呼んでいたような遺構も、基本的に「@号遺構」と呼称することとした。4号遺構は、沢状の遺構と考えられるが、特に名称を変更していない。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。

表4・5に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、ピット以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表6に掲げておく。

#### (4) 遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当調査室の調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、陸軍第二師団の時期以降と考えられる層序は、1層・搅乱として一括している。これより下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。1層・搅乱として一括した層序から出土したものについては、明らかに近現代に下るものについて、遺物を回収した。ただし、1層・搅乱出土の瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や

線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土壤が付着したままでは判別が難しいので、現地で土壤をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

#### (5) 整理作業

東北大学埋蔵文化財調査室での整理作業と報告書刊行については、経費は全学的基盤経費として、毎年度ほぼ一定額が割り当てられている。調査の事業量は年度により多寡があるため、大きな滞りをきたすことなく調査報告書を作成できるよう、各年度に実施する整理作業を平均化して計画的に実施することとしている。武家屋敷地区第13地点の出土遺物は、整理作業前の段階で、本体部分で16箱、付帯工事部分で2箱で、比較的小なものであった。他の調査の整理作業が残っていたことから、整理作業は2010年度から開始することとなった。併行して、他の調査の整理作業も進めため、2010年度から2012年度の3ヶ年を整理作業期間とし、2012年度に報告書を刊行することとした。

2010年度は、遺構図面の整理・トレース、遺構写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・分類・集計の一部と写真撮影などの作業を実施した。2011年度は、出土遺物の集計、実測図作成、トレース、磁器の文様のデジタル写真からの図化、写真撮影などの作業を実施した。2012年度は、遺物観察表の作成、図版レイアウト、原稿作成、編集などの作業を行った。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージジャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行った。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。そのため本報告書でも、遺物の種類ごとに事実記載を行うこととした。遺物の各種類ごとの分類基準などについては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：C J 陶器：C T 軟質施釉土器：C N

土師質土器：C H 瓦質土器：C G 土製品：C O

瓦：T（古代の瓦を含む）

古銭：M C 古銭以外の金属製品：M O

石器・石製品：S ガラス製品：G

今回の武家屋敷地区第13地点の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も少数ではあるが出土している。東北大学埋蔵文化財調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、武家屋敷地区第13地点から出土した遺物についても、当調査室で保存処理を行っている。

## 第Ⅲ章 基本層序と時期区分

### 1. 基本層序

今回の調査では、現代の表土層および陸軍第2師団期以降の近代の整地層を1層とし、それを除去した段階で遺構確認を行なった。遺構の内容確認以外には、それ以下の層の掘り下げは行なっていない。ほとんどの区では1層除去段階で地山が現れたが、1区東・6区・8区等では、1層直下に黄褐色のブロックを含む褐色あるいは暗褐色のシルトを主体とした層を確認した。各区で細かな特徴は異なるが、共通する様相が認められるため、この層をA層と命名した（図23）。さらに、1区東・8区ではA層の下位で、にぶい黄褐色のシルト層を確認した。そのため、A層をA1層とA2層と細分した。

A1層からは、磁器158点等が出土しており、その出土遺物量は多い（表8～13）。これらのうち時期が判明した遺物には、17世紀後半の中碗丸の磁器（CJ035）から、19世紀前～中葉の土瓶蓋（CT044）まであり、ばらつきがある。このA1層の層相・出土遺物の時期等から、この層は当調査区の50m程東の地点にて確認した明治初頭に形成されたと考えられる層に類似する（BK4の4層：調査年報13）。また、A2層は6区・8区のみ掘り下げを行った。1区東のA2層は、遺構が検出されたため、完全に掘り下げていない。8区からの出土遺物の様相は、A1層とほぼ変わらず、類似する傾向を示す。

### 2. 遺構の変遷段階の設定

全ピット210基のうち63基（30.0%）を建物、柱列として認定した。認定した建物数は5棟、柱列数は5基であった。建物は、それほど大きくななく、最大で東西5間、南北3間（2号建物）となる。柱列は、全てが東西南方向に並び、そのほとんどは1号溝に並行する。

建物・柱列とその他の遺構の重複関係から、遺構の相対的な順番を導き出した。また、建物の軸角度を0.5°刻みで計測し、その角度を算出した。この軸角度、遺構配置、重複関係、出土遺物等からI～Ⅲ期の各期を設定した（図8）。また、Ⅱ期は遺構の重複関係と1号溝との関係からⅡa期とⅡb期に細分した。重複関係等からⅢ期以降と考えられる遺構も存在したが、これはⅣ期とした。

建物・柱列以外の147基（70.0%）のピットは、出土遺物と遺構の切り合い関係から、I期3基、I～Ⅱa期19基、I～Ⅲ期56基、I～Ⅳ期44基、Ⅱa～Ⅳ期13基、Ⅲ期9基、Ⅲ～Ⅳ期3基となる。

### 3. 各期の推定時期

各遺構の確認面は、ほとんどが地山や遺構埋土であるが、A2層を確認面とする遺構・ピットも存在する。その遺構は、5号建物、6号遺構のほか、ピット164～168、171、172、177、178、183となる。これらの遺構のうち、時期が判明する遺物が出土しているのは、6号遺構とピット164である。6号遺構では19世紀前～中葉の磁器（CJ021）、ピット164では19世紀中～後葉の時期となる陶器（CT028～031）が出土している。これらの遺物は埋土最上位からの出土であり、その後に形成されるA1層の推定形成時期と整合的である。また、A2層の形成時期は、この層がA1層と層相が類似するため、一連のものである可能性は高い。そう考えるならば、A2層を確認面とする遺構は、A1層形成直前の短期間に構築された遺構であると考えることができる。各期の遺構からの出土遺物は、下記の通りである。

I期：2区の8号遺構からは、16世紀後半～17世紀前半の中国産磁器（CJ001）、17世紀初頭の陶器（CT001）が出土している。

II期：1区西の1号遺構b（Ⅱa期）の埋土から18世紀の陶器（CT002）が出土している。その他の遺構からの出土遺物は無い。

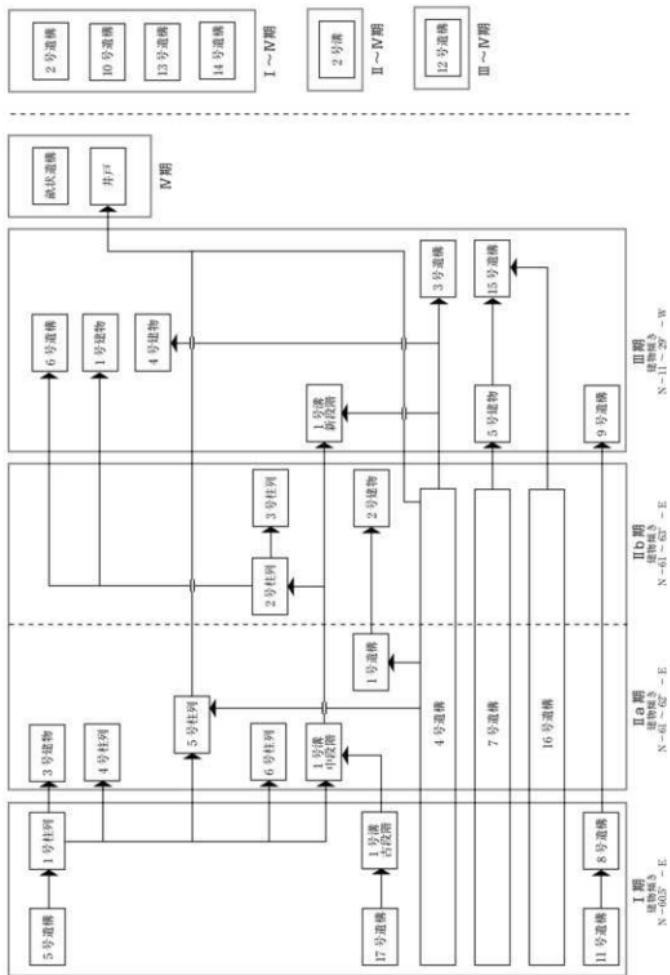


圖 8 武家匯鄉地區第 13 地點遺構變遷模式圖  
Fig. 8 Transition of features at BK13

表4 武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表(1)  
Tab. 4 List of the features name which are collated at BK13 (I)

現場名称	確定名称	備考	時期
なし	1号建物	個別ピット番号	III
なし	2号建物	個別ピット番号	II b
なし	3号建物	個別ピット番号	II a
なし	4号建物	個別ピット番号	III
なし	5号建物	個別ピット番号	III
なし	1号柱列	個別ピット番号	I
なし	2号柱列	個別ピット番号	II b
なし	3号柱列	個別ピット番号	II b
なし	4号柱列	個別ピット番号	II a
なし	5号柱列	個別ピット番号	II a
なし	6号柱列	個別ピット番号	II a
1号溝	1号溝	古・中・新段間に分かれれる	I - III
2号溝	2号溝		I - IV
1号遺構	1号遺構		II a
2号遺構	2号遺構		I - IV
3号遺構	3号遺構		III
4号遺構	4号遺構		I - II
5号遺構	5号遺構		I
6号遺構	6号遺構		III
7号遺構	7号遺構		I - II
8号遺構	8号遺構		I
9号遺構	9号遺構		III
付帯西2区遺構	10号遺構		I - IV
付帯西2区遺構	11号遺構		I
9号遺構	12号遺構	9号遺構より分離	III - IV
付帯西1区遺構	13号遺構		I - IV
付帯東4区遺構	14号遺構		I - IV
Pit180	15号遺構		III
Pit188	16号遺構		I - II
1号溝	17号遺構	1号溝より分離	I
烟跡	畝状遺構		IV
井戸	井戸		IV

Ⅲ期：遺物が出土した遺構は比較的多い。6号遺構からは、先述の通り19世紀前～中葉の磁器(CJ021)のほか、19世紀初頭～中葉の陶器(CT023)、が出土している。3号遺構からは19世紀の小中鉢破片1点(CT022)が出土した。15号遺構からは、19世紀前～中葉を主体とする陶磁器群が出土している(CJ023～026、CT025～027)。9号遺構の埋土2層(図25①)からは19世紀中～後葉の磁器(CJ22)が出土している。

今回の調査では、遺構を完全に掘り下げてはいないため、出土遺物の大体は埋土上層からの出土である。従って、この遺物は、遺構埋没時の時期を示している。また、Ⅲ期の建物の軸角度は、それまでの統一的な有り様とは様相が非常に異なることから、明治初頭まで下がる可能性が高い。このような状況から、Ⅲ期は明治初期頃の年代と考え、Ⅰ期は17世紀、Ⅱ期は18世紀から幕末までと幅広い時期を想定した。またⅣ期は、A1層が形成された時期となり、明治初期から陸軍関係の建物整備が始まる明治20年前後の年代と捉えた。

表5 武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表(2)  
Tab. 5 List of the features name which are collated at BK13 (2)

ピット番号	確定名称	備考	時期	ピット番号	確定名称	備考	時期	ピット番号	確定名称	備考	時期
1	6号柱列柱1		II-a	76	1号建物柱4		III	151			I
2			I-IV	77	1号建物柱5		III	152			I-IIa
3	2号柱列柱5		II-b	78			I-IV	153			I-IV
4	3号柱列柱2		II-b	79			I-IV	154	2号建物柱7		II-b
5	3号柱列柱3		II-b	80	2号柱列柱3		II-b	155			II-a, IV
6	2号柱列柱6		II-b	81			I-IV	156			II-a, IV
7	3号建物柱3		II-a	82			I-IV	157			II-a, IV
8			I	83			I-IV	158	欠番		-
9			I-III	84			I-IV	159			I-III
10			II-a, IV	85	2号柱列柱1		II-b	160			I-III
11			II-a, IV	86	2号柱列柱2		II-b	161			I-IV
12	3号建物柱4		II-a	87	3号柱列柱1		II-b	162			I-III
13	2号柱列柱7		II-b	88	1号柱列柱2		I	163	5号建物柱5		III
14	2号柱列柱4		II-b	89	4号柱列柱2		II-a	164			III
15			I-IIa	90			I-IV	165			III
16			I-IV	91	4号柱列柱1		II-a	166			III
17			II-a, IV	92			I-IIa	167			III
18	5号柱列柱1		II-a	93			II-a, IV	168			III
19			I-IIa	94			II-a, IV	169	5号建物柱3		III
20			I-IIa	95	3号建物柱1		II-a	170			III
21			I-III	96	欠番	ピット88と統一	-	171			III
22			I-III	97	1号柱列柱1		I	172			I-III
23	1号柱列柱4		I	98	欠番	ピット97と統一	-	173			I-III
24	5号柱列柱2		II-a	99	6号柱列柱2		II-a	174			I-III
25	1号柱列柱7		I	100			I-III	175			I-III
26			I-III	101			II-a, IV	176			I-III
27			I-III	102	6号柱列柱3		II-a	177			III
28			I-III	103	1号柱列柱3		I	178			III
29			I-III	104	欠番	ピット103と統一	-	179	5号建物柱4		III
30			I-III	105			I-IV	180	欠番	15号遺構に変更	-
31			I-III	106	4号建物柱4		III	181			I-III
32			II-a, IV	107			I	182			I-III
33			I-IIa	108	2号建物柱5		II-b	183			I-III
34	4号柱列柱5		II-a	109	2号建物柱8		II-b	184			I-III
35			I-III	110			I-IIa	185	5号建物柱6		III
36	1号柱列柱6		I	111			I-IV	186			I-III
37			I-III	112			III	187			I-III
38			I-IV	113	4号建物柱2		III	188	欠番	16号遺構に変更	-
39	2号建物柱3		II-b	114	4号建物柱3		III	189			I-IV
40	1号柱列柱8		I	115	5号柱列柱4		II-a	190			I-IV
41			I-III	116			I-IV	191			I-III
42			I-III	117			I-IV	192	5号建物柱1		III
43	1号柱列柱5		I	118	2号建物柱4		II-b	193			I-III
44	4号建物柱1		II-b	119	2号建物柱6		II-b	194			I-III
45			I-III	120			I-IV	195			I-III
46			II-N	121	2号建物柱9		II-b	196			I-III
47			I-III	122			I-IV	197			I-III
48	欠番	ピット23と統一	-	123			I-IIa	198	5号建物柱2		III
49			I-III	124	5号柱列柱6		II-a	199			I-IV
50			I-III	125			I-IV	200			I-IV
51			I-III	126	5号柱列柱5		II-a	201			I-IV
52			I-III	127			I-IV	202			I-IV
53			I-III	128			I-IV	203			I-IV
54			I-III	129			I-IV	204			I-IV
55			I-III	130			I-IV	205			I-IV
56			I-III	131			I-IV	206			I-IV
57			II-a, IV	132	5号柱列柱7		II-a	207			I-IV
58	3号建物柱2		II-a	133			I-IV	208			I-IV
59	6号柱列柱4		II-a	134			I-IV	209			I-IV
60			I-III	135			I-IV	210			III-IV
61			I-IIa	136			I-IV	211			I-IV
62			I-III	137			I-IIa	212			I-III
63			I-III	138			I-IIa	213			I-III
64	欠番	ピット36と統一	-	139			I-IIa	214			I-III
65			I-IV	140			I-IIa	215			I-III
66	欠番	ピット43と統一	-	141			I-IIa	216			I-III
67	4号柱列柱3		II-a	142			I-IIa	217			I-III
68			I-IIa	143			I-IIa	218			I-III
69	1号建物柱3		II-a	144			I-IIa	219			I-III
70	2号建物柱1		II-b	145			II-a, IV	なし	4号柱列柱4		III
71			I-IIa	146			II-a, IV				
72	1号建物柱2		II-a	147			I-IV				
73	1号建物柱1		II-a	148			I-IV				
74	1号建物柱6		II-b	149	5号柱列柱3		II-a				
75	2号建物柱2		II-b	150	1号柱列柱9		I				

表6 武家屋敷地区第13地点時期別遺構一覧表  
Tab. 6 List of all features divided in period at BK13

確定名称	現場名称	備考	確定名称	現場名称	備考
<b>I期</b>					
1号柱列	なし	個別ピット番号	1号建物	なし	個別ピット番号
5号遺構	5号遺構		4号建物	なし	個別ピット番号
8号遺構	8号遺構		5号建物	なし	個別ピット番号
11号遺構	付帯西2区遺構		3号遺構	3号遺構	
17号遺構	1号溝		6号遺構	6号遺構	
1号溝古段階	1号溝		9号遺構	9号遺構	
<b>I～II期</b>					
4号遺構	4号遺構		15号遺構	Pit180	
7号遺構	7号遺構		1号溝新段階		1号溝
16号遺構	Pit188		<b>II～IV期</b>		
<b>I～IV期</b>					
2号遺構	2号遺構		12号遺構	9号遺構	9号遺構より分離
10号遺構	付帯西2区遺構		<b>IV期</b>		
13号遺構	付帯西1区遺構		歯状遺構	細跡	
14号遺構	付帯東4区遺構		井戸	井戸	
<b>IIa期</b>					
3号建物	なし	個別ピット番号			
4号柱列	なし	個別ピット番号			
5号柱列	なし	個別ピット番号			
6号柱列	なし	個別ピット番号			
1号遺構	1号遺構				
1号溝中段階	1号溝				
<b>IIb期</b>					
2号建物	なし	個別ピット番号			
2号柱列	なし	個別ピット番号			
3号柱列	なし	個別ピット番号			
1号溝中段階	1号溝	個別ピット番号			
<b>II～IV期</b>					
2号溝	2号溝				

表7 武家屋敷地区第13地点遺構属性表  
Tab. 7 Attribute of the features at BK13

①建物・柱列

建物名	区名	角度	面積 (東西×南北)	尺	時期	古い遺構	新しい遺構
1号建物	F・G-12	N-29°-W	1×2	6尺3寸半	III	2号建物、ピット71	
2号建物	F-12・13, G-12~14	N-63°-E	5×3	6尺3寸半	II b	1・4号遺構、1号柱列、ピット71・110・123・151	1・4号建物
3号建物	G-11, H-9・10	N-62°-E	4×1	4尺	II a	1号柱列、ピット8・61	ピット10・11・57・93・94・101
4号建物	G-13, H-12・13	N-185°-W	2×4	6尺3寸半	III	4号遺構、2号建物、ピット45・151	ピット46
5号建物	D~G-25~27	N-11°-W	2×4	6尺3寸	III	7号遺構	ピット168
1号柱列	G-12・13, H-8・13, I-8	N-60.5°-E	8	6尺3寸	I	5号遺構、ピット8・107・151	1号溝、2・3号建物、2・6号柱列、ピット2・15・20・38・48・65・68・92・100・148
2号柱列	H-8~11, I-9	N-61°-E	6	4尺	II b	5号遺構、1号溝、1号柱列	3号柱列
3号柱列	H-8~11	N-62°-E	5	4尺	II b	5号遺構、1・2号柱列	
4号柱列	H-9~12	N-62°-E	5	6尺3寸	II a	1号柱列、ピット68・92	
5号柱列	G-13~16, H-11~13	N-61°-E	13	6尺3寸半	II a	4号遺構、1号柱列、ピット19・107・139・151	
6号柱列	H-7~10, I-7	N-62°-E	7	4尺	II a	1号柱列、ピット61・100	

②遺構

名称	時期	区名	形状	面積 (m <sup>2</sup> )	規模 (長軸× 短軸) (m)	確認面	古い遺構	新しい遺構
1号遺構	II a	G-12・13	長方形	8.3	5.1×1.8	地山	4号遺構、ピット151	2号建物
2号遺構	I~IV	H-7~8	楕円形?	1.8	(4.2)×(0.8)	地山	5号遺構、ピット105	ピット81・82・90
3号遺構	III	F-13~15, E-15~16	不明	4.2	(8.1)×(1.3)	4号遺構埋土	4号遺構	ピット112
4号遺構	I~II	D-23~25, E-15~25, F-13~25, G-13~19, H-14	方形	170.6	37.2×(6.0)	地山		1・3号遺構、2・4号建物、5号柱列、ピット45・110・112・120・122・123・125・128~131・133~136・138・140~145・147・153・161・189・190
5号遺構	I	H-7~9	方形?	5.9	5.0×(2.3)	地山		2号遺構、1号溝、1~3号柱列、ピット20・78・79・84・105
6号遺構	III	E・F-28~29	不明	1.7	(1.5)×(1.1)	A2層上面		
7号遺構	I~II	D・E-27~29	楕円形	6.5	(7.3)×(1.7)	地山	ピット184	
8号遺構	I	Z-2~4、A・B-0~4、C-1~3・4	不明	47.4	(11.2)×(9.1)	地山		9号遺構、ピット199~208
9号遺構	III	C-1~4、D-2~4	不明	8.3	(8.2)×(2.9)	地山	8号遺構	12号遺構、ピット210
10号遺構	I~IV	A-0	不明	0.2	(1.2)×(1.1)	地山	8号遺構	
11号遺構	I	B-0	不明	0.1	(0.5)×(0.3)	地山		8号遺構
12号遺構	III~IV	C・D-1・2	不明	1.0	(2.0)×(1.2)	地山	9号遺構	
13号遺構	I~IV	J-4	不明	0.3	(0.7)×(0.5)	地山		
14号遺構	I~IV	B-30~31	不明	2.3	(2.2)×(1.4)	地山		
15号遺構	III	D-26, E-26~27	不正方形	8.0	32×31	地山	ピット188~191~193	
16号遺構	I~II	D-25~26	円形	1.7	2.2×(0.8)	地山		
17号遺構	I	J-11~12	不明	1.4	(1.3)×(1.1)	1号溝古段階埋土		1号溝古段階

\*規模の( )は残存長を示す。

③溝

名称	時期	区	方向	最大幅 (m)	長さ (m)	面積	確認面	古い遺構	新しい遺構
1号溝	I~III	F-19~22, G-15~22, H-8~22, I-8~16, J-9~13	N-81.5°-E	6.0	44.8	136.4	地山	4・5・17号遺構、1号柱列、ピット17・20・32・33・140・143・144・152	2号柱列、ピット145・155~157
2号溝	I~IV	A-2	N-8.7°-W	0.5	2.4	0.9	8号遺構埋土	8号遺構	

## 第Ⅳ章 検出遺構

本章では、検出遺構を区ごとに説明する。1区西は平面図を2つに分けた（図9・13）。1号溝と4号遺構以外の遺構は、そのほとんどが西側に位置する（図9）。これら複数の遺構の重複関係から、比較的明瞭に遺構の時期的変遷を捉えることができた（図10）。そのため、1区西に関しては時期ごとに遺構を報告する。それから、遺構が少なく近接している1区東と8区、それから2～4区は、まとめて報告する。なお、5～7区ではピット以外の遺構は検出されなかった。また、1号溝と4号遺構に関しては、1区全体に各期にわたり存続することから、1区東の報告後にまとめた

### 1. 1区西の遺構

#### (1) I期

##### 【1号柱列】（図9、図版6）

地表面、5号遺構上面で検出した。柱間寸法は6尺3寸あり、8間となる柱列である。角度はN-60.5°-Eとなる。柱間寸法から建物である可能性も考えられるが、今回の調査区内には組み合う他の柱痕跡は周囲に認められない。また、5号遺構より新しく、1号溝中段階よりは古い。柱1～6の掘り方は長方形であり、短軸0.6～0.9m、長軸1.5～1.9m程度である。柱7・8では、この掘り方は明確に検出できなかった。彫り方内南側から柱穴が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、径20～50cmの幅に収まる。また柱2では、径10cmの円形の柱痕跡が認められた。出土遺物は無い。

##### 【5号遺構】（図9、図版12）

地表面にて検出された。2号遺構、1～3号柱列、1号溝跡中段階等より古く、周辺の遺構の中では最も古い。幅5.0m程の方形状となる可能性があるが詳細は不明である。出土遺物は無い。

##### 【17号遺構】（図9、図版14）

1号溝埋土の掘り下げ中に検出した。1号溝古段階は、この遺構埋土を掘り込んで構築されている。埋土は5層確認でき、上層では砂質シルト、下層では粘土となる。とくに砂質シルトの2層では、礫等が多く認められた。出土遺物には瓦2片があるのみで、時期を示す出土遺物は無い。

##### 【2号遺構】（図9、図版10）

そのほか、詳細な時期が特定できずI～IV期とした遺構として2号遺構がある。地表面、5号遺構上面で検出した。北側は調査区外へと伸び、東側は搅乱で破壊されている。残存最大長で4.2m程度ある。出土遺物は無い。I期の5号遺構よりは新しいことから、それ以降の遺構であることは確実である。

#### (2) IIa期

##### 【3号建物】（図9、図版6）

地表面で検出した。柱間寸法は4尺で、4×1間（東西×南北：以下同様）となる。方向はN-62°-Eとなる。柱間寸法からすれば、柱列である可能性もある。1号柱列より新しい。柱1において径20cm程の柱痕跡が認められた。出土遺物は無い。

##### 【4号柱列】（図9、図版7）

地表面、1号柱列上面で検出した。柱間寸法は6尺3寸であり、5間続く。柱間寸法から建物と可能性もある。方向はN-62°-Eとなる。ちょうど1号柱列と対応し並行する様に並ぶ。また、柱4は径30～40cm程の石である。出土遺物は瓦片1点のみである。

##### 【5号柱列】（図13、図版7）

地山面と1号柱列、4号遺構上面で検出した。柱間寸法は6尺3寸であるが、その半間も用いられ13間分並ぶ。4号柱列と同様に、柱間寸法から建物の可能性もある。方向は、N-61°-Eである。1号溝とほぼ並行する。柱1・3・6・7は40~60cm程の（楕）円形を呈するが、柱2・4・5は径20cm程の小さい円形となる。この小さい柱のうち、柱2・4では底面の半分を占める程の大きさの扁平な石が置かれている。また、柱6では10cm程の小さな柱痕跡が検出され、柱7では径20cm程の柱痕跡が残り、その周間に礫が置かれている。柱1・5では柱痕跡は認められないが、礫が多く検出された。陶器片1点、瓦片11点が出土している。

#### 【6号柱列】(図9、図版7)

地山面と1号柱列上面で検出した。柱間寸法は4尺で、7間分続く。方向はN-62°-Eとなる。西端は調査区外へと伸びる。柱穴は径20~50cm程で、柱3では柱痕跡状のものが検出されている。この痕跡は、10cm程の不正円形となり、柱としては不整形である。また、柱2では20~30cm程の大きな礫が壁際に並ぶ。中央に柱があり、それを支えたものと理解できるが、柱痕跡は検出できなかった。瓦片1点のみが出土している。

#### 【1号遺構】(図9・11、図版8・9)

地山面と4号遺構上面において、長方形の石組遺構として検出した。搅乱により西と東が分断されていることから、西側を1号遺構a、東側を1号遺構bとして調査を進めた。そして、内容確認のため、1号遺構a・bの石組内部を四分割し掘り下げた。

周囲に積まれた石組は、10~30cm程の礫を2~3段に積んだものである。楕円形の礫の場合は、小口方向を内側に向けて並べる。それらの礫の一部は、内側に向く面が打ち欠かれ平坦面が形成されている。搅乱を利用し、1号遺構aの石組部の断面を確認した所、裏込めの石等は認められず、石裏側には粘土を詰めている(図11①、図版8・4)。

1号遺構a内部の西側では、砂礫あるいは砂が主体的に堆積し、礫等は少なかった。1号遺構aの東側では、検出面の段階で1号遺構bと区画する礫が確認された。この下部には堆積土が認められ、西側埋土とは異なり粘土ブロックが混じるようなシルト層が堆積していた。

1号遺構bの石組は1号遺構aと変わりない。ただし、北西側の石組は破壊されて存在していない。1号遺構bでは、検出面上に多量の瓦が認められた(図版8-8)。これらの瓦は、面戸付板瓦2点を含む板瓦が主体となっている(図43・44、図版36・37)。埋土からは平瓦を主体として多量に出土している。1号遺構bの埋土は、ほぼ水平に堆積しており、シルト・シルト質粘土等であり、1号遺構a埋土とはかなり異なる。

その1号遺構bの埋土8層は1号遺構aの5層に相当し、1号遺構b埋土10層は13列の1号遺構a埋土5層(図11②)と同じである。この埋土状況から、1号遺構a・bを区画する礫は、1号遺構b埋没後に敷設されたと言える。1号遺構の最終的な段階は、1号遺構aの区画する礫より西側が開口していた状況となり、そこに砂礫層主体の層(1~3層)が堆積したものと考えられる。本報告ではⅡa期と時期比定したが、このように形態を変化させながら、その後の時期まで継続していた可能性が高い。この点については、第VI章にて解釈したい。

出土遺物としては、先述の瓦を含め、154点(54.227g)が出土している。しかし、他の遺物は、磁器3点、陶器2点等非常に少ない。1号遺構b埋土からは18世紀代の陶器(CT002)が出土している。

#### (3) Ⅱb期

##### 【2号建物】(図9、図版6)

地山面、4号遺構上面で検出した。柱間寸法は6尺3寸であるが、半間も用いられ、5×3間の建物となる。方向は、N-63°-Eとなる。1・4号遺構、1号柱列より新しく、1・4号建物より古い。柱1・4・6・9は径20cm程の小形のもので、柱痕跡や礫等は無い。柱2・3・8の埋土には、径10~20cm程の礫が認められる。柱痕跡は、柱7で径20cm程の円形のものが認められた。瓦片13点が出土している。

#### 【2号柱列】(図9、図版7)

地山面、1号溝上面で検出した。柱間寸法は4尺で、6間分となる。方向はN-61°-Eである。5号遺構、1号溝中段階、1号柱列より新しく、3号柱列より古い。1号溝がかなり埋まった段階で構築された遺構であり、II期後半のIIb期とした。柱穴は、全て径20~30cmの梢円形となる。最大で1辺10cm以下の方形の柱痕跡が、柱1・2・4・5・7において検出された。出土遺物は、瓦片1点のみ出土している。

#### 【3号柱列】(図9、図版7)

地山面と5号遺構上面で検出した。柱間寸法は4尺で、5間分となる。方向はN-62°-Eである。5号遺構、1・2号柱列より新しい。柱穴の規模は2号柱列と同様であるが、柱痕跡は無い。出土遺物は、瓦片1点のみ出土している。

#### (4) III期

##### 【1号建物】(図9、図版6)

地山面で検出した。柱間寸法は6尺3寸の半間で、1×2間の小さな建物であるが、未調査区の北側に伸びる。方向はN-29°-Wとなる。2号建物より新しい。おおむね30~40cmの梢円形の柱穴で構成される。柱3では、径10cm程の円形の柱痕跡がある。また、柱6では大形の礫が認められた。出土遺物は無い。

##### 【4号建物】(図9、図版6)

地山面と4号遺構上面で検出した。柱間寸法6尺3寸で、半間を用いた2×4間の小形の建物である。方向は、N-18.5°-Wとなる。4号遺構、2号建物より新しい。径20cm程の円形の柱穴で構成される。柱痕跡、礫等は存在しない。瓦片3点のみが出土している。

##### 【3号遺構】(図13・14③、図版10)

4号遺構上面において不整形な形として検出した。埋土は1層のみである。詳細は不明であるが、形が不整形であること、遺構肩部が緩やかであることから、4号遺構埋土の凹みに堆積した堆積層あるいは4号遺構の埋土の一部である可能性もある。出土遺物は、比較的多い。磁器18点、陶器56点等がある。そのうちの陶器の一つは19世紀に時期比定される(CT022)。

#### (5) IV期

##### 【井戸】(図13、図版12)

1辺3.5m程の方形の掘り方を有し、直径1.3m程の桶を枠とした井戸である。その掘り方上面付近では、太い角材を組み合わせた方形の枠が設置されていた。4号遺構、5号柱列やそのほかのピット類より新しい。これまでの調査からは、このような特徴を持つものは明治時代に限られており、さらに検出された全ての遺構より新しいことから、IV期とした。調査では、この井戸の掘り方壁面で4号遺構の埋土状況等を確認するため、埋土を小型重機で一部掘削した。その際に、方形の井戸枠は撤去し、桶の井戸枠のみを残した状態で止めた。

## 2.1区東・8区の遺構

##### 【5号建物】(図16、図版6)

1区東の地山面で検出した。柱間寸法は6尺3寸となり、2×4間の建物となる。方向はN-11°-Wとなる。7号遺構より新しく、15号遺構より古い。径40~60cm程度の円形に近い形状の柱穴で構成される。このうち、柱3・4は、A2層を確認面としていることから、III期に時期比定した。出土遺物は無い。

##### 【6号遺構】(図20・23、図版12)

1区東のA2層上面で検出した。検出面から礫が多数確認されている。調査面積が狭いため形態等は不明である。

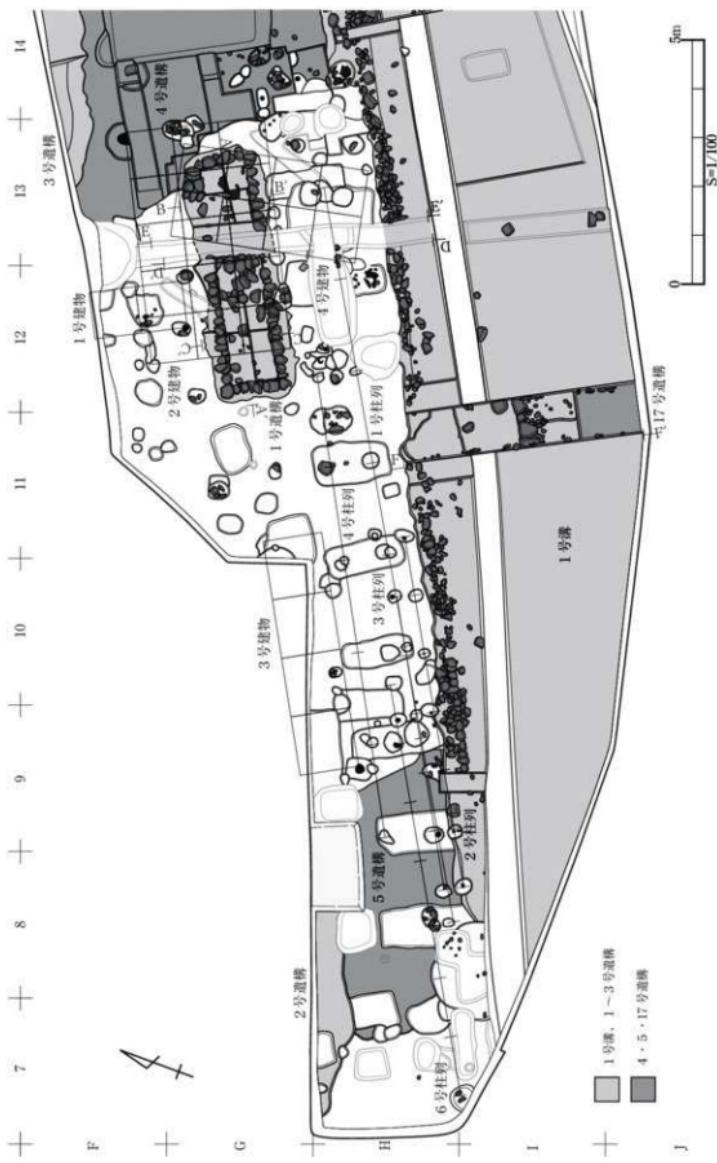


図9 武家屋敷地区第13地点1区画の構構(1)  
Fig. 9 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (1)

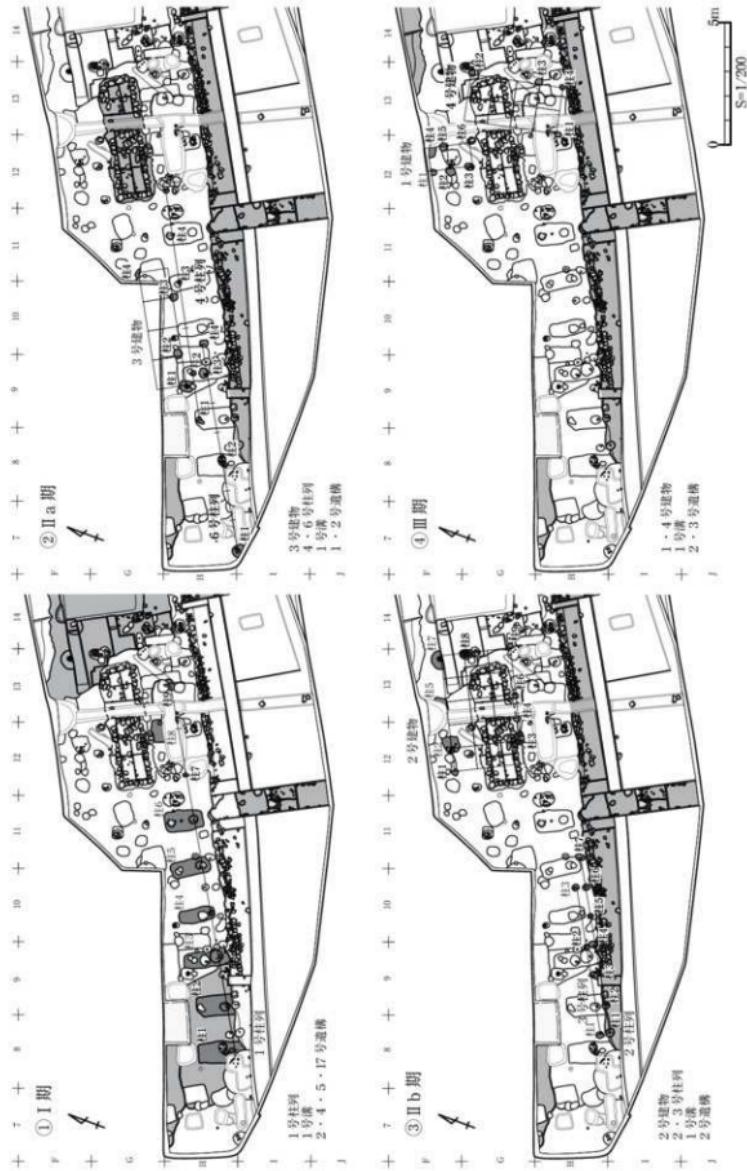
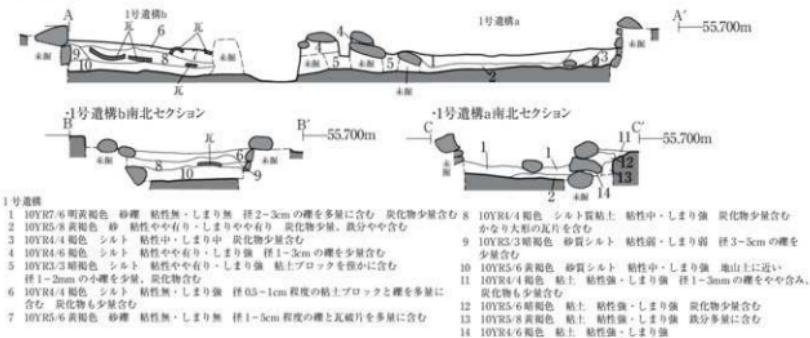
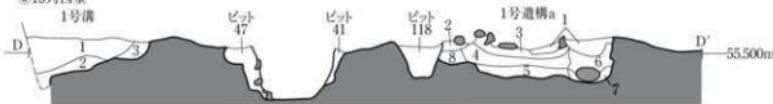


図10 武家屋敷地区第13地点1区西の遺構(2)  
Fig. 10 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (2)

①1号造構



②13列西壁



ピット41 25Y3/2黒褐色 砂質シルト 粘性やや弱・しまり中 全体的に程3~10cm程の小礫を少量含む、灰化物と砂粒を僅かに含む

ピット47 25Y3/3 黄褐色 シルト 粘性やや弱・しまりやや強 黄褐色の鉄分を含む土を僅に僅に含み、灰化物と砂粒を全体的に僅かに含む

ピット118 25Y4/3オーリーブ褐色 シルト質粘土 粘性中・しまりやや強 黃褐色土粒シルトを少量僅に含む 細かい砂粒と程3cm程の小礫を僅かに含む

③13列東壁

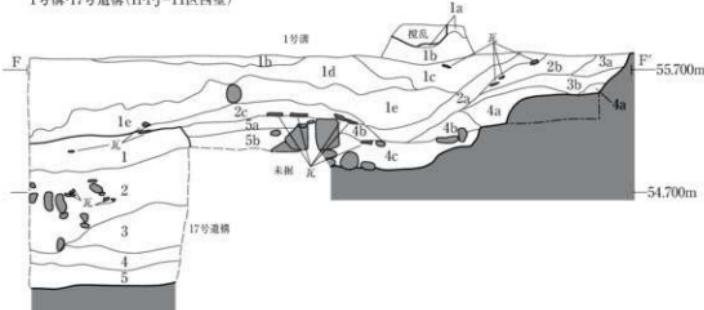


ピット107 25Y4/3オーリーブ褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 にじみ黄褐色粘土を少量僅に含み、灰化物と砂粒を僅かに含む 程5~15cm程の小礫を全般に含む

ピット127 25Y4/6オーリーブ褐色 シルト 粘性中・しまりやや強 程0.5~2cm程の石を僅かに僅に含む

図11 武家屋敷地区第13地点1区西の構造(3)  
Fig. 11 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (3)

1号溝・17号遺構(H-I-J-11区西壁)



## 1号溝

- 1a 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまりやや強 剥オリーブ褐色砂質シルトの土を斑状に含む 白色土粒を極微かに含む  
 1b 25Y3/3 オリーブ褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまり強 剥オリーブ褐色粘土質シルトの土を少量含み 赤褐色の部分と白色土粒を微かに含む  
 1c 25Y3/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 オリーブ褐色粘土土 3cm程の土塊を極少量と炭化物を微かに含む  
 1d 10YR2-2 黒褐色 粘土 粘性やや強・しまりやや強 オリーブ褐色粘土上、剥オリーブ褐色粘土を少量斑状に含む 炭化物と白色土粒を微かに含む  
 1e 25Y3/4 黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 オリーブ褐色粘土質シルトと 黒褐色シルト質粘土を少量斑状に含み 炭化物を極微かに含む  
 2a 25Y4/4 オリーブ褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまりやや強 剥オリーブ褐色粘土質シルトを極少量斑状に含む 小石と炭化物を微かに含む  
 2b 25Y3/3 オリーブ褐色 粘土質シルト 粘性中・しまりやや強 砂粒を微かに含む  
 2c 25Y3/3 オリーブ褐色 砂質シルト 粘性やや弱・しまりやや強 砂質シルトを全体的に少量含む 炭化物を砂粒を極微かに含む  
 3a 25Y4/4 オリーブ褐色 砂質シルト 粘性弱・しまりやや強 黄分を全体的に少量含む 炭化物と砂粒を極微かに含む  
 3b 25Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト 粘性やや強・しまりやや強 黄褐色粘土を少量斑状に含み 小石を少量、炭化物を微かに含む  
 4a 25Y3/4 黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 剥オリーブ褐色粘土を少量斑状に含む  
 4b 25Y3/4 オリーブ褐色 砂質シルト 粘性中・しまりやや強 砂質シルトを所々に含む  
 5a 25Y3/3 剥オリーブ褐色 砂質シルト 粘性中・しまりやや強 砂質シルト質粘土を少量斑状に含む  
 5b 25Y4/2 剥灰黄色 砂質粘土 粘性やや強・しまり中 明黄褐色土を極微かに斑状に含み 砂粒を含む

## 17号遺構

- 1 25Y4/2 剥灰黄色 砂質シルト 粘性やや弱・しまりやや強 小石を含む  
 2 25Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト 粘性やや弱・しまりやや強 炭化物を極微かと。瓦の破片を部分的に多量に含む  
 3 25Y4/2 剥灰黄色 砂質シルト 粘性中・しまりやや弱 オリーブ褐色粘土上、灰褐色シルト質土を解下部に含む  
 4 25Y4/3 オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 オリーブ褐色シルト質土を少量斑状に含む  
 5 25Y4/4 黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 オリーブ褐色粘土を織らに含む

0  
S=1/40 1m

図12 武家屋敷地区第13地点1区西の遺構 (4)

Fig. 12 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (4)

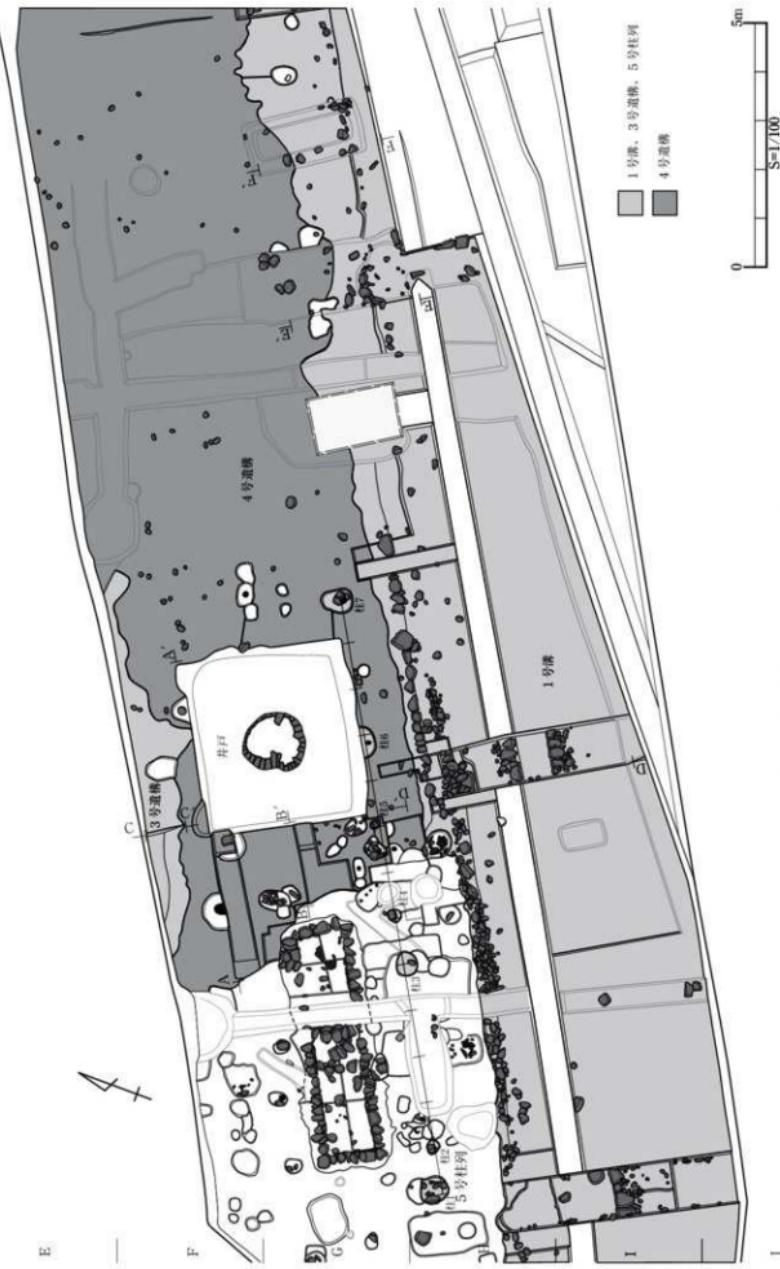
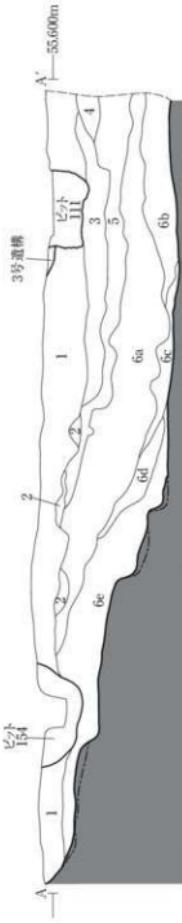


図13 武家屋敷地区第13地点1区西の遺構 (5)  
Fig. 13 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (5)

①4号遺構西端北側



3号遺構 103R23の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

1 103R24の赤褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

2 103R25の赤褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

3 103R26の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

4 103R27の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

5 103R28の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

6a 103R29の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

6b 103R30の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

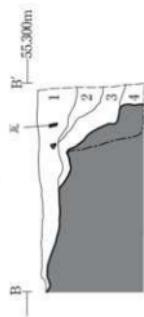
6c 103R31の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

6d 103R32の黒褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化した白色の砂層を含む。風化物を多く含む。

ビット111 103R11の赤褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。風化物を少く含む。

ビット154 103R14の赤褐色。粘土質シルト。粘粒中・しまりやや強。3~5cmの火燐を少く含む。

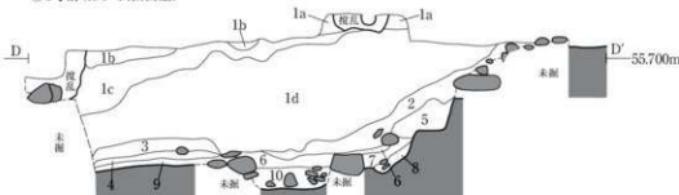
②4号遺構西端南側

4号遺構  
1 103R1の黒と同じ  
2 103R2の黒と同じ  
3 103R3の黒と同じ  
4 103R4の黒と同じ

Im  
S=1/40

Fig. 14 武家屋敷地区第13地点1区西の遺構 (6)  
Fig. 14 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (6)

①1号溝(H-I-14区西壁)



1号溝

- 1a 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 オリーブ褐色シルト質粘土の塊を含む、無機物に白色土粒を含む
- 1b 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまり強 オリーブ褐色粘土と褐色シルト質粘土が混在し少部分で含まれる 無機物を無機物に含む
- 1c 25Y4/2 嘘灰黄色 細 粘性弱・しまり強 オリーブ褐色シルト質粘土を僅に含む、無機物、白色土粒を無機物に含む
- 1d 25Y3/4 嘘灰黄色 粘土 粘性強・しまりやや強・しまりやや強 部分的に鉄分を多く含む、植物の根が多くみられる
- 2 25Y4/2 嘘灰黄色 シルト 質弱・しまりやや強・しまりやや強 部分的に鉄分を多く含む、無機物の塊を多く含む
- 3 25Y3/4 嘘灰黄色 粘土 粘性強・しまりやや強・しまりやや強 部分的に鉄分を多く含む、無機物に鉄分を多く含む、無機物を無機物に含む
- 4 25Y4/2 嘘灰黄色 粘土 粘性強・しまりやや強 黑褐色土と褐色土を僅に含む
- 5 25Y6/2 にぶい黄色 粘土 粘性強・しまり強 褐色シルト質粘土が僅に含む、無機物に混在
- 6 25Y3/2 黒褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 黑褐色土を無機物に含む
- 7 25Y3/3 黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 黑褐色土を少部分に含む
- 8 25Y3/4 黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 黑褐色土と褐色土を僅に含む
- 9 25Y6/4 にぶい黄色 粘土 粘性強・しまりやや強 オリーブ褐色土、ブロックを含む
- 10 25Y4/2 嘘灰黄色 細 粘性弱・しまり弱 小石と共に15cm程の河原石を多く含む

②1号溝(G-18区西壁)



1号溝

- 1 25Y3/2 黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中 黄褐色土を含む にぶい黄褐色土ブロックを多く含む 深3-20cmの縫隙を含む
- 2 10YR5/4 にぶい黄色 粘土 粘性弱・しまり中 黄褐色土と白色土粒を含む 明褐色シルト小ブロックを僅に含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄色 粘土 粘性強・しまり中 黄褐色土を含む 白色土粒を含む
- 4 10YR4/3 にぶい黄色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中 黄褐色土を含む 明褐色土粒を僅に含む
- 5 10YR4/3 黑褐色 シルト 粘性強・しまり中 黄褐色土を含む 白色土粒を含む
- 6 25Y4/3 黄褐色 シルト 粘性強・しまりやや強 白色土粒と黄色土粒を含む

4号造構

- 1 10YR4/3 黄褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 黄褐色土を含む 一部で黄褐色土が解体になる 白色土粒、黄色土粒を含む

ピット144

- 75YR4/4 黄褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 黄褐色土を含む 黄色土粒と白色土粒を多く含む 深2cm程の凹窓を僅に含む 地上に具合有

③1号溝(F-G-19区西壁)



1号溝

- 1 25Y3/2 黑褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 にぶい黄色とオリーブ褐色の粘土ブロックを少量間に含み、黄褐色土を僅に含む
- 2 25Y4/3 オリーブ褐色 シルト 粘性中・しまりやや強 小さな縫隙を僅に含む
- 3 25Y4/3 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや弱 黄褐色土と黄褐色土質粘土を少量間に含み、小さな縫隙と黄褐色土を僅に含む
- 4 25Y4/3 オリーブ褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまりやや強 嘘灰黄色シルト質粘土を少量間に含み、小さな縫隙と黄褐色土を僅に含む
- 5 25Y4/3 オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 黄褐色土が僅に縫隙に混在し、オリーブ褐色土を僅に含む 黄褐色土を無機物に含む
- 6 25Y4/2 嘘灰黄色 粘土 粘性強・しまりやや弱 にぶい黄色土ブロックを僅に含む 小さな縫隙と黄褐色土を無機物に含む、深30cm程の河原石を含む
- 7 25Y4/3 オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 黄褐色土ブロックを少量間に含む 黑褐色土を無機物に含む、黄褐色土を無機物に含む

4号造構

- 1 25Y4/2 嘘灰黄色 シルト質粘土 粘性中・しまりやや強 粘土を部分的に含み、黄褐色土と小さな縫隙を無機物に含む
- 2 25Y4/4 黄褐色 シルト 質粘土 粘性やや強・しまり中 オリーブ褐色土と全體に縫隙に含む
- 3 25Y4/3 オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 黄褐色土を少量部分的に含む 黄褐色土の縫隙に含む
- 4 25Y4/4 オリーブ褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまり中 黄褐色土を全體に縫隙に含む 深0.1-3cmの縫隙を含む

0 1m  
S=1/40

図15 武家屋敷地区第13地点1区西の構造(7)

Fig. 15 Features belonging to west side of area 1 at BK13 (7)

る。出土遺物には磁器9点、陶器17点等がある。そのうち磁器は19世紀前～中葉(CJ021)、陶器は19世紀初頭～中葉(CT023)の年代に比定される。出土遺物と層序関係からⅢ期に時期比定した。

#### 【7号遺構】(図20、図版12)

1区東の地山面で検出した。正確に形状は不明瞭であるが、残存部位からは楕円形を呈するものと考えられる。最大幅で7.3mとなる。5号建物より古い。出土遺物は無い。重複関係からⅠ～Ⅱ期に時期比定した。

#### 【14号遺構】(図20・22②、図版22)

8区東の地山面で検出した。東西端共に搅乱を受けており、元の形状は不明である。残存最大幅で22m程ある。埋土は3層ある。出土遺物は磁器4点、陶器7点、瓦2点が出土しているが、これらの遺物の時期は不明である。詳細時期は不明であり、Ⅰ～Ⅳ期と時期比定した。

#### 【15号遺構】(図16、図版12)

1区東の地山面で検出した。3.2×3.1m程の不正方形を呈する。5号建物より新しい。埋土中から水が多量に染み出し、埋土はグライ化していることから、井戸の可能性も考えられる。A2層を確認面とする5号建物より新しい。出土遺物も出土しており、19世紀前葉～中葉の磁器(CJ025)、19世紀初頭～中葉の陶器(CT025)等がある。出土遺物と重複関係からⅢ期に時期比定したが、それ以降の遺構である可能性もある。

#### 【16号遺構】(図16、図版12)

1区東の地山面で検出した。おそらく径2m程度の円形を呈するものと考えられるが、15号遺構に半分が壊される。出土遺物には磁器・陶器各2点、軌道施設陶器1点の破片が出土しているが、時期を明確に確定できる遺物は無い。重複関係からⅠ～Ⅱ期に時期比定した。

#### 【歓状遺構】(図20・21②、図版22)

8区西のA2層下にて歓状の窪みとして検出した。A層面での耕作に伴い、地山面まで掘削された痕跡である可能性もある。層序関係からⅣ期と時期比定した。

### 3. 1号溝と4号遺構

#### 【1号溝】(図9・11～13・15～17、図版13～16)

1号溝は、1区南半に位置する規模の大きな遺構である。当初は石列の存在から、この遺構の存在を確認した。この石列は、H-14区からは2列となるが、次第に内側の石列は見えなくなる(図13)。G16区周辺からは、両方の石列は消失する。遺構の内容確認のため、この石列と直行するように11列(H-I・J-11区)と14列(H-I-14区)に南北方向のトレンチを2箇所設定し掘り下げを行った。その結果、11列では確認面より50cm下、14列では1m下から、石組が検出された。14列(図15①、図版14・15)の石組は、幅約60cm空けて対面しており、溝となることが判明した。11列(図12、図版14)では、南側のみ石組が確認できた。北側は段状となっているのみで、石組は確認できなかった。この溝を1号溝古段階とした。

14列で検出された溝は、20～30cm程の大きな河原石を両側に並べている。石によっては、溝中央部に向けた面を打ち欠き平らに加工したものも認められた。この石の裏側には、裏込めとして10cm以下程度の小さめの河原石を充填している。また、並べている大きな川原石と底面との間には砂が詰まっているが、その砂の間には長楕円形の石が認められる。保存のため、これらの石を外した調査は行なっておらず、これ以上の詳細な構造は不明である。

一方で、11列で検出された南側の石組のうち2点は、長方体に加工された切石が使用されている。この切石は、溝に沿わせる様に長辺を並べている。北側では、段が認められた。この段の下面には、南側石組と対応する場所に径10cm程の石が存在していた僅かな窪みが確認でき、この位置に石を並べていた可能性がある。

1号溝古段階埋土の最下層では、裏込と同規模程度の石が多く確認され、砂が堆積していた(図12: 1号溝埋

土4c層、図版14-3、図15①1号溝埋土10層、図版15-1)。この埋土の様相からは、1号溝古段階廃絶時までに自然に堆積した層であると捉えられる。また、この層の広がりから、この頃には11列の北側石組はすでに存在していなかった可能性が高い。14列では、その底面の埋土と石組を覆うような粘土質土が堆積していた(図15①1号溝埋土6)。11列では、底部4c層の上に堆積する4a・4b層が、おおむねその層に対応する。これらの埋土の堆積状況から、1号溝古段階が次第に埋没していく様相が窺える。

1号溝古段階の底面の標高は、断面図上では11列で約54.9m、14列で約54.6mとなり、東に向かって30cm程の落差が認められた。その計測場所の平面距離は9.2mとなることから、傾斜角は1.9度となり、東に向かう緩やかな勾配となっている。

1号溝古段階が埋没した後に、確認面で検出した内側の石列により区画される溝が機能していたと考えられる。この時期を中段階とする。14列では確認面の60cm下から、長径40cm程の大形の礫が検出され、その裏側には裏込と考えられる小さめの石を多数確認した(図12)。確認面で認められた内側の石列は、この裏側の石が露出していたものであることが判明した。この大きな石は、H-13列東壁(図11③)でも認められるが、11列では確認できなかった。11列では、古段階の北側石組が存在しないこともあり、構造が異なっていた可能性も考えられる。

確認面で検出した外側の石列が1号溝新段階となる。中段階の石が埋没した段階でその外縁部に20~30cm程の円形の石が並べられる(図15①、図版16-1)。この石列は、H-14~16区までしか認められないため、部分的な作り直しがある可能性がある。

また、1号溝中・新段階に相当する東端を20~22列で検出した。中段階の溝は、F・G-20区で4号遺構と接続する。新段階の溝は、その接続部が埋まりきった後にF-22区まで到達する。F-21・22区の1号溝新段階は非常に浅く、石列も存在しない(図17③・④、図版15・16)。

1号溝は、最終的に粘土ブロックが多く混じる1層により完全に埋め戻される。また、14列の埋土2・3層には植物の根が多数確認されており、埋め戻される直前には草等が生えていた状態であったことも想定できる。このように1号溝は、3段階の変遷を経ていることが判明した。古段階は水が流れる施設であることは確實であるが、それ以降の中段階・新段階では、今回の調査では対岸は検出しておらず、流路等の明瞭な様相は不明である。

出土遺物は非常に多い。磁器526点、陶器823点のほか、瓦432点(76,974g)等が出土している。時期が判明したものの中では、埋土4a層(H・I・J-11区)から17世紀?の陶器、埋土2a層(H・I・J-11区)から18世紀前半?の磁器が出土している。いずれも時期が明瞭ではない。他の遺物は、およそ最後の埋戻し土の1層出土のもので、17世紀後葉から19世紀後葉の時期幅の遺物が出土しており混在している。

#### 【4号遺構】(図9・13~18、図版7・10~12)

4号遺構は、1区の13列から25列まで至る37m程の幅がある沢状の遺構である。4号遺構の西端(13列)に2箇所のサブトレンチを設定し底面の確認を行った(図13、図14①・②、図版11)。おおむね端部から1m20cmを過ぎたあたりから急激に落ち始め、確認面から大体1m程度がる。掘り下げ途中で遺構や遺物は確認されていない。今回検出した遺構は、この4号遺構埋土最上面に存在する。15列近辺まで遺構は多く見つかっており、1号遺構(IIa期)、1号溝中・新段階(IIb期・III期)、2号建物(IIb期)、4号建物(III期)、5号柱列(IIa期)等が存在する。この5号柱列の存在からは、東端の15列あたりまではIIa期の頃には確実に埋没していたことがわかる。

19列近辺から、4号遺構の最終的な埋戻し土と考えられる土層(図18:4号遺構埋土1・2層)が認められた(図版10)。この土層は、地山由来と考えられる大きめの黄色粘土ブロックを多量に含む層で、かなり新しい時代の整地土と考えられる。この1・2層除去後、F-20区とF-21区周辺で、標高が最低となるような崖みが検出された(図16)。この崖みは南北の流路と考えられ、最後に埋め戻される直前の4号遺構の最終段階として認識した。

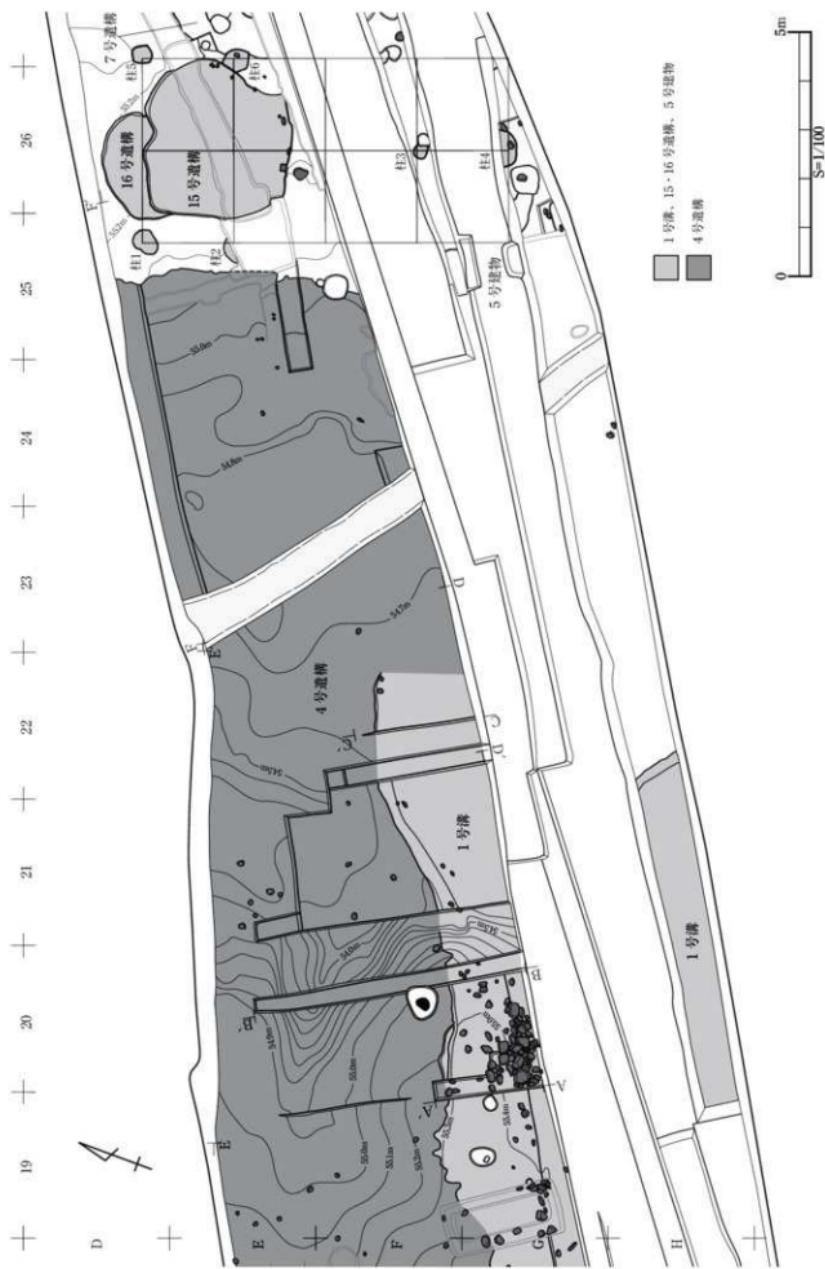
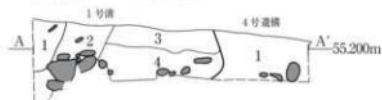


図16 武家屋敷地区第13地点1区東の遺構(1)  
Fig. 16 Features belonging to east side of area 1 at BK13(1)

①1号溝(F-G-19-20区西壁)



1号溝

- 1 図15の1号溝埋土1層と同じ
- 2 25Y4/2暗灰褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 黄灰色粘土を僅かに含む
- 3 図15の1号溝埋土2層と同じ
- 4 図15の1号溝埋土3層と同じ

4号造構

- 1 25Y4/3オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 黄灰色粘土と微細混入部下部を中心に微かに灰に含む

②1号溝・4号造構(E-F-G-20区西壁)



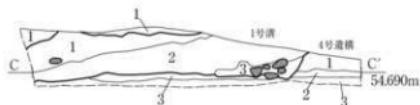
1号溝

- 1 25Y5/4黄褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 オリーブ褐色粘土、黒褐色粘土を少量灰に含む 黄化物を極端に含む
- 2 25Y4/2暗灰褐色 粘土 粘性強・しまりやや強

4号造構

- 1 図18の4号造構埋土2層と同じ
- 2 25Y4/2暗灰褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 混入物なし 図18の4号造構埋土10層に相当する

③1号溝・4号造構(F-G-22区西壁)



1 10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまりやや強 黄褐色粘土 ブロック少量含む

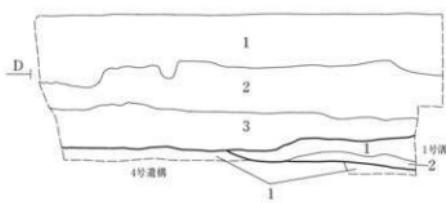
1号溝

- 1 25Y4/2暗灰褐色 粘土 粘性強・しまり弱 黄褐色粘土を僅かに灰に含む 極端に黄化物を含む
- 2 25Y4/3オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまり強 黄褐色粘土を少度灰に含む 黄化物を極端に含む ①の1号溝埋土1層と同じ
- 3 25Y3/2黒褐色 シルト 粘性中・しまりやや弱 にいわゆる黃褐色粘土を僅かに含む

4号造構

- 1 10YR4/2暗灰褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまりやや強 黄褐色粘土を幾分含む 極端に黄化物を含む 国18の4号造構埋土2層に相当する
- 2 25Y3/2黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 オリーブ褐色粘土を僅かに灰に含む
- 3 25Y4/4オリーブ褐色 粘土 粘性強・しまりやや弱 灰灰褐色粘土を少量灰に含む

④1号溝・4号造構(G-22-23区南壁)



- 1 前代の盛上・擾乱等の層
- 2 25Y3/2黒褐色 シルト質粘土 粘性中・しまりやや強 黃褐色シルト質粘土、黄褐色シルト質粘土をブロックで多量に含む 黄化物を僅かに含む
- 3 ③の1層と同じ

1号溝

- 1 ③の1号溝埋土1層と同じ
- 2 ③の1号溝埋土2層と同じ

4号造構

- 1 ③の4号造構埋土3層と同じ

0  
S=1/40  
1m

図17 武家屋敷地区第13地点1区東の造構(2)  
Fig. 17 Features belonging to east side of area 1 at BK13 (2)

①調査区北壁・4号遺構(E-19~22)X

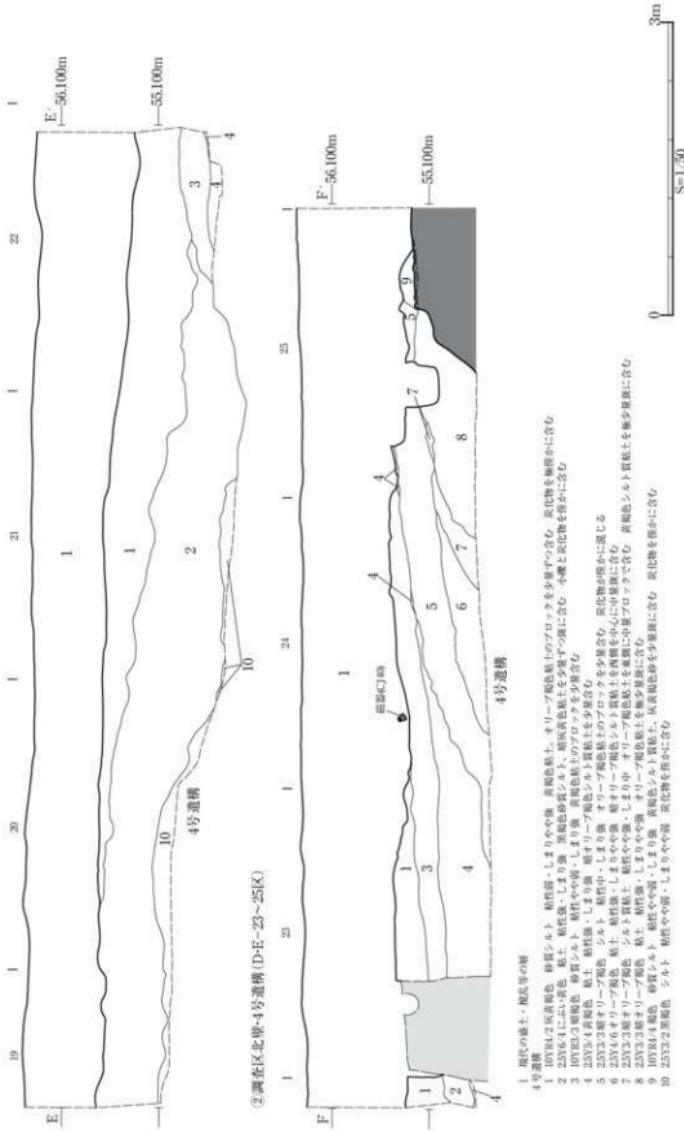
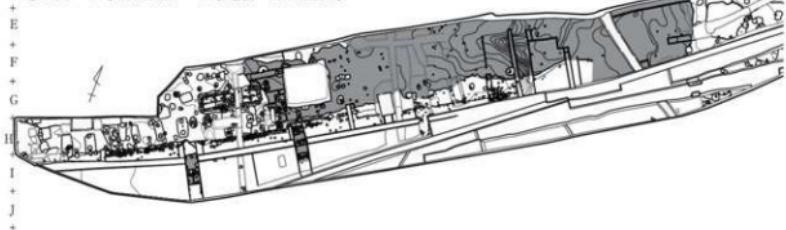
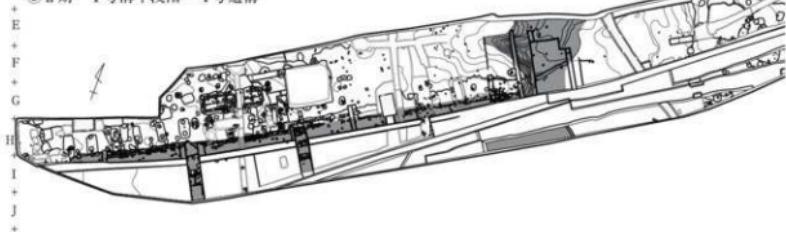


図18 武家屋敷地区第13地点1区東の遺構 (3)  
Fig. 18 Features belonging to east side of area 1 at BK13 (3)

+ 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13 + 14 + 15 + 16 + 17 + 18 + 19 + 20 + 21 + 22 + 23 + 24 + 25 + 26 + 27  
D ①Ⅰ期 1号溝古段階・4号遺構(最大範囲)



+ 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13 + 14 + 15 + 16 + 17 + 18 + 19 + 20 + 21 + 22 + 23 + 24 + 25 + 26 + 27  
D ②Ⅱ期 1号溝中段階・4号遺構



+ 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13 + 14 + 15 + 16 + 17 + 18 + 19 + 20 + 21 + 22 + 23 + 24 + 25 + 26 + 27  
D ③Ⅲ期 1号溝新段階

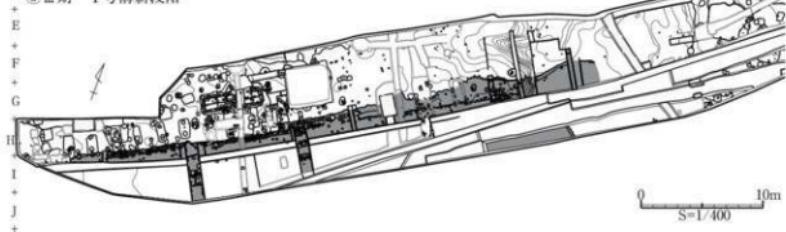


図19 武家屋敷地区第13地点1区の遺構  
Fig. 19 Features belonging to area 1 at BK13

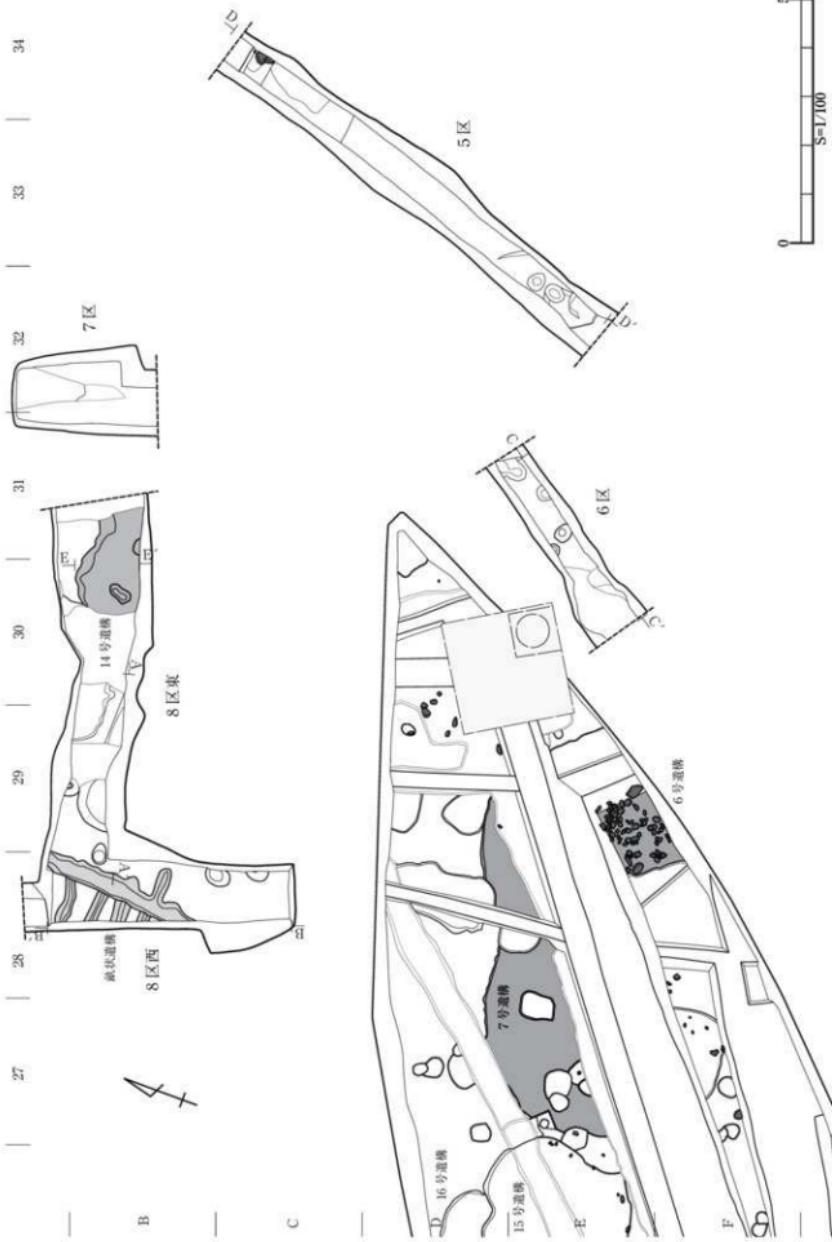


図20 武家屋敷地区第13地点1区東・5~8区の遺構  
Fig. 20 Features belonging to east from area 1 at BK13 (1)

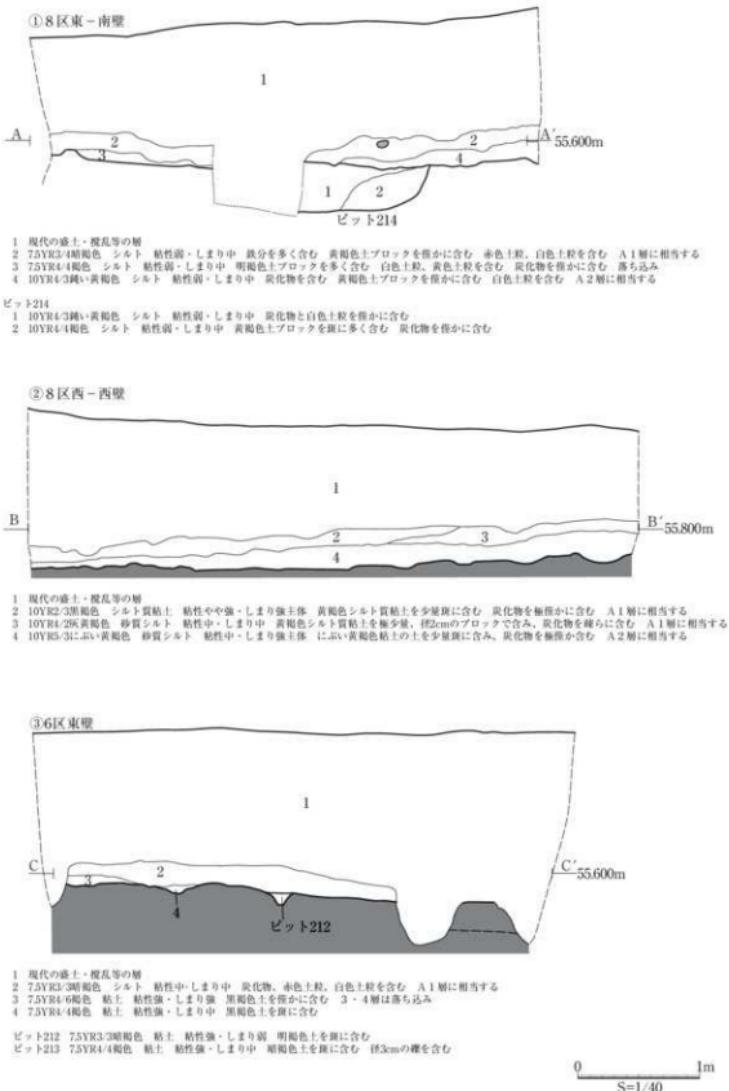


図21 武家屋敷地区第13地点1区東・5～8区の構造(2)  
Fig. 21 Features belonging to east from area 1 at BK13 (2)

## ①・⑤区東側

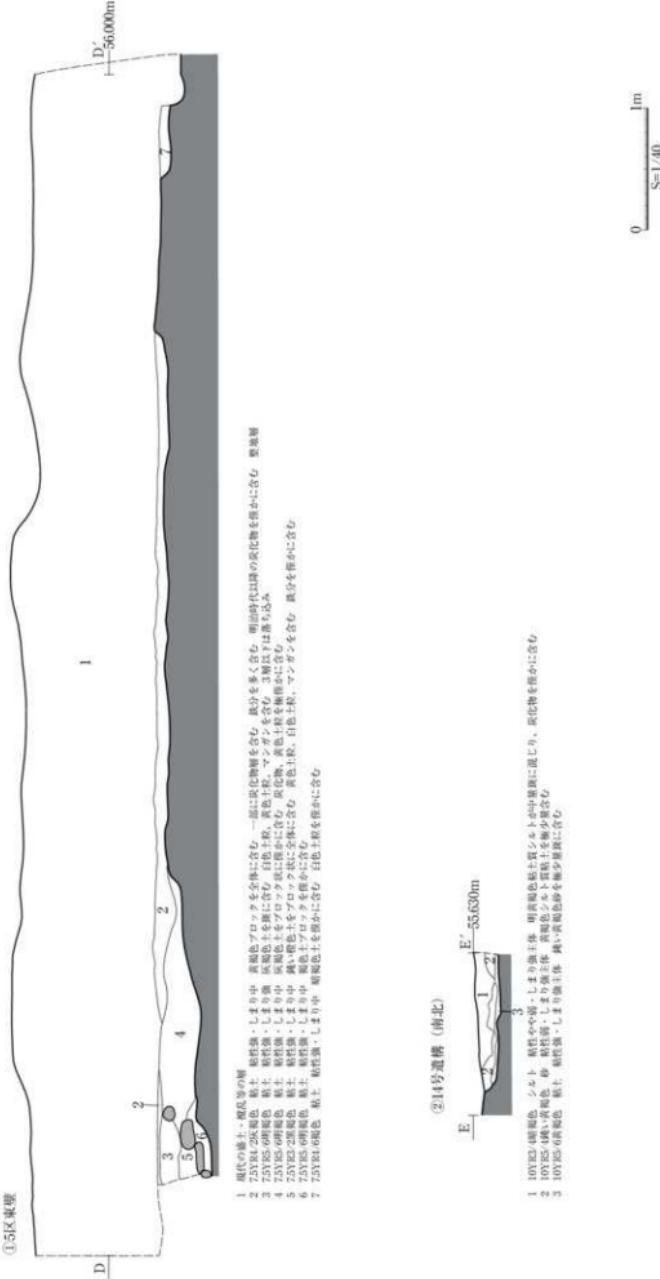
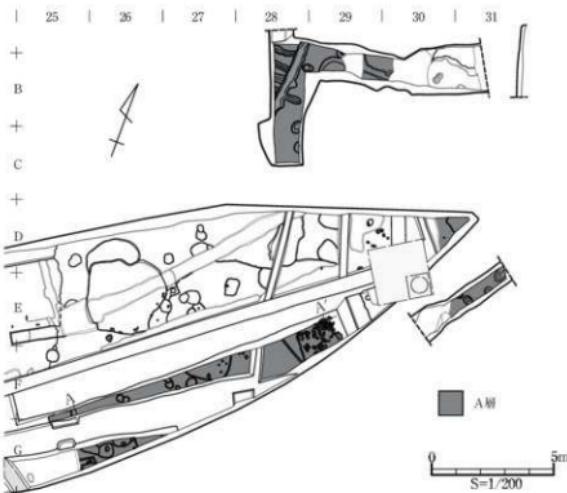
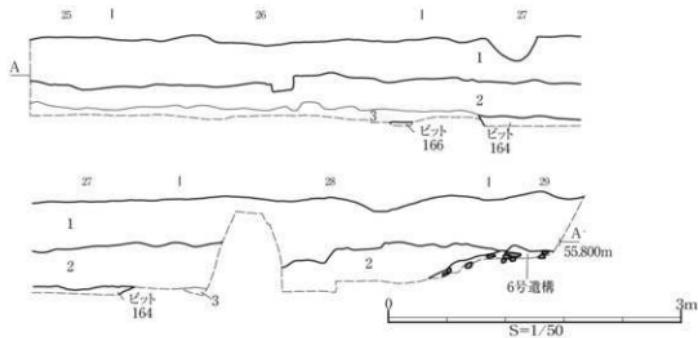


図22 武家屋敷地区第13地点1区東・5~8区の構造  
Fig. 22 Features belonging to east from area 1 at BK13 (3)

①A層分布状況



②1区東-南部北壁



基本層

- 1 現代の盛土・被覆等の層
- 2 10YR4/4 黄褐色 シルト 粘性中・しまりやや強 黄褐色粘土、黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む 硫化物を僅かに含む 鉄分を部分的に僅かに含む
- 3 10YR4/4 に少く黄褐色 砂質シルト 粘性やや強・しまりやや強 黄褐色、黄褐色粘土を所々少量疊らに含み 硫化物を無僅かに含む 鉄分を部分的に含む
- 4 A 2層に相当する

6号遺構 10YR4/4 黄褐色 シルト 粘性中・しまりやや強 硫化物を僅かに、径10~20cm級の河原石を多量に含む  
ピット164 10YR5/4 に少く黄褐色 粘土質シルト、粘性やや強・しまり中 黄褐色シルトを径に少量、径1~2cmの硫化物を少量含む 所々に無鉄鉱が混じる  
ピット166 25YS4 黄褐色 砂 粘性弱・しまり中 混入物なし

図23 武家屋敷地区第13地点 A層堆積状況

Fig. 23 Distribution of the layer A at BK13

4号遺構の東端は、1区東の25列で検出した（図16、図版12-1）。さらに、4号遺構東端の確認のため、23～25列までの北壁沿いにサブトレンチを入れた（図18）。現地表面から深さ2m近くまで掘り下げたが、底面は確認できなかった。5～8層は斜めに堆積し、順次東端側から埋没していく様相が窺える。次の4層は、窪みを埋めるような堆積となっている。その後、3層がやや水平に堆積する。そして、最終的には1・2層により完全に埋められることとなる。

1号溝との関係は、図19に示した。I期における、1号溝古段階と4号遺構の関係は不明である。図19①として、4号遺構の最大範囲を記載したが、I期の4号遺構は、かなりの範囲まですでに埋まっていたものと考えられる。II期では、21列においてかなり狭まった4号遺構と1号溝中段階が接続する（図19②）。III期には、4号遺構が埋められ、その上を1号溝新段階が形成されることとなる（図19③）。また、この図では、1号溝中段階の範囲のまま表示しているが、III期の頃の1号溝西半分の様相は不明である。

#### 4. 2～4区の遺構

##### 【8号遺構】（図24・25、図版17・18）

2・4区の地山面で検出した。最大幅で11.2mとなる規模の大きな遺構である。9号遺構より古い。B-2区で部分的に掘り下げを行った結果、遺構確認面より70cm程度で底面を確認した（図25④、図版18-4）。南側から北側に向かって堆積している。C-2区ではその上方のほとんどを9号遺構により破壊されている（図25③、図版18-5・6）。埋土からの出土遺物には、16世紀後半～17世紀前半の中国産磁器（CJ001）、17世紀初頭の陶器が出土している（CT001）。これらの出土遺物と重複関係から、I期に時期比定した。

##### 【9号遺構】（図24・25、図版17・18）

2区・4区南の地山で検出された。南側は大きく搅乱されており、全体の形状は不明である。8号遺構より新しく、12号遺構より古い。残存の最大幅は8.2m程ある。出土遺物は多くはないが、断面の埋土2層から回収した磁器（CJ022）は、19世紀中葉～後葉の年代となる。この遺物、重複関係等からIII期に時期比定した。

##### 【10号遺構】（図24・26②、図版19）

4区北の地山面、8号遺構上面で検出した。部分的な調査であるため、詳細は不明である。8号遺構より新しい。出土遺物は無い。I～IV期に時期比定した。

##### 【11号遺構】（図24・26②、図版19）

4区北の地山面で検出した。非常に部分的な確認であるため、8号遺構より古いこと以外、詳細は不明である。出土遺物は無い。重複関係よりI期に時期比定した。

##### 【12号遺構】（図24、図版19）

4区南の地山面と9号遺構上面にて検出した。南側は搅乱により破壊され、部分的な検出のみであり、形状なども不明である。9号遺構より新しい。出土遺物は無い。遺構の重複関係からIII～IV期に時期比定した。

##### 【13号遺構】（図24・26①、図版18）

3区の地山面で検出した。部分的な調査であるため詳細は不明である。出土遺物は無い。I～IV期に時期比定した。

##### 【2号溝】（図24、図版18）

2区の8号遺構上面で検出した。方向はN-87°-Wとなる。幅50cm、長さ2.4m程である。確認のみであるので、詳細は不明である。出土遺物は無い。遺構の重複関係から、II～IV期に時期比定した。

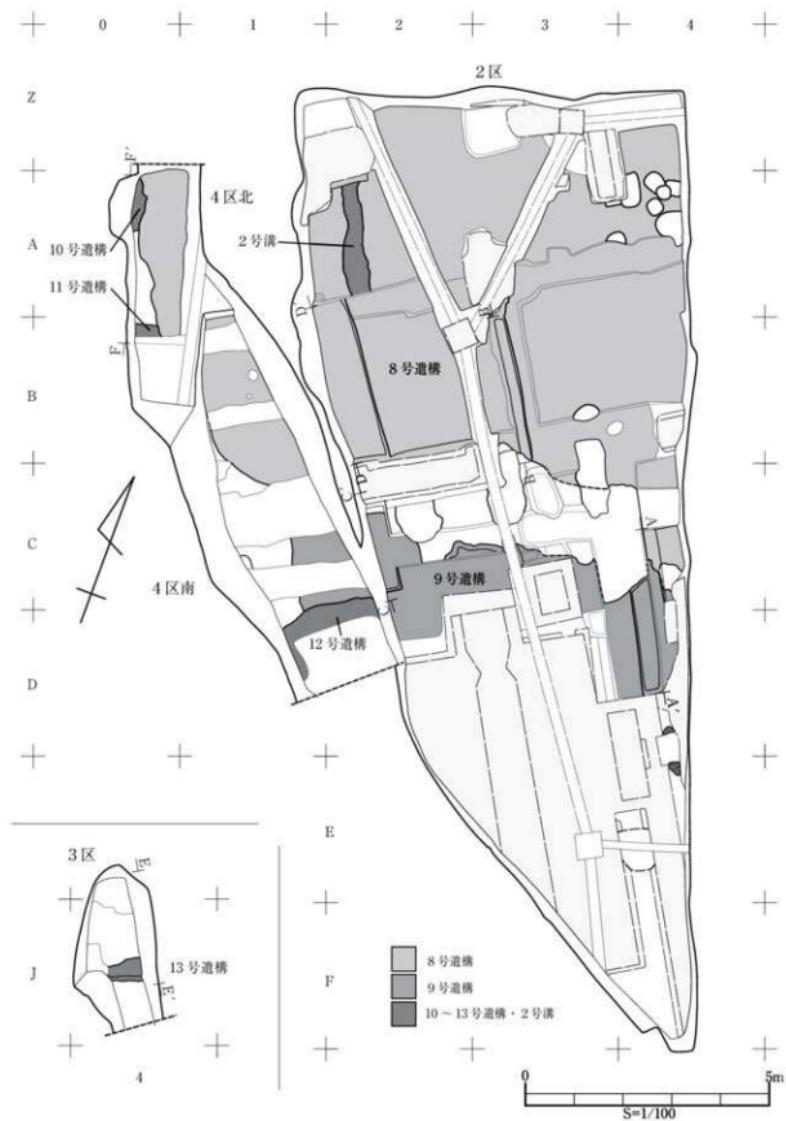


図24 武家屋敷地区第13地点2～4区の造構 (1)  
Fig. 24 Features belonging to west from area 1 at BK13 (1)

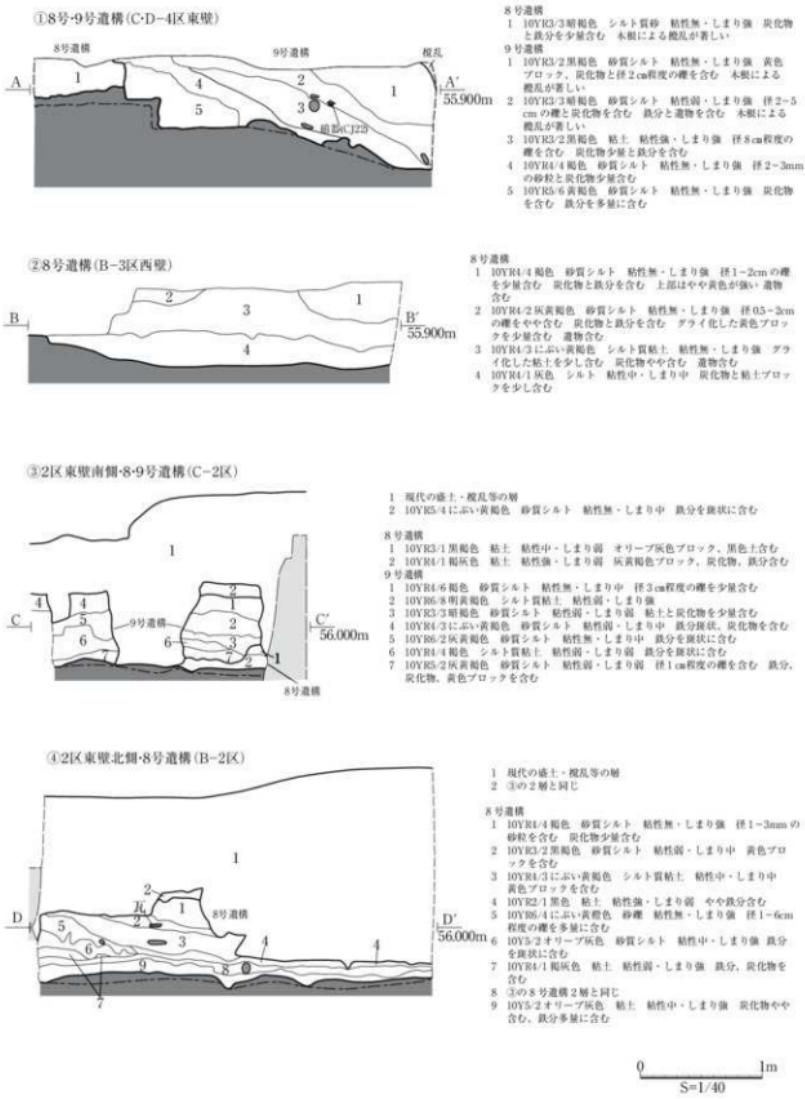
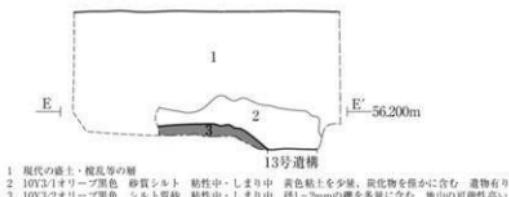
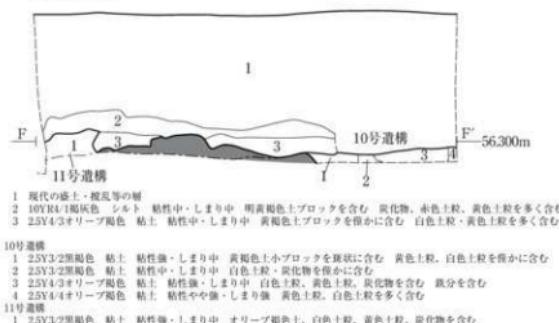


図25 武家屋敷地区第13地点2～4区の構造(2)  
Fig. 25 Features belonging to west from area 1 at BK13 (2)

①3区東壁



②4区北・西壁



0 1m  
S=1/40

図26 武家屋敷地区第13地点2～4区の遺構 (3)  
Fig. 26 Features belonging to west from area 1 at BK13 (3)

## 第V章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大部分は、江戸時代以降のもので占められている。江戸時代以前の遺物は、古代の瓦が1点出土しているのみである。

第Ⅲ章でも記述しているが、今回の調査では、すべての遺構を掘り下げて精査はしていない。そのため、平面で検出状況を確認しただけの遺構では、遺物の出土はあまり多くはない。1号溝、1号遺構、4号遺構、8号遺構、9号遺構では、遺構の内容確認のため、一部を掘り下げて精査しており、他の遺構より遺物量が多くなっている。これらの遺構でも完掘はしておらず、遺物の量は確認のために掘り下げた体積によって差が出るため、本来の遺構が包含している遺物量とは関係していない。ただし、1号溝、4号遺構については、調査時の所見でも、他の遺構よりも比較的多くの遺物が含まれていたという認識を持っている。

### 1. 陶磁器（図27～35、表8・9、14～17、図版23～30）

接合、同一個体の認定作業後の破片数は、磁器2857点、陶器3087点である。1号溝、4号遺構からの出土量が多い他は、1層・搅乱やA1層が多くなっている。

時期としては、17世紀初頭から近代、現代のものまでが含まれている。19世紀前葉から中葉や、明治期に入つての資料が量的には多い。平面でプランを確認したのみの遺構では、19世紀代の陶磁器が中心である。一部を掘り下げた遺構では、17～18世紀代の遺物が含まれている。中でも、1号溝からは、磁器526点、陶器823点と比較的多くの遺物が出土しており、國化したものも多い。1号溝の陶磁器は、19世紀が主体ではあるが、18世紀代のものも含まれ、17世紀まで遡るものも若干含まれており、比較的広い年代のものが出土している。また、8号遺構は、遺物の出土量は少ないが、17世紀代の比較的古手のものが中心である。

資料全体を通して、比較的多くの磁器に焼締痕が観察される（CJ002、CJ011、CJ016、CJ023、CJ027、CJ028、CJ041、CJ046）。焼締ぎの技術は18世紀末以降に普及したとされている（江戸遺跡研究会編2001）。磁器自体の年代としては、18世紀末よりも古いものにも焼締痕が観察される場合があり、補修しながら比較的の長期間使われたものが多いのではないかと推測される。

#### 【17世紀代の陶磁器】

17世紀代の資料は、8号遺構、4号遺構、1号溝、1層・搅乱から出土しているが、ごくわずかに含まれる程度である。磁器では、中国の製品（CJ001、CJ030）と、肥前磁器（CJ035）、肥前の青磁製品（CJ047、CJ048）がみられる。陶器では、肥前（CT001）、丹波（CT017）、美濃（CT055）の製品がみられる。

中国の青花磁器は2点出土している（CJ001、CJ030）。CJ001は、本来は小中皿と考えられるが、見込みの一部のみが残存し、破片の縁辺は意図的な打ち欠きによる敲打痕が観察される。破損した破片を転用しようとした可能性が高いが、途中でやめたものと推測される。転用の意图は不明である。高台置付は、外側側が斜めに削られている。CJ030は、芙蓉手の大皿である。全体の文様は不明であるが、見込みには花鳥文が描かれていると考えられる。高台内に、放射状の工具痕が観察され、置付には砂が付着している。いずれも景德镇民窯の製品と考えられ、明末清初の時期に相当する17世紀初頭から中葉の年代と推測される。

肥前の磁器では、青磁釉の皿が2点出土している（CJ047、CJ048）。CJ047は基筒底である。高台は鋸歯が施され、高台内にも青磁釉が塗布されている。17世紀中葉頃の波佐見の製品と考えられる。CJ048は、見込み蛇ノ目軸刺ぎの青磁皿で、外側部下半は無釉である。17世紀後半頃に量産される肥前産の青磁と考えられる。

陶器の出土数也非常に少ない。CT001は絵唐津の向付で、8号遺構から出土している。CT017は、丹波の鉢類と考えられる。無釉であるが、内面のごく一部に垂れたような灰釉が観察されることから、あるいは一部に灰釉

が塗布されている可能性も考えられる。類似した丹波の鉢類は、仙台市若林城の調査において出土している（佐藤淳ほか2011）。

CT055は、志野織部の蓋である。鉄絵で同心円文が描かれる。孔があり、中心部分にはつまみが剥落した痕跡がみられる。不正円形の孔が残存部分で3カ所あることから香炉の蓋としたが、灯明具の蓋など類似した他の器種の可能性も考えられる。

#### 【18世紀の陶磁器】

18世紀の陶磁器は、1号溝、1号道構、4号道構、A1層、1層・搅乱から出土している。磁器は、すべて肥前製品である。陶器では、大堀相馬、小野相馬、京・信楽、肥前、瀬戸・美濃など、産地が増加する。なお、18世紀後半の資料は、18世紀後半から19世紀前半の資料としてまとめて記述するため、ここには含めていない。

18世紀の磁器は、小中皿（CJ002、CJ033、CJ049）、色絵や染付の中型碗（CJ004、CJ005、CJ007、CJ29、CJ037）、蓋物（CJ014、CJ015）、仏花瓶（CJ019）、火入・香炉（CJ031）、中碗蓋（CJ043、CJ044）、蓋物の蓋（CJ046）などである。CJ002は見込み蛇の目釉剥ぎの小中皿である。18世紀代に肥前で量産された小中皿に相当すると考えられる。残存部分に焼継ぎをした痕跡は確認されないが、口縁部の一部に焼継ぎが垂れた痕跡が観察される。CJ033、CJ049は見込みにこんにゃく判による五弁花纹がみられる。

磁器の碗では、中型丸碗が主体である。CJ004は色絵染付の製品で、丸文は染付で描かれ、花文と折枝松文は色絵で描かれている。色絵は金・赤・緑・黒があり、赤は輪郭線と塗りで濃淡がみられる。CJ005は高台内に「富貴長春」銘が、CJ007は渦「福」銘がみられる。銘の特徴からCJ005は17世紀末から18世紀後葉ごろ、CJ007は18世紀中葉から後葉ごろのものと考えられる。CJ037はくらわんか手の碗である。碗の蓋も2点出土しており（CJ043、CJ044）、いずれもつまみ内に渦「福」の銘がみられる。渦「福」銘から18世紀中葉から後葉と推測される（鈴田由紀夫1995）。CJ043は外面青磁釉の製品である。

CJ014の蓋物は、こんにゃく判の桐文がみられ、18世紀代に相当する。CJ015の蓋物は、腰部に銷軸が施されるものである。CJ019は、口頭部の器形から仏花瓶あるいは花生と考えられる。頭部に染付がみられるが、文様は不明である。釉調や染付から17世紀後葉から18世紀代のものと推測される。

蓋物の蓋（CJ046）は、染付と色絵によって梅花文や、雪輪に草花文や竹文が描かれており、焼継ぎの痕跡が観察される。CJ031の火入・香炉は、底部が蛇ノ目四形高台で獸足を表現した三足が付く器形である。波佐見の青磁製品と考えられる。

陶器では、小野相馬、京・信楽、肥前、瀬戸・美濃の製品がみられるが、小野相馬と京・信楽が多い。通常、多く出土する大堀相馬は、18世紀後半から19世紀前半の年代のものが多いため、ここには含まれていない。中型丸碗（CT032）、中型腰折碗（CT003、CT046）、中型筒形碗（CT047）、小中鉢（CT002）、小中皿（CT007）、火入・灰吹（CT015、CT038）、銚子（CT037）、合子蓋（CT043）といった器種が出土している。

小野相馬では、小中鉢（CT002）、小中皿（CT007）、火入・灰吹（CT038）が出土している。これらは小野相馬で得意とした器種であり、いずれも特有の淡青灰白色の灰釉の製品である。CT002は見込みに目跡が3カ所みられる。CT007は見込みに印花文がみられるなど、小野相馬の製品によくみられる特徴が観察される。

京・信楽では、火入・灰吹？（CT015）、中型丸碗（CT032）、銚子（CT037）、合子蓋（CT043）、中型筒形碗（CT047）などがみられる。CT032は銷絵染付の製品であるが、それ以外は色絵製品である。CT015の灰吹きは、木瓜形の器形である。CT037の銚子は、注ぎ口が付き、口縁部は平面四角形で、体部下半は半球形を呈する器形で、四角形の蓋が付くものと考えられる。色絵による梅枝文がみられる。

肥前は、鉄絵山水文の付く中型の腰折碗である（CT003）。瀬戸・美濃の腰折碗（CT046）は、透明度が高く、貫入の顯著な淡緑灰色の灰釉で、口唇部の一ヶ所に鉄釉が掛けられている。素地はロクロ痕が顯著である。

### 【18世紀後半から19世紀前半の陶磁器】

18世紀後半から19世紀前半の陶磁器は、1号溝、4号遺構、1層・搅乱から出土している。

磁器では段重（CJ016）、火入・香炉（CJ050）がみられる。いずれも肥前産である。陶器では中型丸碗（CT003、CT005、CT048）、小型丸碗（CT034）、小中皿（CT006）、碗あるいは鉢の底部（CT035）、蓋（CT056）、仏飯器（CT058）がある。

CJ016の段重は、焼継ぎの痕跡が観察され、焼継印とみられる記号が高台の脇にみられる。CJ050は、色絵染付の火入・香炉で、口縁部には敲打痕が観察される。底部に墨書きがみられるが判読不能である。

陶器の産地は、大堀相馬が主体となる。中型丸碗に加えて、この時期には小型丸碗（CT034）が加わる。灰釉は、光沢が少ないので失透釉、あるいは光沢がなく糠白色に白濁した失透釉の製品が中心である。中型丸碗（CT003、CT048）は、鉄釉流し掛けの製品である。CT006は鉄絵山水文の小中皿で、見込みに目跡が3カ所みられる。CT005、CT035、CT048、CT058は底部に墨書きがみられる。CT005は「松前」、CT048は「小」、CT058は「く」ではないかと推測される。

### 【19世紀代の陶磁器】

19世紀代の陶磁器は、ほとんどの遺構から出土している。磁器では、中型丸碗（CJ006、CJ021、CJ027、CJ028、CJ036）、中型端反碗（CJ038、CJ039、CJ054）、小型端反碗（CJ008、CJ040、CJ041、CJ053）、小型筒形碗（CJ009）、平形碗（CJ023）、中碗の蓋（CJ012、CJ025、CJ045）、小杯（CJ024、CJ052）、うがい茶碗（CJ032）、猪口（CJ042）、小中皿（CJ010）、極小皿（CJ011、CJ034）、蓋物の蓋（CJ013）、小中鉢（CJ026）、土瓶（CJ018）、瓶頸（CJ020）、植木鉢（CJ003）など、さまざまな種類がみられる。焼継ぎによって補修されている磁器も多い（CJ011、CJ023、CJ027、CJ028、CJ041）。また、磁器の産地では、特に19世紀中葉以降は、肥前は少なくなり、瀬戸や切込の製品が加わるようになる。

陶器では、中型端反碗（CT004）、瓶（CT008、CT025、CT026）、土瓶（CT009～012、CT021、CT030、CT031、CT044）、灰吹・火入・香炉（CT014）、秉燭（CT019、CT020）、小中鉢（CT022）、小中皿（CT023）、蓋（CT027、CT039、CT050）、擂鉢（CT024）、袋物（CT029、CT052）、瓶掛（CT040）、壺（CT049）、急須（CT051）、灯明皿（CT028）などの器種がみられる。産地では、大堀相馬が主体であるが、瀬戸・美濃、京・信楽や、東北産と考えられる陶器も若干加わる。

19世紀前葉から中葉の磁器では、肥前が中心である。碗では、中型丸碗（CJ006、CJ021、CJ027、CJ036）のほか、端反碗（CJ039）、小型筒形碗（CJ009）、碗に付く蓋（CJ012、CJ025）などの器種がみられる。CJ027、CJ036、CJ039はダミを用いた素描きの文様である。CJ036は、外面は呉須、内面は色絵で描かれている。CJ027は、高台内に朱書きで「□ 千□□ 九千六」の文字が確認される。後述するCJ028にも類似した朱書き文字がみられることから、同時期に使用されたものとも考えられる。CJ026は破片資料であるが、体部上半が八角形を呈する鉢であろうと考えられる。CJ032は、直線的に開き、見込み部分がやや尖る器形をしており、見込みに色絵染付で文様が描かれることから、うがい茶碗と考えられる。

19世紀前葉から中葉の陶器では、大堀相馬が中心である。碗では、端反碗（CT004）がみられ、釉は白濁した失透釉のものである。土瓶は、白濁した失透釉の灰釉のもの（CT009、CT044）と、青釉のもの（CT010）がみられる。文様では鉄絵文がみられ、呉須絵と鉄絵で山水文が描かれた皿（CT023）、鉄絵で草花文が描かれた瓶（CT025）が出土している。CT023の高台内には墨書きがみられるが、判読はできない。CT026の瓶は、型押によって上下2段に花卉のような文様が表現されている。上半と下半は別に作られており、上半と下半を合わせた痕跡が内面中央部分を一周するように観察される。CT039は何らかの蓋であろうと考えられる。外面に青釉が施釉されているが、口縁部端面は無釉である。青釉や胎土から大堀相馬と考えられるが、他の産地の可能性も考えられ

る製品である。大堀相馬以外では、瀬戸・美濃の瓶掛（CT040）と、京・信楽の急須？（CT051）がみられる。CT040は、破片資料であるが、台部に印花による雷文、体部上半に貼付による葡萄文がみられ、瀬戸・美濃の呂宋瓶掛である。底部の内外面にはスス状の炭化物の付着が観察される。CT051は、欠損しているが注ぎ口が1ヶ所付く器形と推測され、京・信楽の急須と考えられる。非常に薄手の丁寧な作りであり、体部には錯絵の菊花文が少なくとも2ヶ所に配される。菊花文は16弁のものであり、非常に緻密に描かれていることから、禁裏注文の京焼きの可能性も考えられる。

19世紀中葉から後葉の磁器では、切込（CJ010、CJ018、CJ022、CJ040、CJ053）や瀬戸（CJ011、CJ028、CJ034、CJ038、CJ041、CJ045、CJ052）の製品が多くなる。切込の磁器では、三彩釉の型打輪花皿（CJ010）が出土している。三彩は、茄子緋、青緑、透明釉の三色によってなされている。本来は、鮮やかな白の素地に透明釉が掛けられ、三彩の白色を示すところであるが、CJ010は素地がくすんだ白色のため、三彩の白色も灰色に近いものとなっている。高台内と豊付も青緑色の釉薬によって施釉されており、豊付に3ヶ所の目跡が確認される。武家屋敷地区第4地点の調査（年報13）において、切込三彩の破片が2点出土しているが、小片であった。切込三彩は、伝世品でわずかに確認されるほか、切込西山工房址（芹沢長介編1978）、同中山窯下方平場（佐藤広史1990）、の調査で、少量確認されている程度である。CJ010は、切込三彩釉の特徴の最もわかる出土資料である。CJ018の土瓶は、花文や渦巻文の描き方、胎土の色調や釉調が、切込の量産品と類似することから切込の製品と推測される。瀬戸の磁器は、中型丸碗（CJ028）、中型端反碗（CJ038）、小型端反碗（CJ041）、碗の蓋（CJ045）、極小皿（CJ011、CJ034）、小杯（CJ052）がみられる。CJ028は、焼継ぎと、高台内に朱書きで「千□八百八十  
千□五百 九千六」の文字がみられる。極小皿は、いずれも白磁の型打による製品で、角皿（CJ011）と輪花皿（CJ034）である。他に产地不明の磁器として、体部下半のみ残存する瓶類（CJ020）がみられる。残存部分については無釉であり、产地は不明である。

19世紀中葉から後葉の陶器も、大堀相馬が主体であり、灯明皿（CT028）、土瓶（CT011、CT030、CT031）、袋物不明（CT029）などが出土している。灯明皿（CT028）は、内面鉄軸で非常に薄手で、口縁部に炭化物が付着している。土瓶は、鮫肌釉の蓋（CT011）、青釉の身（CT030）、灰釉に白泥と鉄絵で施文された蓋（CT031）が出土している。CT011は地の鉄軸に暗緑褐色の釉が取縮した鮫肌釉の製品である。CT030は木瓜形の器形を呈している。また、CT029は、鮫肌釉を用いた勿来手の製品である。

他の19世紀代の磁器では、CJ003は底部に孔が1ヶ所みられることから植木鉢と推測され、底部に「利ク」の墨書きが観察される。CJ024の小杯は、产地は不明であるが、非常に薄手の磁器で、内面は色絵で福寿草・蟠人文などが描かれている。CJ042は、瀬戸の猪口である。外面には人物の絵と「候先生」「鐵拐先生」の文字が確認される。「鐵拐先生」は、中国道教の代表的な仙人を集めた八仙の一人、李鐵拐のことと考えられる。「候先生」は、蝦蟇仙人のことと考えられ、蝦蟇仙人を「候先生」と呼ぶ逸話が存在する。八仙に含まれる仙人は、時代によって構成が異なる場合があり、道教の本来の八仙と日本での八仙では異なるようである。中国の八仙に蝦蟇仙人は入らないが、日本では蝦蟇仙人は李鐵拐と対で描かれる例が多いようである。CJ042には、他に人名とみられる文字が3ヶ所確認できる。欠損や不鮮明な筆跡のため、文字そのものから判読することは難しいが、八仙と仮定すると、「洞賓」、「麻姑」、「鍊離権」ではないかと考えられる。また、描かれている人物は、その衣服や特徴から、左から呂洞賓、蝦蟇仙人、李鐵拐、鍊離権である可能性が高いと考えられる。

他の19世紀代の陶器では、CT008の瓶は、無釉の生地に、飛跑と灰釉流し掛けがなされている。胎土は炻器質で、产地は不明である。CT012は、白化粧の上に青釉と鉄絵山水文の描かれる蓋である。通常は透明釉が施釉された製品が多いが、CT012は無釉である。产地は不明である。CT018は、器種は特定できないが、台座状の体部下半に、内外面に鉄釉が施釉された製品である。秉燭は、皿状のCT019と、脚部の付くCT020がみられる。CT019は東北の地方窯の製品ではないかと推測される。CT020は大堀相馬産で、底部に孔が1ヶ所確認される。東北の地

方窯の製品と推測されるものは、他に壺（CT049）、袋物不明（CT052）などがみられる。胎土や釉など、堤に類似する部分もみられるが、他の地方窯の可能性もある陶器である。CT021は、鉄絵文字が描かれた外面無釉の製品で、産地は不明である。残存部分には3文字確認されるが、判読できるのは「貢」のみである。CT022は胎土・釉薬から堤の製品と推測される。CT027は、鉄釉の蓋で、つまみ部分は型押による葉のモチーフが用いられている。産地は不明である。

#### 【年代不明の陶磁器】

磁器では、透かし彫りの火入・香炉（CJ017）がみられる。立方体の形状をしており、非常に薄手で、四面に透かし彫りによる菊花文が表現されている。四面とも、菊花部分を除いて染付がなされ、菊花部分が白く浮き上がる文様を呈している。

陶器では、窯道具（CT041）が出土している。形からハマの一種と考えられる。同様の形態のものが武家屋敷地区第7地点の調査（年報19第2分冊）から出土している。CT036の片口鉢は、瀬戸・美濃の製品と考えられる。釉が変質しており、火を受けた可能性が考えられる。CT053は、人形の頭部である。七福神の布袋の特徴に似ているが、体部が欠損しており、特定できない。CT054は瀬戸・美濃の瓶で、いわゆる通い徳利である。鉄絵文字で、「銘酒吾妻桶の花」「岩庄酒造店」「電話四一七〇」の文字が確認される。岩庄は、宝曆二年（1752年）に宮城郡に創業した酒造家である（早坂芳雄1962）。仙台で電話事業が開始されたのが明治33年（1900年）で、開通時の加入者数は170件であった（仙台市史編さん委員会2009）。その後、電話の加入者は、比較的早くに増加したようである。CT054の電話番号が400番台であることから、電話事業開始からそう下らない年代で、ガラス一升瓶が一般化する以前の時期のものと考え、20世紀初頭から前葉のものと推測される。

## 2. 土師質土器（図36、表11・18・19、図版31）

土師質土器は、皿、鉢類、壺、火消壺、焙烙、灯明皿などが出土している。焼塙壺、耳皿は出土していない。接合と同一個体識別作業後の土師質土器全体の破片数では、皿286点、鉢類11点、壺2点、火消壺4点、焙烙8点、灯明皿1点、不明129点で、合計442点である。前述のように、今回の調査は、遺構を確認した後、大部分の遺構の掘り下げは行っていないため、土師質土器においても、これまでの調査と比べると、出土量は非常に少なかった。

### 【皿】

土師質土器の皿は、286点出土している。遺構では1号溝からの73点が最も多く、次いで4号遺構から39点である。破片資料が多く、接合作業を十分に行ったが、法量がわかる程度まで器形を復元できたものは、あまり多くない。

土師質土器の皿の抽出基準は次の通りである。口縁もしくは底部外周の6分の1以上が残存し、なおかつ器高が判明するものを抽出資料とし、諸属性の観察を行った。すなわち、口縁端部から底部までが残っており、口径、底径の復元および器高の計測ができるものを抽出している。口縁もしくは底部外周の6分の1以上残っているものを抽出基準としたのは、経験的に、これだけ残っていれば、口径もしくは底径の復元において、安定した数値が得られるであろうという判断に基づいている。

抽出し、法量や調整方法などを観察できた土師質土器の皿は、全体で20点である。そのうち5点を図化している（図36、表18、図版31）。出土した土師質土器の皿の大多数は、武家の宴席の席で使用され、1回の使用で廃棄されたものと考えられる。しかし、中には、付着物や使用した痕跡などから、転用され、別の用途で使用された痕跡が確認されるものも含まれている。図化したものは、転用された痕跡が見られるものが中心となっている。抽出された点数が少なく、まとまって出土する遺構もないことから、定量的な分析は行っていない。

CH001は、底部に焼成後に穿たれた小孔が1ヶ所あり、小孔には一部に鉄分が付着している。また、底部内面には一部に炭化物の付着が観察される。小孔を用いて釘などで固定し、灯明皿として使用されたものであろうと考えられる。底部に穿孔のある皿は、これまでの調査でもたびたび出土しており、二の丸地区第17地点では、底部に釘が残存した皿が出土している（年報18）。CH002、CH003は、口縁の一部にタール状のススが付着しており、灯火具として使用された痕跡が観察される。CH005は、口径23.6cmと大型のものである。器面全体が黒色化しており、内外面とともに底部付近に薄く炭化物が付着している。その様子から、器全体を火にかけて、焙烙のように用いられたのではないかという可能性も考えられる。抽出資料の中で大型のものはCH005の1点のみであるが、抽出されなかつた資料の中にも、大型のものになる可能性のものが、若干含まれている。少ないながらも、大型の皿も一定程度含まれるものと考えられる。CH004は、底部内外面に炭化物が付着しており、器面のほぼ全体が黒色化している。器面の状態から、火を受ける状態で使用されたものであろうと推測されるが、CH005のように焙烙のように使用されたものとは異なる痕跡である。

### 【その他】

土師質土器の皿以外で図化したのは、CH006の1点のみである。8区西A層からの出土である。小型の壺型の土器で、底部の内外面に炭化物が付着しているが、用途の詳細は不明である。

### 3. 瓦質土器 (図37、表11・20、図版31)

瓦質土器は、鉢類、蚊造り、炭櫃、十能、五徳、さな、壺壺類などの種類がみられた。壺壺類には、火消し壺なども含まれると考えられるが、破片資料のため、特定できないものをまとめている。鉢類も、破片から種類を特定できなかった様々な「鉢」形のものをまとめており、火鉢の破片なども含まれる。今回の調査では、瓦質土器の出土量はあまり多くなかった。これらの中から、形態的特徴がわかるものを中心に9点を図化した。

CG001、CG002は、6号遺構から出土している。CG001は方形の鉢状をした瓦質土器である。器高は比較的浅い。用途は不明である。CG002は、上面は棒状に延び、断面が「L」字状を呈する器形であるが、欠損部分が大きいため、全体形状は不明である。上面には炭化物の付着がみられる。

CG003は、ピット164から出土している。幅10.7cmの板状で、「く」の字に屈曲しているが、一端は欠損し、他端は剥落している。剥落している部分は、逆方向に屈曲していくものと推測される。用途は不明である。

CG004、CG005は4号遺構から出土している。CG004は、鉢類である。底部内面に炭化物が付着しており、内面は黒色化している。外面にタタキ目があり、同様の器形をした鉢類は、武家屋敷地区第7地点の調査からも出土している（年報19第2分冊）。CG005は、蚊造りの破片である。下半部には横長の窓がみられ、内面には炭化物が付着している。

CG006～009は、1層・搅乱からの出土である。CG006、CG009は、鉢類である。CG006は底部が欠損しており、CG009は底部のみであるが、三足を持つ同様の器形のものと考えられる。小型の火鉢のような形態である。CG007は、鉢状の器形になるのではと考えられるが、一部分のみの残存のため、器種は不明とした。口縁部内面には花型の刻印がみられる。CG008は小型の鉢類である。外面に異なる2つの刻印がみられ、内面には刻印を押したときに付いたとみられる指紋が観察される。

### 4. 土製品 (図38、表13・21、図版32)

土製品は、土師質土器、軟質施釉土器のうち実用品でないものと、玩具や人形などをまとめた。1号溝、3号遺構、4号遺構、A1層、1層・搅乱から出土しているが、いずれもごくわずかで、全体で35点である。

土師質のものでは、壺、播鉢、蓋などのミニチュア製品、猿、犬、狐？、馬？などの土人形、土鈴などがみられる。軟質施釉のものは少なく、器台？が1点出土しているのみである。そのうち、特徴のわかる9点を図化した。図化したものは、いずれも土師質製のものである。

CO001は、中実で、表面はミガキ調整されており、刻印がみられる。土師質土器の柄や脚部などの実用品の可能性も否定できないが、小破片のため不明である。

CO002・CO005は、土人形の狐（福荷）である。1号溝と1層・搅乱からの出土である。CO002は、左右合わせの型作りである。頭部のみ残存しており、口には宝玉をくわえている。頭部は中実で、体部は中空とみられる。CO005は、中空である。左右合わせの型作りであるが、頭部付近の片面のみが出土している。

CO003は、1号溝出土の犬である。左右合わせの型作りで、片面のみ残存している。

CO004は、4号遺構出土の馬の可能性が考えられる土製品である。四肢の1足部分のみの出土で、脚部に胸懸（もしくは尻懸）の表現がみられる。胸部は型作りで、脚部は別に貼り付けている。脚部は中実である。腹部は中空で開口するものとみられる。武家屋敷地区第11地点の調査から、類似した馬の土製品が出土している（調査報告1）。

CO006・CO007は、1層・搅乱から出土した猿の土人形である。いずれも肩部は手づくねで、四肢と尾は別に粘土を貼り付けて表現しているが、欠損していてどのようなポーズであったかは不明である。備書きによって体毛が表現されている。CO006は、体部は手づくね、頭部のみ型作りで、耳は粘土を貼り付けていることが観察される。

CO008は、型作りの中実で、菊花文状の文様がみられる。おはじきや、人形の装飾部分の一部などが考えられるが、詳細は不明である。

CO009は、ミニチュアの蓋である。ロクロ成形で、つまみ部分は粘土を貼り付けている。底部には回転糸切り痕が観察される。

## 5. 瓦（図39～46、表10・22～33、図版32～38）

瓦の分類・集計・計測の基準は年報6・7・8・9で示しており、年報18では、新たな種類を設定し改めて分類基準をまとめている。さらに、調査報告1では、一部、分類が不明確だった種類を再整理した。今回報告する資料は、基本的にこれらの分類基準を踏襲して分類している。

出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦類、軒棟瓦、丸瓦、丸瓦類、平瓦1類、平瓦2類、平瓦、棟瓦、棟瓦類、板塀瓦、面戸瓦、輪違い、棟瓦、谷丸瓦、鬼瓦、古代瓦、不明瓦の17種類に分類された。これらのうち、年報6に示した基準に従って、計測できるものを抽出し、諸属性の観察を行った。図示したものは、計測したそれぞれの瓦の種類のうち、比較的の残存率が高く、特徴をよく示しているものを中心提示している。ただし、刻印の認められる瓦については、種類や残存の度合いに関わらず、刻印部分を提示している。軒平瓦類の瓦当文様の分類は、年報9で示した分類名称を用いている。

1号溝からの出土が最も多く、他に1号遺構、4号遺構からも比較的多くの瓦が出土している。また、ピット17、ピット107からも比較的多くの瓦が出土している。

### 【古代の瓦】（図39、表22、図版32）

古代の瓦とみられるものは、8区西のA1層から出土したT001の1点のみである。瓦の本来の層序や遺構に伴うものではない。小破片で、瓦の種類や全体の特徴は不明であるが、片面には格子状の布目が観察される。二の丸北方武家屋敷地区では、第4地点（年報13）で多賀城創建期の軒平瓦や古代の平瓦が出土している。第7地点（年報19第2分冊）と、第11地点（調査報告1）では、T001と類似した平瓦の小片が1点ずつ出土している。

### 【軒丸瓦】（図39、表23、図版32・33）

軒丸瓦は7点出土している。1号溝から2点、4号遺構とピット164から1点ずつ、1層・擅乱から3点と、まとまった出土は確認されなかった。

このうち瓦当面の残存がよく、瓦当文様の特徴がよくわかる3点を図示した（T002～004）。瓦当文様が判明するものでは、連珠三巴文3点（T002）、三引両文2点（T003・T004）、巴文（左巻き）のみ残存したもの1点である。九曜文は出土していない。連珠三巴文のうち、巻きの方向が判明するものでは、右巻き、左巻きが1点ずつであった。

瓦当の直径が計測できるのは、三引両文の2点のみで、直径14.1～14.9cm、周縁幅1.4～1.7cmと、同程度の大きさである。

### 【軒平瓦類】（図39・46、表24、図版33・38）

軒平瓦類は、6点出土している。軒平瓦類としたものは、全体が残っていないため軒平瓦と断定できないものや、軒棟瓦になる可能性のあるものが含まれている。

1号溝から3点、1号遺構から1点、4号遺構から1点、1層・擅乱から1点と、まとまった出土は確認されなかった。このうち、瓦当文様が判明する2点を図示した（T005・T006）。また、T007は、文様は不明のため、全体形状は図示していないが、瓦当重ね部分の一部に刻印が観察されるため、刻印のみを提示している（図46、図

版38)。T005は、三枚笠2a+唐草1a類の瓦当垂れ文様である。T006は、細桔梗+唐草3b類である。2点とも、垂れの形状は太劍で、瓦当垂長は5.3~5.4cmである。

#### 【軒棟瓦】(図39、表25、図版33)

軒棟瓦は4点出土している。1号溝と1層・攪乱から2点ずつの出土である。そのうち、瓦当文様が判明する2点を図化した(T008・009)。いずれも1号溝出土である。T008は、小巴部分のみ残存している。右巻きの三巴文である。T009は、小巴部分と瓦当垂れ部分の一部が残存している。小巴部分は、左巻きの三巴文で、瓦当垂れ部分は、中剣の三枚笠+唐草1a類である。

#### 【丸瓦】(図40、表26、図版34)

丸瓦と特定できたのは17点である。そのうち、比較的の残存率のよい2点を図化した(T010・011)。それぞれ胴長は23.2cm、23.4cmとほぼ同じ大きさであるが、尻幅は12.6cmと14.3cm、高さは5.7cmと7.5cmと若干の差異が認められる。

#### 【平瓦1類】(図41・46、表27、図版34・38)

平瓦1類は、破片資料のうち、反りがあり、平瓦、棟瓦、軒棟瓦の一部である可能性があるものをまとめている。全体では362点と点数はやや多いが、計測可能な瓦はほとんど含まれていない。そのため、刻印があるものや特殊な調整痕がみられるものを図示している(T012~014)。3点はいずれも1号溝出土である。

#### 【平瓦2類】

平瓦2類は、破片資料のうち、反りがなく、平坦な瓦をまとめている。板塙瓦などの破片で、平坦な部分のみが残存しているような場合は平瓦2類に含まれている。127点出土しているが、図化して提示する資料はない。

#### 【平瓦】(図41・42、表28、図版34・35)

平瓦と特定できたのは3点で、すべてを図化した(T015~017)。1号遺構から2点、1号溝から1点出土している。頭幅は23.7~24.5cm、長さ27.8~29.5cmで、3点ともおおむね同程度の形状である。

#### 【棟瓦】(図42、表29、図版35・36)

棟瓦は7点出土している。そのうち、面戸付で特殊なT018と、比較的の残りのよいT019を図示した。

T018は、面戸付棟瓦で、棟瓦の尻側に板状の突起と釘穴3カ所が付いている。板状の突起は、棟と同じ高さで平坦に伸び、他端は垂直に途切れている。年報9において、この形態の瓦は、上に瓦を葺き重ねることができないため、棟際に用いられたものであり、突起は水を返すことはもちろんのこと、面戸としての役割を果たすことを意図したものと考察している。同様の瓦は、二の丸地区第4地点・第9地点の調査(年報4・5、年報8)において出土している。

T019は、きき足が左にある右棟瓦で、頭切り込みは付かない。

#### 【板塙瓦】(図43・44・45、表30、図版36・37・38)

板塙瓦は56点出土している。1号溝、1号遺構b、ピット17からの出土がやや多い。そのうち、残りのよいものと面戸付きで特殊なもの6点を図化した。

T020は棟が右側にあり、T023~025の3点は棟が左側にある。これらは、棟の位置は大きく異なるが、全長

36.3～37.2cm、全幅31.7～32.4cm、棟幅4.8～5.7cmとほぼ同様の大きさを示している。また、尻側に釘穴3カ所、頭側中央に釘穴1ヶ所があり、上面に溝1条が観察されるなど、ほぼ同じ規格を示しており、共通点も多い。

T021、T022は、面戸付板端瓦で、尻際が厚みを増す形態をしており、その部分に釘穴が観察される。T021は棟が右側に、T022は棟が左側にある。いずれも棟は山形の形状をしている。同様の瓦は、二の丸地区第5地点の調査において出土している（年報6）。

#### 【面戸瓦】（図45、表31、図版38）

面戸瓦は、5号柱列柱4からの出土したT026の1点のみである。半分程度残存しており、長さ9.2cmである。

#### 【輪違い】（図45、表32、図版38）

輪違いは1層・搅乱から2点出土しており、そのうちほぼ完形のT027を図示した。長さ12.8cm、上幅10.2cm、下幅14.5cmである。

#### 【その他の瓦】（図45・46、表33、図版38）

その他の瓦として図示したのは、谷丸瓦（T028）と鬼瓦（T029）である。

T028の谷丸瓦は、垂れ部分のみの残存である。瓦の尻を上にして、垂れが右に付く形態である。垂れの下部は直線的でなく、抉りが入り、面戸状になっている。

T029は鬼瓦の一部分と考えられる。棟の両端を飾る鬼瓦の装飾のうち、両側に延びる部分から、上方に分岐する飾り部分と考えられる。そのように仮定すると、若葉型の装飾になると推測される。

#### 【刻印のある瓦】（図46、表24・27、図版38）

刻印が観察される瓦は、瓦の残存状態や刻印の場所に関わらず、刻印部分を図化している。刻印が確認された瓦は3点である（T007、T013、T014）。

T007は軒平瓦類に分類される瓦で、垂れ部分に、山に「守」の刻印が観察される。T013、T014は、破片資料で、平瓦1類に分類される。T013は「モ」と推測される刻印、T014は山に「守」の刻印が観察される。

## 6. 木製品・漆塗製品（表13）

今回の調査において、本製品・漆塗製品の出土は非常に少なく、残存状態が良好なものも少ない。

漆塗製品では、椀の可能性が考えられるが器形が崩れて判別しにくいもの、漆膜のみが残存したもの、板状の木片に漆が塗られているものなど、7点が出土した。本製品では、楔状の木製品、杭、箸？、加工木など、合計10点が出土した。残存状態が悪いため、図化したものはない。

## 7. 金属製品（図47～51、表12・34～37、図版39・40）

金属製品は、古銭や煙管などの銅製品と、釘などの鉄製品とに分類して集計している。鉛製品の出土はみられなかった。鉄製品の和釘がやや多い程度で、銅製品も鉄製品も出土量はあまり多くはない。4号遺構、1号溝、1層・搅乱からの出土がやや多い。

古銭については、出土した全点を登録し、可能な限り図化して提示している。その他の金属製品は、残存状態のよいものや、特徴的な形状のものを抽出して、可能な限り図化した。

### 【古銭】（図47、表34、図版39）

古銭は、古寛永4点、新寛永6点（うち文銭1点）、寛永通寶（鉄錢）2点、四文銭（鉄錢）1点（26枚）、十銭白銅貨1点が出土している（MC001～014）。

1層・搅乱からの出土が中心で、他に、1号溝、4号遺構、A1層から出土しているが、1、2点ずつである。

MC001、MC011は文銭である。MC002の四文銭は、26枚が繋がった状態で出土している。大きさからすべてが四文銭であると考えられる。一端の裏文は、「波」「盛」と観察される。破損の恐れがあり、分離することができず、個々の特徴については観察できなかった。MC004、MC014は、寛永通寶の鉄錢である。MC013は十銭白銅貨である。十銭白銅貨は大正9年から発行されており、MC013には「大正十二年」の年号が観察される。

### 【煙管】（図48、表35、図版39）

煙管は3点を図化した。煙管の形態分類は、年報6に従っている。分類の模式図は、年報18に掲載しており、参照されたい。図化したMO001～003は、いずれも吸口部分である。1層・搅乱と1号溝からの出土である。吸口の形態は、いずれもⅡB類に分類されるもので、一本の管から製作され、肩のない形状のものである。MO002は、内部にラウが遺存している。MO003は、互の目文が数段に配される文様である。

### 【その他銅製品】（図49・50、表36、図版39・40）

その他の銅製品では、小柄の柄、簪、銅釘、管状銅製品、輪状銅製品、目貫が出土している。

小柄の柄は2点出土している（MO004、MO007）。8号遺構と1号溝からの出土である。MO004は、片面に花と葉の文様がみられる。MO007は、片面に毛彫りによる文様がみられるが、文様の詳細は不明である。

MO005は、種類不明の銅製品であるが、釘状の形態をしており、留め金具の一部とも考えられる。

MO006、MO009、MO015は、管状銅製品とした。アワセメがみられ、煙管のような形態ではあるが、直線的であり、両端ともほぼ同じ径をしている。煙管の吸口であれば、どちらかの一端は細くなると考えられ、雁首であれば火皿に接続する部分は、若干でも湾曲すると考えられる。煙管とはし離いため、管状銅製品とした。MO015は、内部に木質とみられるものが残存している。

MO008は、用途不明であるが、紐状のものを通して使用した可能性が考えられる。MO010は、輪状の形態をした銅製品である。2ヶ所に小孔があり、何らかの留具の可能性が考えられる。MO011は、円形の銅製品で、内面には何らかの接着剤のような付着物がみられる。

MO012は、線状の銅製品である。MO013は目貫である。薄板の型による押し出しによって文様が作られている。MO014とMO018は形状から簪と考えられる。MO016は幅1.2cmの板状の銅製品で、2個1対の小孔が4ヶ所あり、片面には漆が付着している。

#### 【鉄製品】(図51、表37、図版40)

鉄製品で図化したのは3点である。MO019は、ピン状の留め金具とみられる。MO020は、さなと考えられ、全体に赤色化しており、被熱痕が観察される。MO021は、建具や調度品の飾り金具とみられ、表面の一部には漆が残存している。

#### 8. ガラス製品 (表13・39、図版41)

ガラス製品は、ガラス玉、小瓶、ビール瓶の3点が出土している。そのうち、ガラス玉(G001)を写真で提示している(図版41)。4号遺構からの出土で、断面には、螺旋状の縞が観察され、巻き付け成形されたものと考えられる。

#### 9. 石器・石製品 (図52、表13・38、図版41)

石器は全て剥片である(S001~S004)。S002、S004の2点は石英製であり、S001a、S001b、S003の3点は石英安山岩である。4号遺構埋土から出土している2点(S001a、S001b)には接合関係が認められるが、明確な打点が確認できないため、節理のある面における意図的でない割れによる可能性が高い。

石製品では、碁石、硯、火打石、砥石、印鑑などがみられる。

図示した火打石はメノウ製である(S005)。素材には自然面が大きく残存している。稜線の一部が強く磨滅しているのが認められ、使用された痕跡が確認できる。

碁石としたものは、粘板岩製の黒石である(S006~S008)。これら3点の碁石は、形状の特徴から正円・薄型に分類できる。

硯(S009)は粘板岩製である。海から波浪にかけて大きく欠損している。縁は一部が残存してはいるが、ほぼ全周において欠損している。残存している際の部分にはほぼ同一方向を向いた線状痕がいくつかのまとまりを形成している特徴が認められる。硯破片(S010)としたものは、粘板岩製である。形状の特徴から硯の縁の一部であると考えられる。内面には同一方向を向いた線状痕が多く認められる。

S011は粘板岩製である。欠損部以外の全ての面が磨かれ、若干の光沢を帯びている。

砥石は粘板岩製である(S012~S014)。図示した全ての砥石の表面に幾つかの線状痕のまとまりが認められる。特に、S012には側面に同一方向を向いた明晰な線状痕が多く確認できる。

印鑑(S015)は、印面には四角く溝が彫られ区画されたと考えられる内部に細く文字と想定される彫り込みが確認できる。ただし、文字に関しては判読することは困難である。印側には、数本の線状痕のまとまりが認められる。

## 10. 動物遺存体（表40・41、図版40）

川口貴史

武家屋敷地区第13地点から出土した動物遺存体の概要を以下に記す。同定作業の結果、貝類4種類、魚類1種類、哺乳類1種類の存在が確認された。同定に当たっては、奥松島郷文村歴史資料館（東松島市）所蔵の骨格標本を使用させていただいた。

貝殻の一部にはカルシウム分の溶脱が進んで脆弱なものがある。脆弱な資料体は、樹脂（パラロイドB72）により保存処理が施された。

同定された動物遺存体の種名一覧を下記に示す。

### 武家屋敷地区第13地点出土動物遺存体種名表

#### 二枚貝綱 Bivalvia

チョウセンハマグリ *Meretrix lamarcki* Deshayes

シジミガイ科 Corbiculidae gen. et sp. indet.

マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)

#### 硬骨魚綱 Osteichthys

種不明 indet.

#### 哺乳綱 Mammalia

ウマ *Equus caballus* Linnaeus

1号溝から、チョウセンハマグリ、シジミガイ科、ミミガイ科（アワビ類）が1点ずつ確認された。シジミガイ科とミミガイ科の貝類は、殻の分解が進んで脆弱な状態にあり、種の判別は困難であった。ただし、シジミガイ科では、黒色の殻皮が一部に残存している。

ピット144からは、マガキが確認された。ほとんどが破損して細片化している。殻頂部による算定で、左殻6点、右殻2点を数える。幼貝とみられる殻高43mmほどの小さな左殻も含まれていた。

4号遺構からは、マガキの破片が一点のみ確認されている。

遺構外の1層・搅乱からは、同定不能の貝殻片、種不明魚類の椎骨が1点、ウマの左側の上顎白歯1点が確認された。種不明魚類の椎骨は、受熱により白色化している。ウマの上顎白歯は、上顎骨を伴わない遊離歯で、第三前臼歯から第二後臼歯のうちのいづれかである。咬合面の一部と歯根部が破損している。これにより歯冠高の計測は不可能である。なお、残存している歯冠部の歯冠高は78mmであった。咬合面をみると、咬耗のあまり進んでいない個体である。



圖27 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (1)  
Fig. 27 Porcelains from BK13 (1)

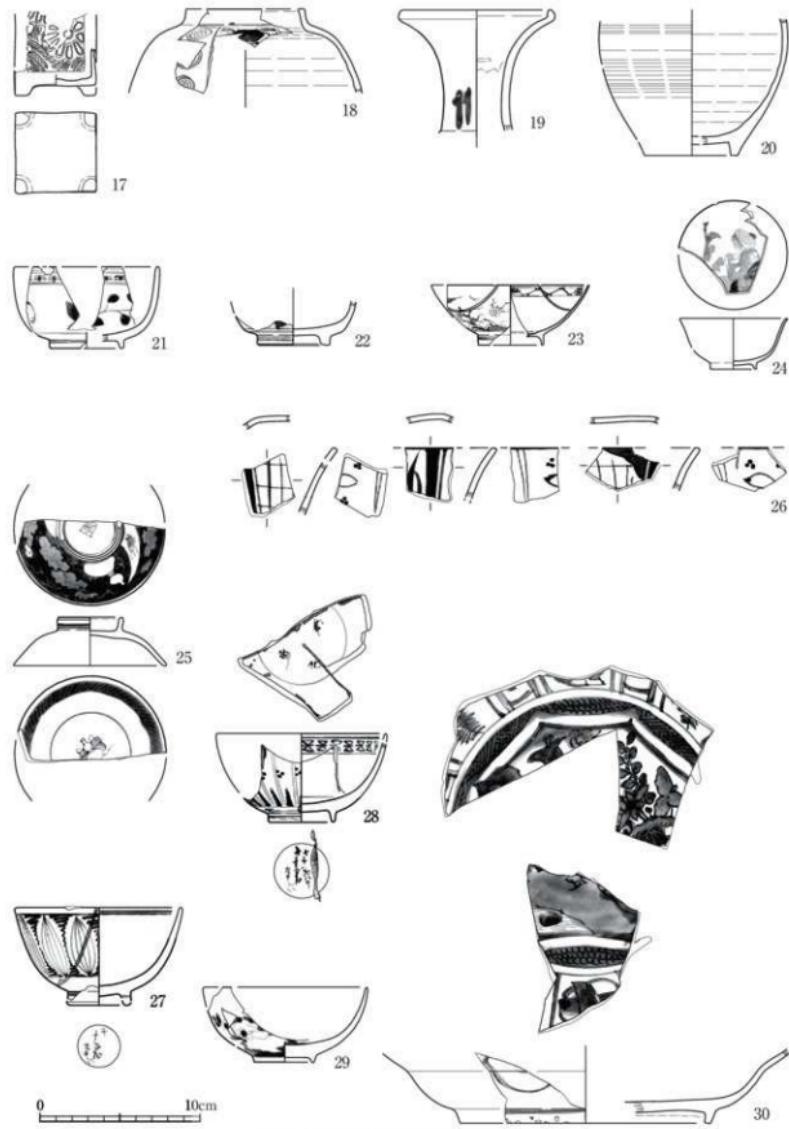


圖28 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (2)  
Fig. 28 Porcelains from BK13 (2)

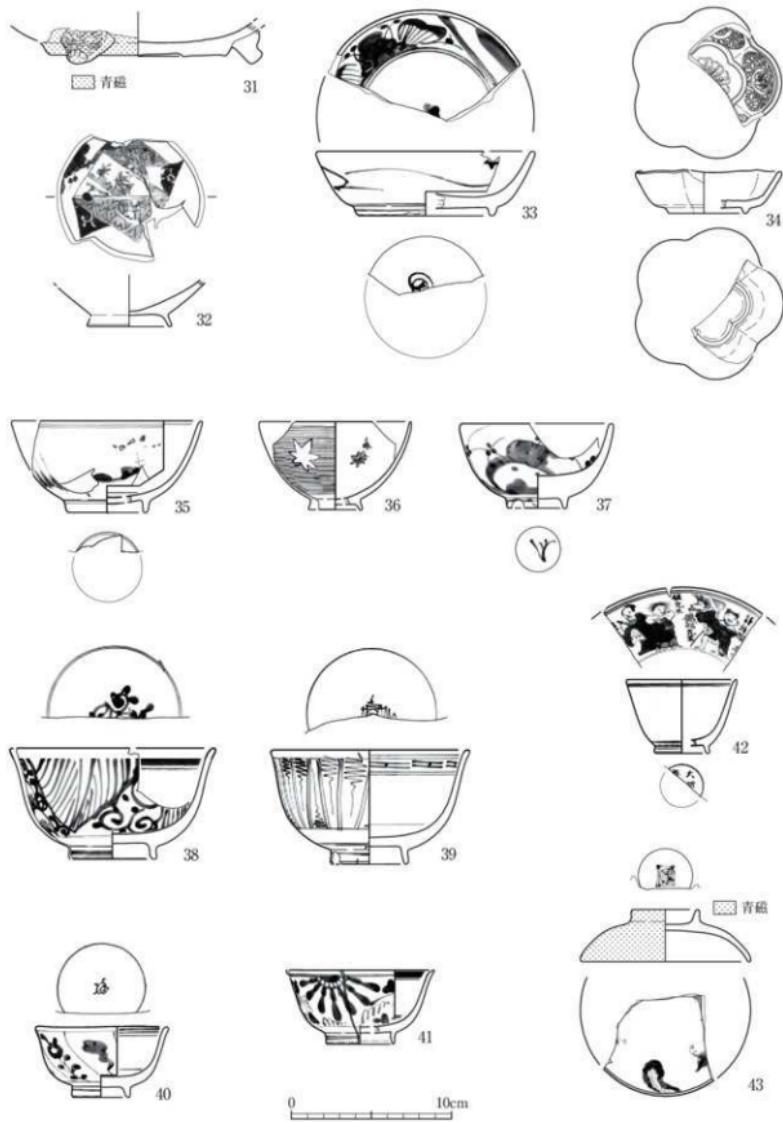


圖29 武家屋敷地區第13地點出土磁器 (3)  
Fig. 29 Porcelains from BK13 (3)

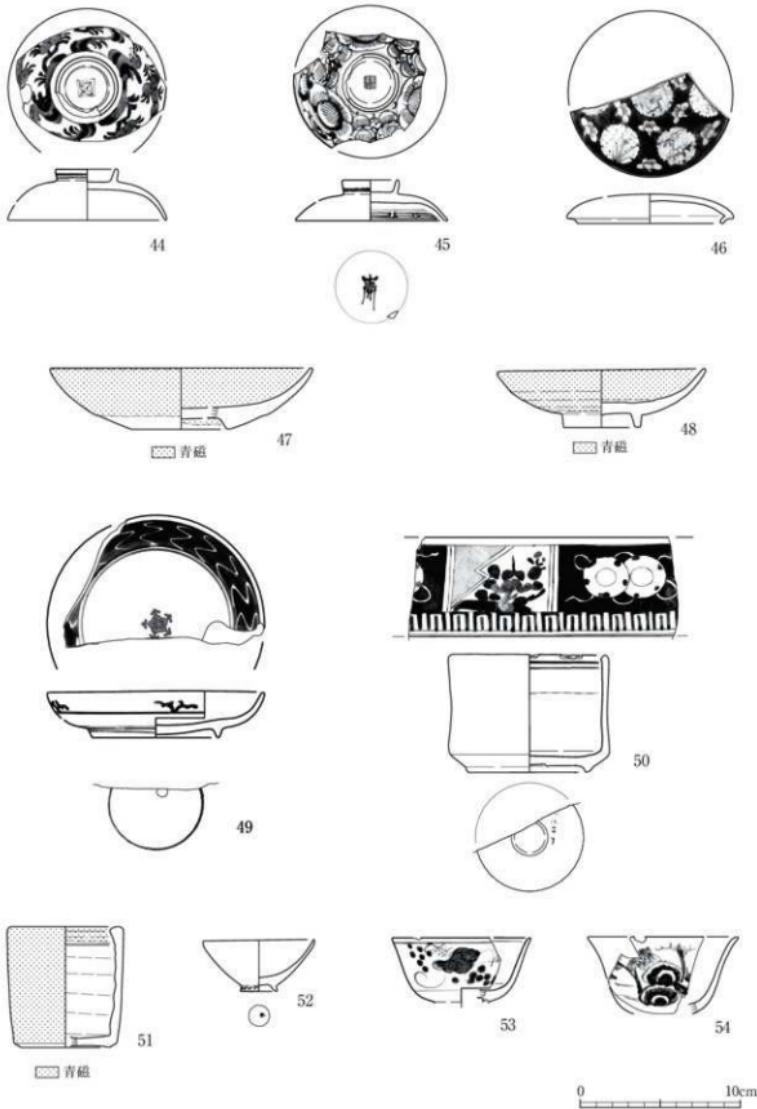


圖30 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (4)  
Fig. 30 Porcelains from BK13 (4)

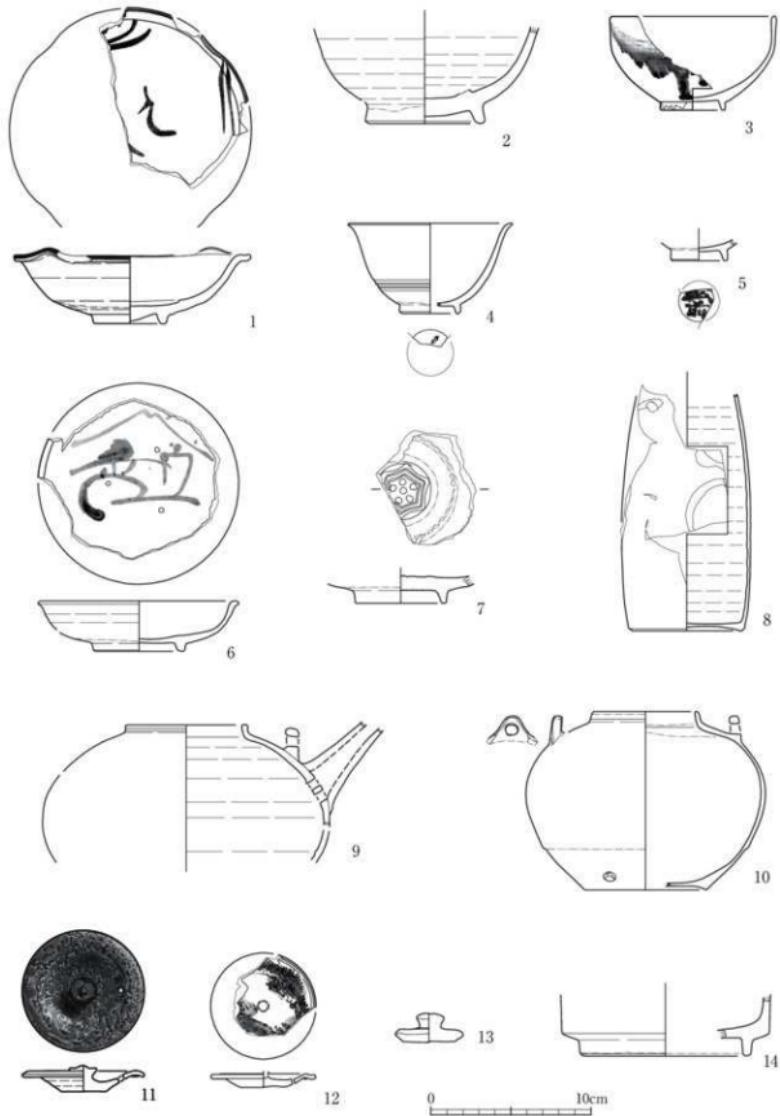


圖31 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (1)  
Fig. 31 Glazed ceramics from BK13 (1)

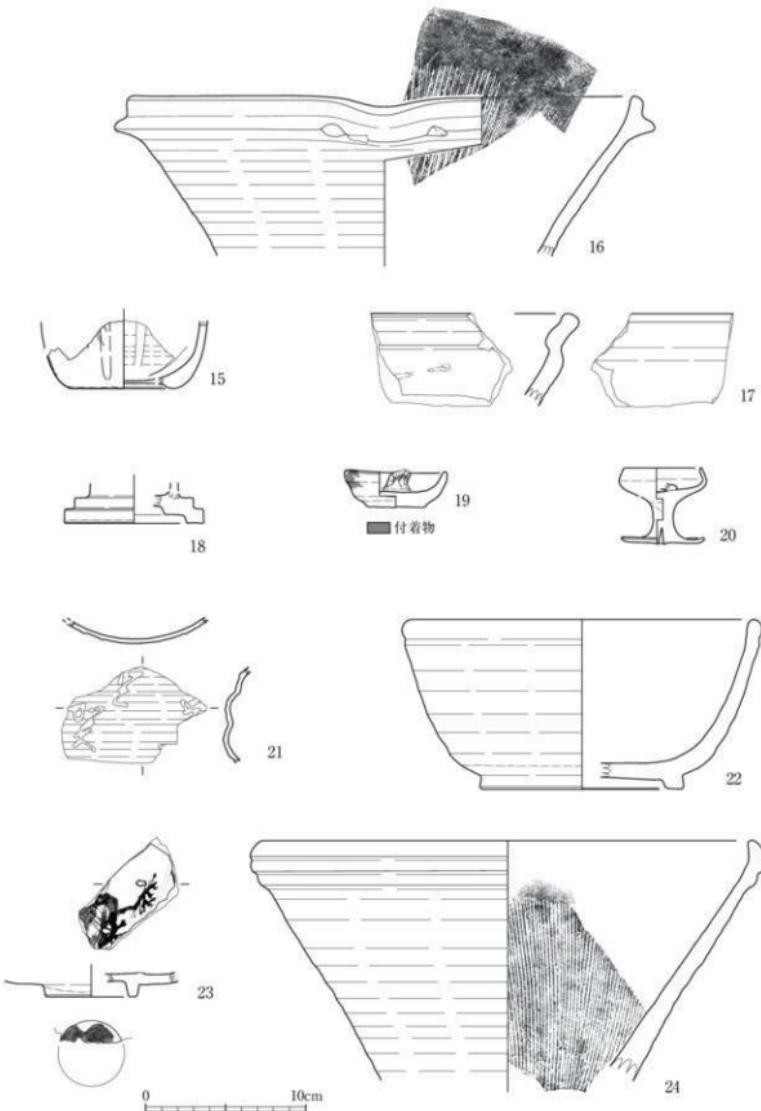


圖32 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (2)  
Fig. 32 Glazed ceramics from BK13 (2)

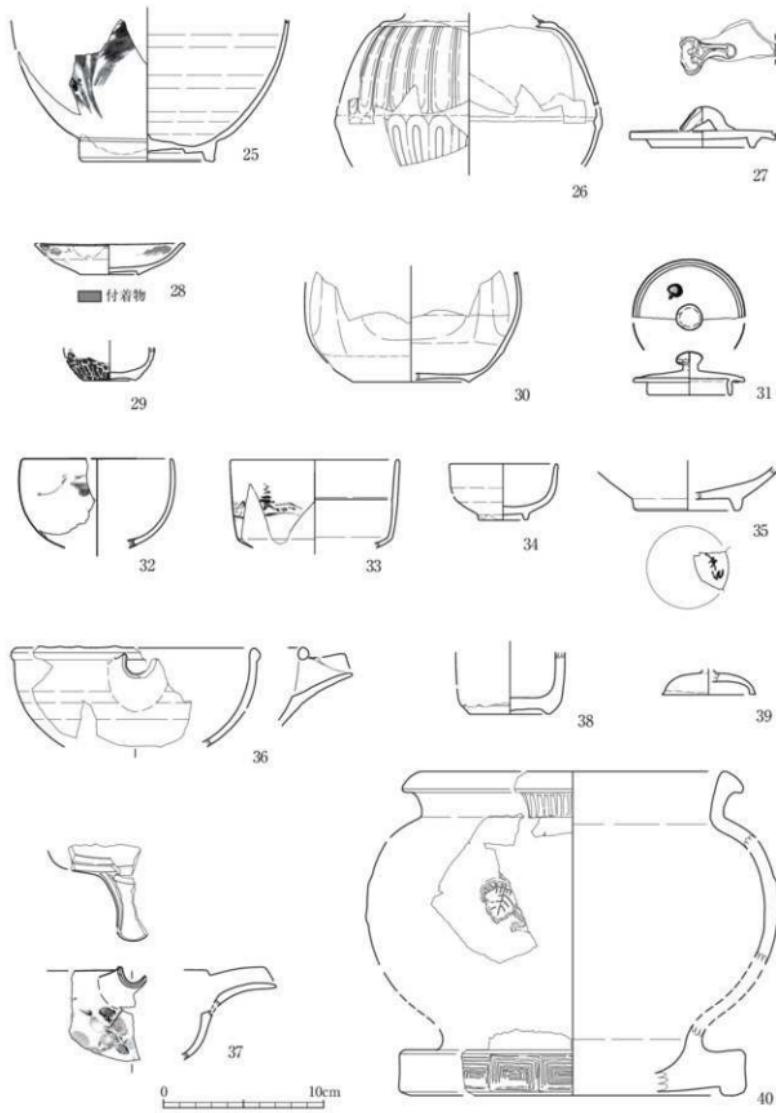


圖33 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (3)  
Fig. 33 Glazed ceramics from BK13 (3)

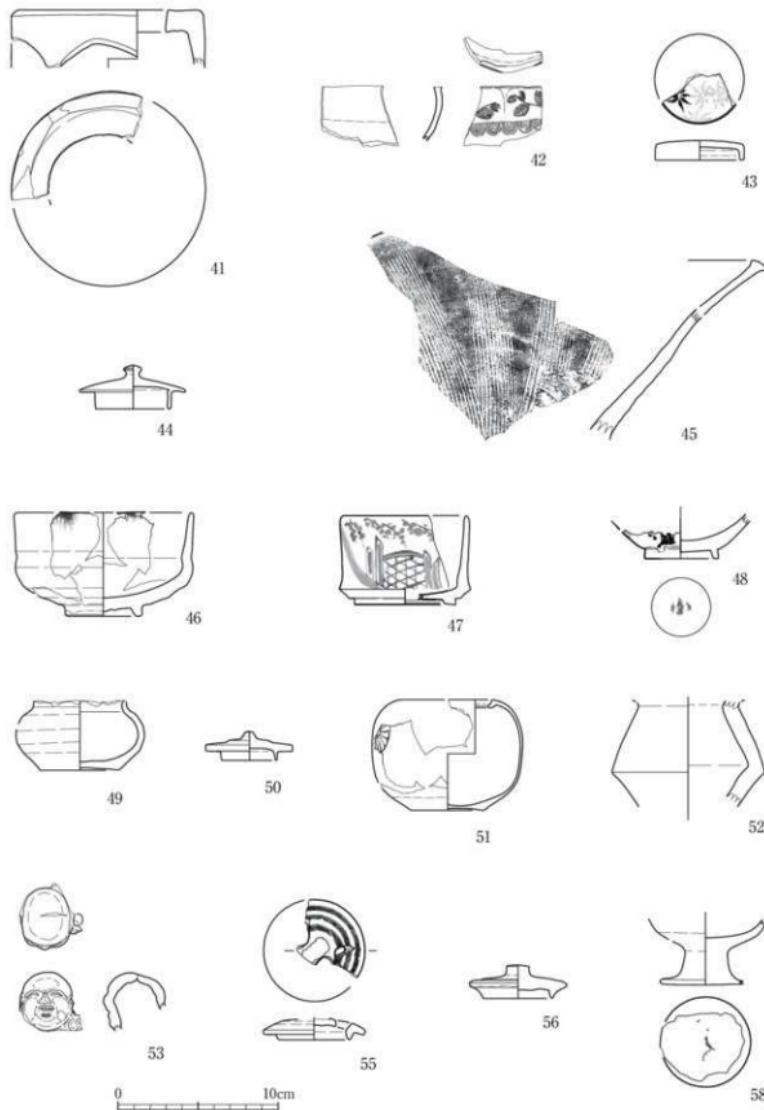
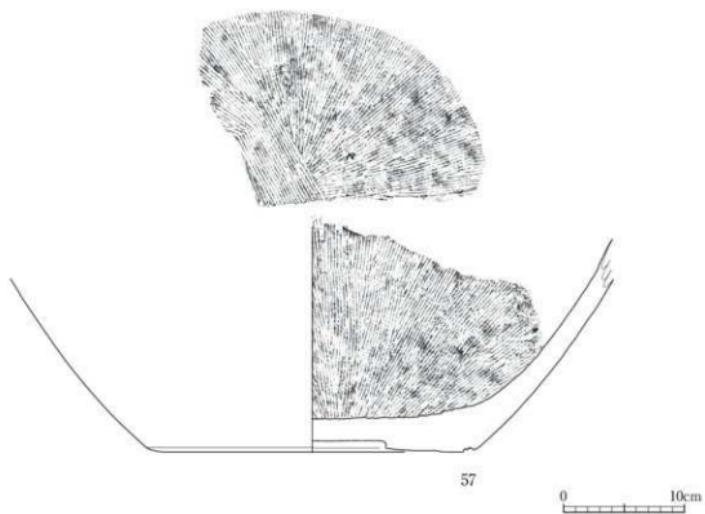


圖34 武家屋敷地區第13地點出土陶器 (4)  
Fig. 34 Glazed ceramics from BK13 (4)



54



57

0 10cm

圖35 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (5)  
Fig. 35 Glazed ceramics from BK13 (5)

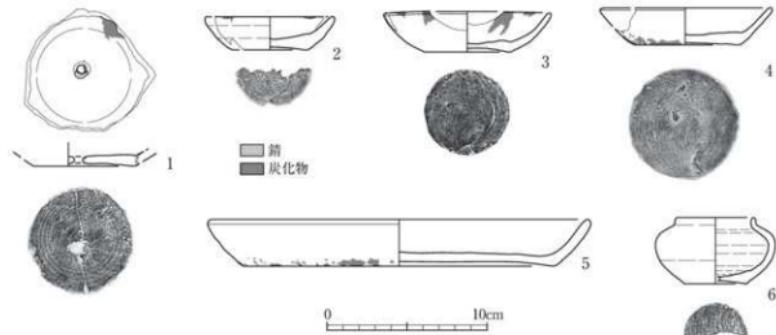


圖36 武家屋敷地区第13地点出土土器  
Fig. 36 Unglazed ceramics from BK13 (1)

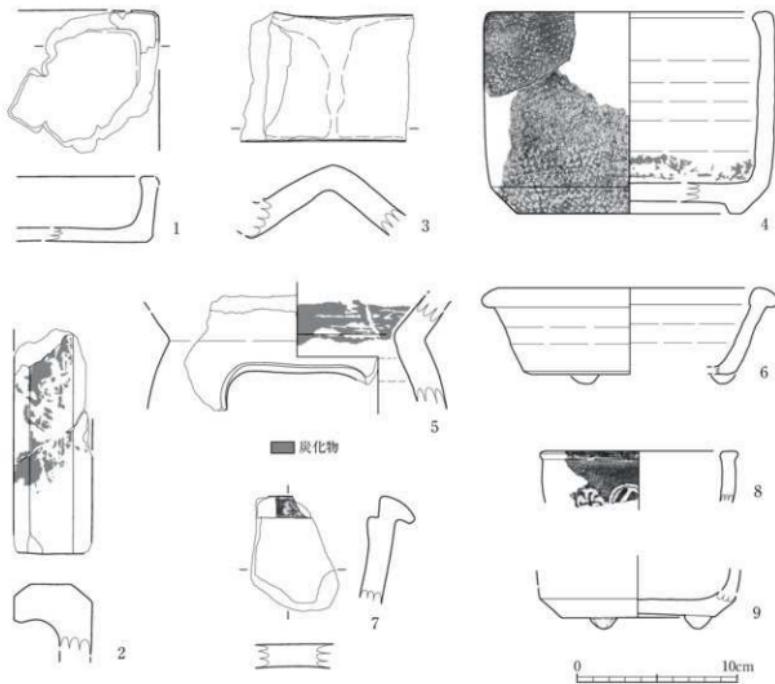


圖37 武家屋敷地区第13地点出土瓦器  
Fig. 37 Unglazed ceramics from BK13 (2)

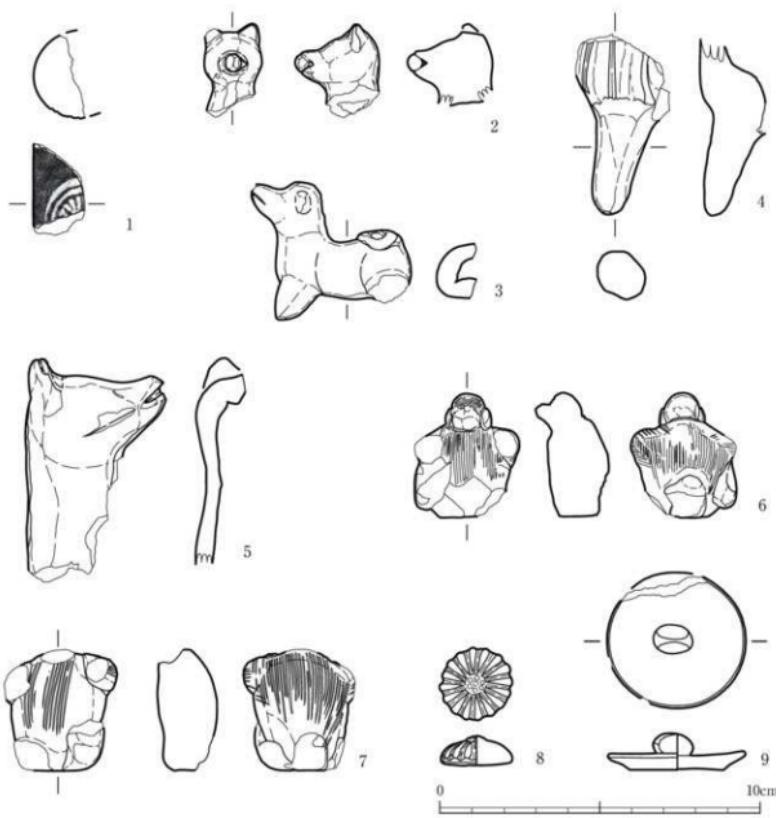
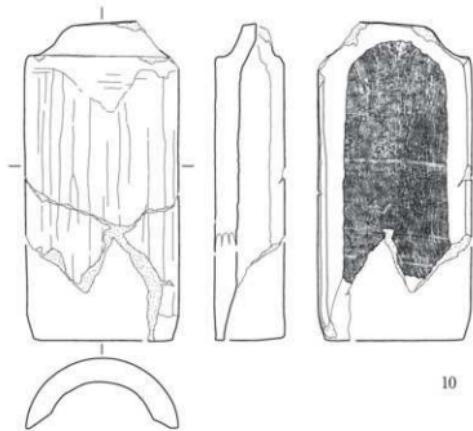


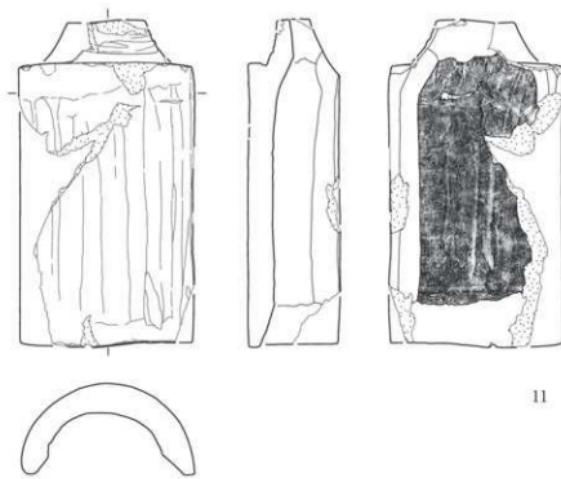
圖38 武家屋敷地区第13地点出土土製品  
Fig. 38 Clay objects and figures from BK13



图39 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (1)  
Fig. 39 Various roof tiles from BK13 (1)



10



11

0 10cm

圖40 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (2)  
Fig. 40 Various roof tiles from BK13 (2)

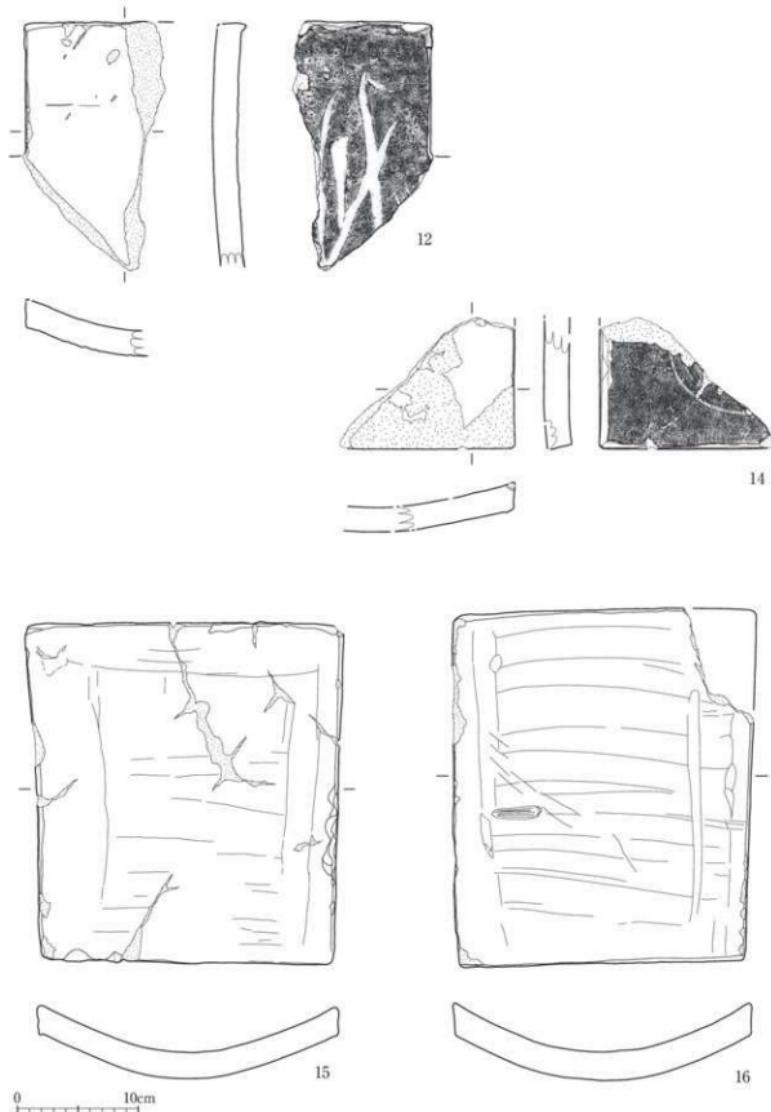
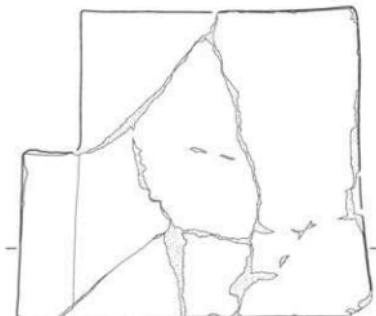


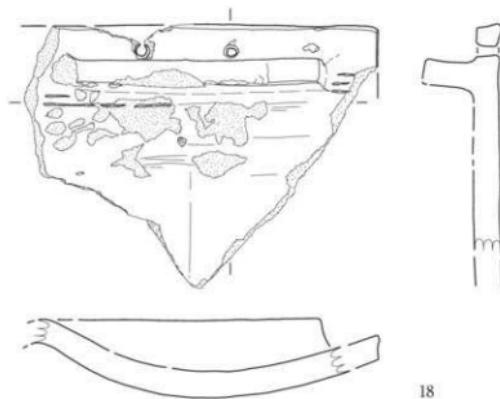
图41 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (3)  
Fig. 41 Various roof tiles from BK13 (3)



17



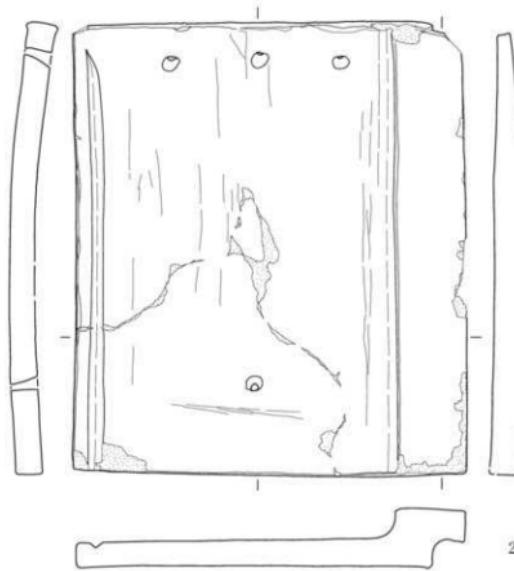
19



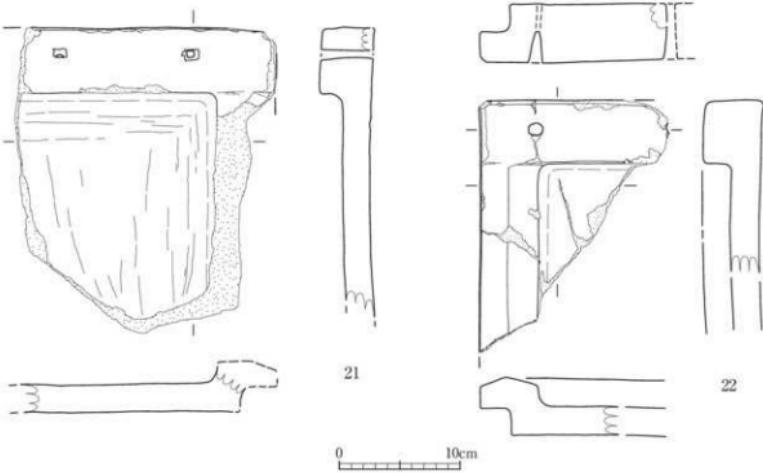
18

0 10cm

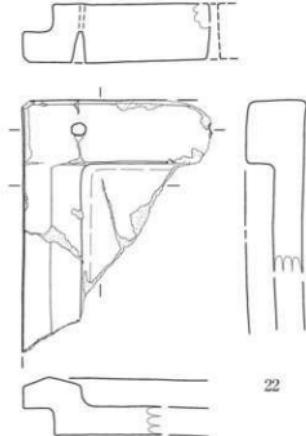
图42 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (4)  
Fig. 42 Various roof tiles from BK13 (4)



20



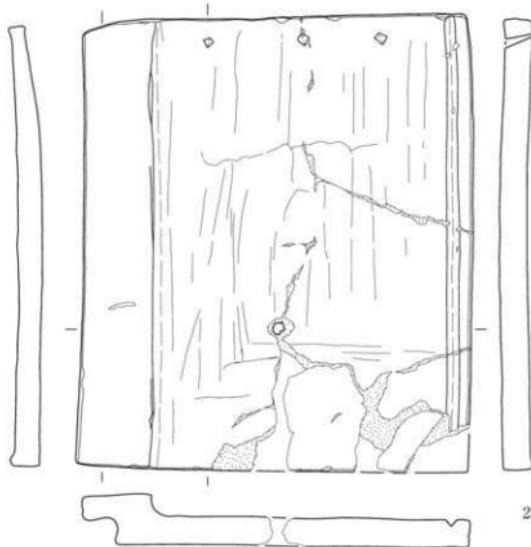
21



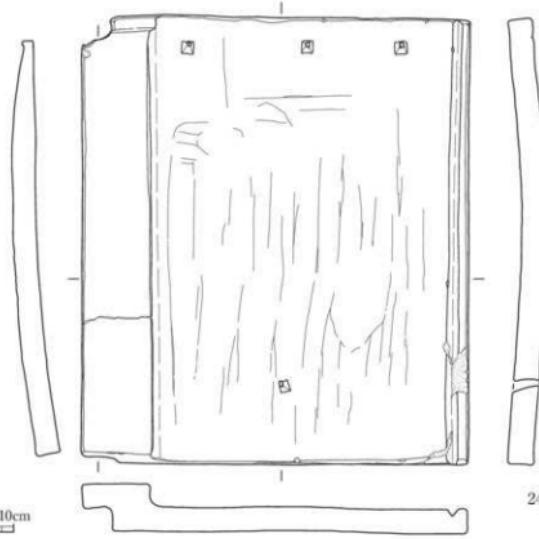
22

0 10cm

圖43 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (5)  
Fig. 43 Various roof tiles from BK13 (5)



23



24

图44 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (6)  
Fig. 44 Various roof tiles from BK13 (6)

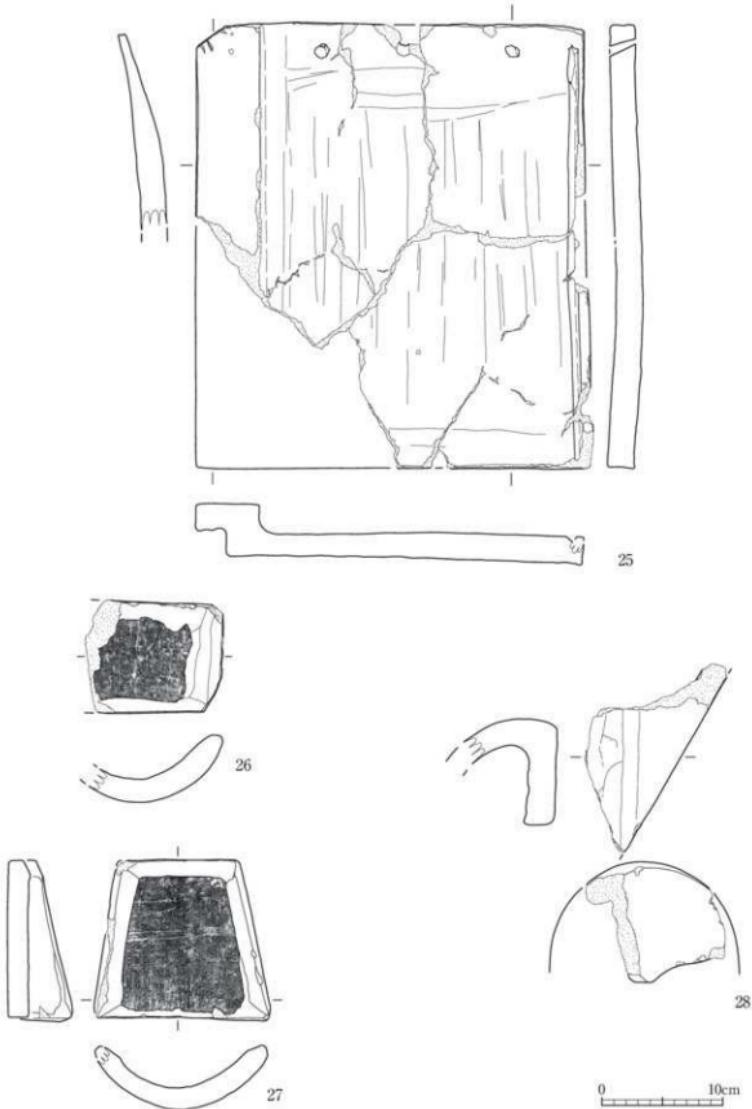
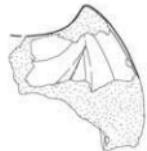
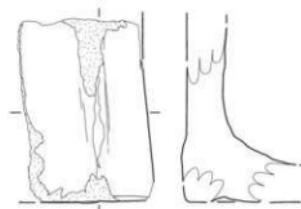


圖45 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (7)  
Fig. 45 Various roof tiles from BK13 (7)



29



13



0 10cm



14

0 3cm

圖46 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (8)  
Fig. 46 Various roof tiles from BK13 (8)

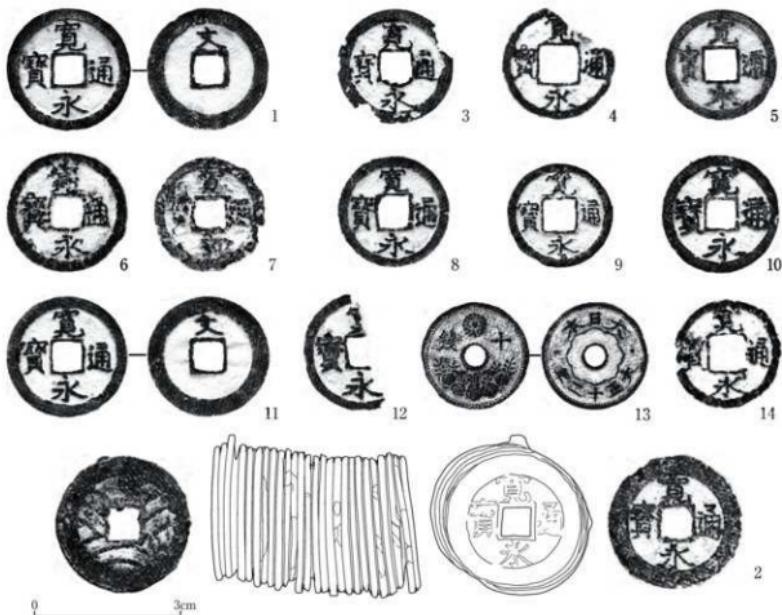


図47 武家屋敷地区第13地点出土古銭  
Fig. 47 Coins from BK13

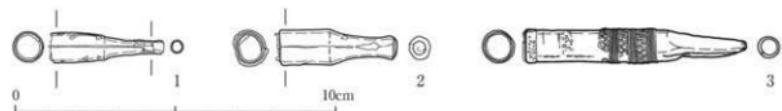


図48 武家屋敷地区第13地点出土煙管  
Fig. 48 Pipes from BK13

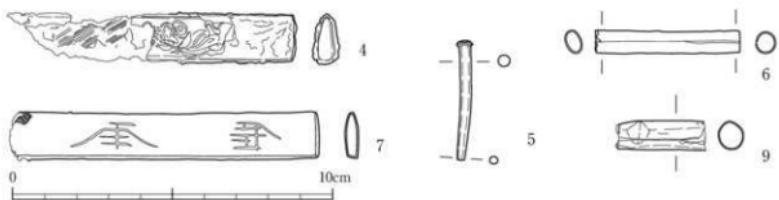


図49 武家屋敷地区第13地点出土その他の銅製品 (1)  
Fig. 49 Various implements made of copper from BK13 (1)

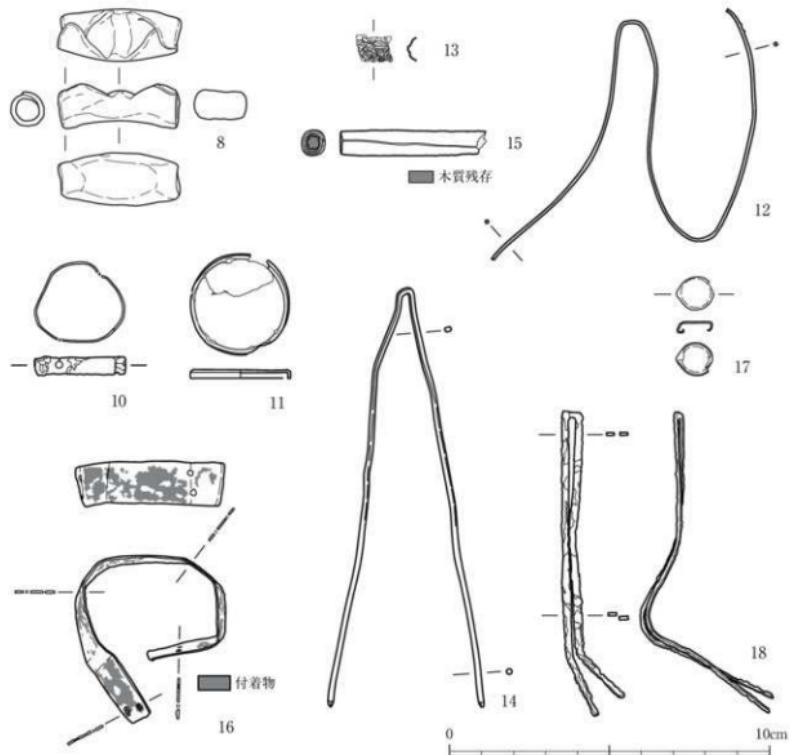


図50 武家屋敷地区第13地点出土その他の銅製品 (2)  
Fig. 50 Various implements made of copper from BK13 (2)

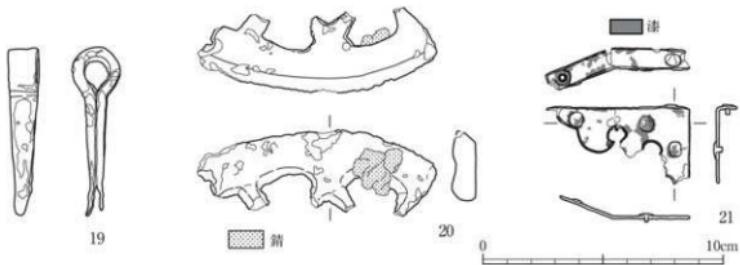


図51 武家屋敷地区第13地点出土鉄製品  
Fig. 51 Various implements made of iron from BK13

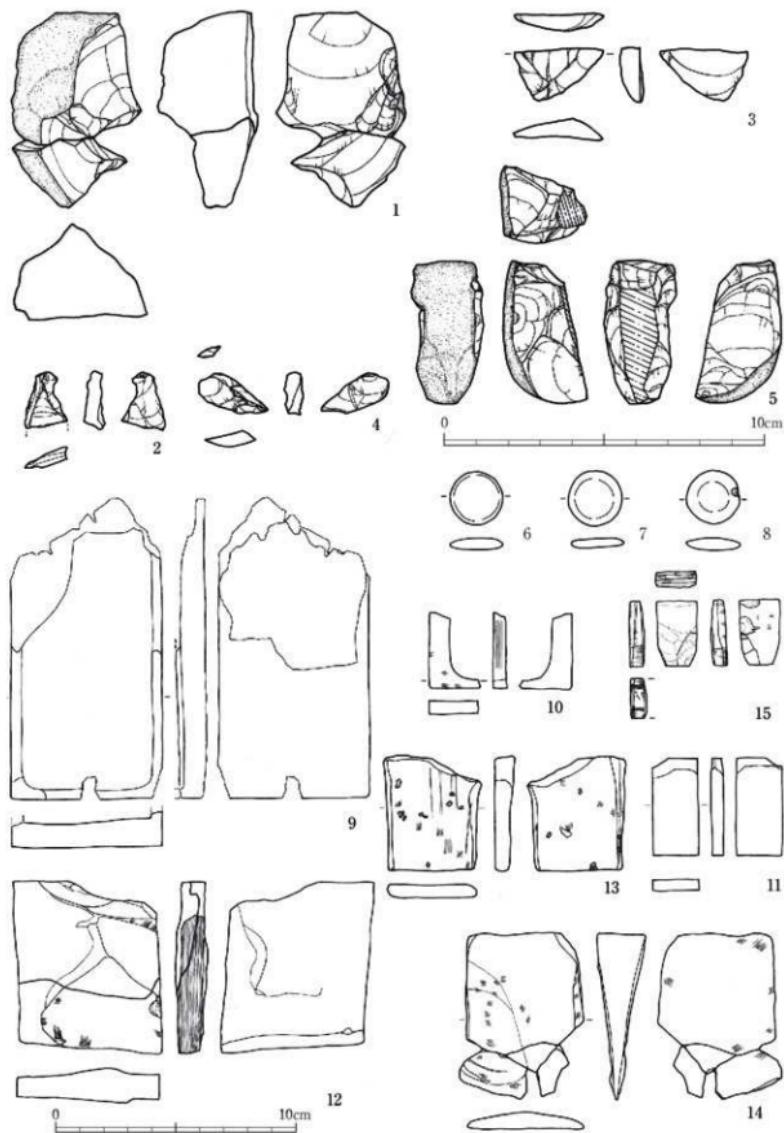


圖52 武家屋敷地区第13地点出土石器·石製品  
Fig. 52 Stone tools and stone implements from BK13

表 8 武家屋敷地区第13地点出土磁器集計表  
Tab. 8 Distribution of porcelains from BK13

EDUCATIONAL ASPECTS OF POLYCHLORINATED BIPHENYL

表 9 武家屋敷地区第13地点出土陶器集計表  
 Tab. 9 Distribution of glazed ceramics from BK13

Tab. 9 Distribution of glazed ceramics from BK13

表10 武家屋敷地区第13地点出土瓦集計表  
Tab. 10 Distribution of roof tiles from BK13

表11 武家屋敷地区第13地点出土土質質土器・瓦質土器集計表  
Tab. 11 Distribution of unglazed ceramics from BK13

区	出土場所	土師質土器					瓦質土器					合計		
		風	火消壺	鉢	盆	その他	不明	板造り	風	火消壺	鉢	盆	その他	
1区	1号溝	73		鉢類3	1		24	3 十面1、六面1、三面2、鉢類(複数)1、盆類2	20				131	
	1号道構a	3										1	4	
	1号道構b	3										3		
	3号道構	8					5	2				1	16	
	4号道構	29		鉢類3	5		15	2 三面1、鉢類3、甕類1	12			2	81	
	6号道構	1					2	3 三面1、方形鉢状1	2			2	7	
	8号道構	2											2	
	9号道構							1					1	
	15号道構	11					3					4	18	
	ピット45	1											1	
2区	ピット107	11					2					1	14	
	ピット164	3										1	4	
	ピット187							1				1	2	
	A1層(1区)	18		鉢類1		灯明皿1	35	1 鉢類1、灰陶1				6	64	
3区	1層・複乱(1区)	103		4 鉢類3	2	灯明皿1、甕?1	38	2 鉢類9、三面2、甕類1				22	188	
	1層・複乱(2区)	2					2	1 鉢類1				1	7	
4区	13号道構							1 鉢類1					1	
	5区	1層・複乱	2										2	
8区西	A1層	3		鉢類1		甕1	2					1	8	
	A2層	3											3	
8区東	1層・複乱								鉢類1			1	2	
	出土場所不明											1	1	
合計		286	4	11	8		4	129	12			31	75	560

表12 武家屋敷地区第13地点出土金属製品集計表  
Tab. 12 Distribution of various implements made of metal at BK13

区	出土場所	銅製品					鉄製品					合計
		古銭	新銭	その他	錫管	その他	不明	和釘	洋釘	その他	不明	
1区	1号溝		1		吸口1		薪1、鉢状1、銅金具1、板状1、小柄の柄1	3	10			22
	3号道構							1				1
	4号道構						日貫1、縁金具1?1、ボタン状1、鉢1、板状1、銅金具1	5		東亞鉄線1、留め金具3、		42
	6号道構									鉄鉗26		1
	8号道構						1 小柄の柄1					2
	15号道構						1		3	ぬり金具1、箋1		8
	ピット11								1			1
	A1層(1区)	1			1	鉢1		9		和釘1		16
	1層・複乱(1区)	4	4	十銭白銅貨	吸口2	薪1、鉢状1、銅金具1、板状1、縁金具1?1、板状1、	4	10	2	板状1、著状(木付)1、著状1、	7	45
	1層・複乱(2区)					縁か?1	1	1	1	板状(木付)1		6
合計		41	6	11	6		22	91	39	31		391

表13 武家屋敷地区第13地点その他の遺物集計表  
Tab. 13 Distribution of various implements at BK13

区	出土場所	土製品				軋質施釉陶器			漆塗製品			本製品	植物遺存体	石器・石製品	ガラス製品	合計
		土師質	軟質	施釉	陶器	焼成	他	不明	漆	糊	その他					
1区	1号溝	1	2	1	4	38	2	16	椀?1			加工木3	種子3	縁2、鉢右1、不明 粘液豆6、縁2		82
	3号道構					1	1	1							4	
	4号道構	1	2	1	15	10	薪1、板?1	板状1、縁1、板状1		板?2、		種子2	縁2?1、縁1、不明 粘液豆4、齊子1	ガラス玉1	47	
	16号道構					1									1	
	15号道構					6			漆(漆)1	漆?1、加工木1	種子1				10	
	ピット164								漆1						1	
	A1層(1区)	1	2		3	4							漆片1、齊子1、水打 右1、不明粘液豆2		15	
	1層・複乱(1区)	6	5	2	4	45	1	9		漆状1、加工木1			漆片1、不明粘液豆3、 縁1、不明粘液豆3		83	
	1層・複乱(2区)												縁1	小瓶1、 ビーン瓶1	3	
	A1層					1								大打右1	2	
8区東	A2層					1		1						不明石製品1	3	
	A1層					1		1							2	
8区西	A2層					1									1	
	出土場所不明					1									1	
合計		7	8	4	15	1112	3	42	4	3	10	6		37	3	255

表14 武家屋敷地区第3地点出土器皿調查表(1)  
Tab. 14 Notes on porcelains from BK13(1)

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様	出土	生産地	製作年代	備考	図
CJ001	8号通棟板塀外	小中皿	—	11.3	—	見込み青花花卉文	審	中国	明(嘉靖) (1522-1566)	欠損部分は意匠的な嵌打鉢か 景徳鎮	27
CJ002	弓張瀬土1号	小中皿	14.0	6.9	32	斜格子文	審	肥前	18c	地の目刺繍 地源刷毛焼存	27
CJ003	弓張瀬土1号	桶木鉢?	—	—	—	—	普通	肥前	19c	墨書「利久」札あり	27
CJ004	弓張瀬土2号	中型丸碗	11.2	—	—	色絵(金・赤・緑・黒) 桟付に花文 斜格子文	審	肥前	18c前半?	—	27
CJ005	弓張瀬土1号	中型丸碗	10.8	4.8	6.1	和花文 高台内面直営長春」跡	普通	肥前	17末~18c後	—	27
CJ006	弓張瀬土1号	中型丸碗	10.0	3.8	5.4	同上文 線描淡墨文	普通	肥前	18c前~中	漆運び	27
CJ007	弓張瀬土1号	中型丸碗	—	4.0	—	二重網口文 直台内焼「風」 肌	普通	肥前	18c中~後	—	27
CJ008	弓張瀬土1号	小碗端灰	—	3.5	—	草花立繪 文思模様あり	普通	肥前	19c	—	27
CJ009	弓張瀬土1号	小呂尚形碗	—	4.7	—	色絵(赤・青・黒) 奉茶区側内青文 漢書文	審	肥前	18c前半	三引脚(底子組・背鉢・足) 高台内施輪	27
CJ010	弓張瀬土1号	小中皿	10.0	4.9	2.9	三引脚打輪花皿	切込	18c中~後	高台盤付(自留3.2cm)	—	27
CJ011	弓張瀬土1号	極小皿	8.5	3.8	2.3	白磁型打輪牡丹文 江注刷し文	普通	肥前	18c中葉	地網目 漆運びあり	27
CJ012	弓張瀬土1号	中碗蓋	9.4	—	—	見込み青花文	普通	肥前	18c前~中	つまみ紐(4cm)	27
CJ013	弓張瀬土1号	蓋物(通)	9.2	—	—	張線模様文に團子文	普通	肥前	18c前~中	—	27
CJ014	弓張瀬土1号	蓋物	7.4	4.3	4.2	解文(こくにんく) 团子文	審	肥前	18c	買入	27
CJ015	弓張瀬土1号	蓋物	8.6	—	—	斜格子文 頭部輪輪	普通	肥前	—	—	27
CJ016	弓張瀬土1号	深皿	14.5	10.0	6.0	花押草文	普通	肥前	18c後~19c初	地網目 漆運びあり	27
CJ017	弓張瀬土1号	火入・香炉	—	5.0	—	透彫 窓花文	普通	肥前	—	—	27
CJ018	弓張瀬土1号	土瓶	7.3	—	—	区両面文 漆毛文	普通	肥前	18c中~後	つまみ紐(4cm)	27
CJ019	弓張瀬土1号	仏花瓶	9.3	—	—	文様あり	普通	肥前	17c後~18c	—	27
CJ020	弓張瀬土1号	楕瓶	—	5.7	—	—	普通	不明	18c後半?	無他	27
CJ021	6号通棟裏土1号	中型丸碗	9.0	4.5	5.0	草花文	審	肥前	—	—	27
CJ022	9号通棟裏土1号	中碗(不明)	—	4.4	—	文様あり	普通	肥前	18c前~中	地網目 漆運び	28
CJ023	15号通棟裏土1号	中型平形碗	9.7	3.9	3.7	浅い茎文	普通	肥前	19c	—	28
CJ024	15号通棟裏土1号	小环	6.6	2.8	3.1	色絵(金・赤・青) 福寿喜に團扇子輪入文	審	不明	19c	—	28
CJ025	15号通棟裏土1号	中碗蓋	9.4	—	3.0	官(宮)字文 見込み雲雷文 線描模様文	普通	肥前	18c前~中	つまみ紐(4cm)	28
CJ026	15号通棟裏土1号	小中鉢	—	—	—	区両面子文 外側官字文	今今相	肥前	18c前半?	買入	28
CJ027	18号通棟裏土1号	中型丸碗	10.3	3.9	6.0	透彫文(さく)・透彫文	普通	肥前	19c前~中	高台内朱文字	28
CJ028	4号通棟裏土1号	中型丸碗	10.5	4.0	5.5	区両面よけ輪地文 見込「坂化」(刻)	審	肥前	18c中~後	「丁」字内朱文字	28
CJ029	4号通棟裏土1号	中型丸碗	10.1	3.7	4.6	草花文	普通	肥前	18c前~中	買入	28
CJ030	4号通棟裏土1号	大皿	—	15.5	—	青花芙蓉手花鳥文	普通	中国	明(嘉靖) (1522-1566)	掛輪點目・輪輪點目・垂幕	28
CJ031	4号通棟裏土1号	火入・香炉	—	10.7	—	青花 三足仕立て目四形高台 螺旋足	セラミクス	肥前	18c前半?	買入 漆衣見	29

表15 武家屋敷地区第3地点出土磁器組客表(2)  
Tab. 15 Notes on porcelains from BK13(2)

番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考
CJ032	16束 A1層	小口小・茶碗	—	5.1	—	赤絵(串・輪・黒・紫) 豪竹付繪文	密	肥前	19c前半?	
CJ033	16束 A1層	小中皿	13.5	8.3	4.0	青輪に草花文 見込み五分花文(にんにやく判) 高台内	普通	肥前	18c	29 25
CJ034	16束 A1層	極小皿	—	—	2.7	模様 七宝・梅文・牡丹文	密	繩口	19中葉	29 25
CJ035	立会点 A1層相当	中型丸碗	11.7	4.9	5.6	海浜風景文	普通	肥前	17c後半	29 25
CJ036	16束・碗・瓶	中型丸碗	9.3	3.3	5.4	模様(紅葉文)	やや粗	肥前	19c前~中	買入
CJ037	16束・碗・瓶	中型丸碗	9.5	3.6	5.2	青輪に草花文 高台内就	普通	肥前	18c	29 25
CJ038	16束・碗・瓶	中型圓反碗	12.6	5.2	6.9	梅文	密	繩口	19中葉	29 25
CJ039	16束・碗・瓶	中型圓反碗	12.2	4.8	7.0	ろくけ紋文	普通	肥前	19c前~中	29 25
CJ040	16束・碗・瓶	小型圓反碗	8.2	3.5	4.4	草花立繪文	普通	切込?	19c中葉	29 25
CJ041	16束・碗・瓶	小型圓反碗	9.1	4.2	4.5	梅文(草花文) 金文	普通	繩口	19c中~後	地彫
CJ042	16束・碗・瓶	瓶口	6.8	3.4	4.5	八輪文「般若先生」「諦實」か「海螺」か「持	密	繩口	19c	29 25
CJ043	16束・碗	中碗臺	10.5	—	—	青輪「少」高台内 大明「傳」款	密	繩口	つまみ4.4cm	29 26
CJ044	16束・碗	中碗臺	9.7	—	3.1	流水に蟠龍文(裏文) 高台内過「福」款	普通	肥前	18c中~後	買入 つまみ径3.1cm
CJ045	16束・碗	中碗臺	9.4	—	2.5	梅花文 見込み・高台内食卓脚あり	普通	繩口	つまみ3.5cm	30 26
CJ046	16束・碗	壺物の蓋	8.9	—	1.8	赤絵(金・朱・緑・黒) 桜村藤吉文に雪輪竹文、草在文	密	肥前	18c	地彫
CJ047	16束・碗	小中皿	16.2	6.2	3.8	直絵 LHM 矢頭脚底部下手から左右脚供筋	普通	肥前	17c中葉	底部底足
CJ048	16束・碗	小中皿	13.0	4.7	3.6	青絵 高台内脚脚 見込みノ目録書き	やや粗	肥前	1次後半	29 26
CJ049	16束・碗	小中皿	13.3	7.8	2.9	豪竹付繪文(裏文) 見込み五分花文(にんにやく判)	密	肥前	17c末~18前半	
CJ050	16束・碗	火入・香炉	9.8	7.5	7.3	赤絵(金・朱・緑・黒・墨) 無付繪文定文?と施墨文?	普通	肥前	18c末~19前半	地部墨書あり
CJ051	16束・碗	火入・香炉	7.0	6.3	7.4	青絵	普通	肥前	19c後半	30 26
CJ052	21束・碗	小杯	6.9	2.3	3.1	梅瓣文	密	繩口	19c中葉以降	底部無施
CJ053	16束・角盤	小型圓反碗	8.5	—	—	龜文?	切込?	19c中~後	30 26	
CJ054	46束・碗	中型圓反碗	9.3	—	—	青輪立绘文	普通	不明	19c中~後	30 26

表16 武家屋敷地区第3施設点出土陶器器皿彙考  
Tab. 16 Notes on glazed ceramics from HKL3 (1)

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様	釉面	胎面	出土・発見地	製作年代	参考	国	國級	
C7001	8号通路土	小中壺	14.9	4.5	4.7	真輪 (輪茶園文) 草文	釉輪 (深青灰白色)	普通	堅輪	17世紀	輪茶園 皮輪 買入	31	27	
C7002	1号機械6号土	小中壺	—	7.3	—	—	釉輪 (深青灰白色)	粗	小堅輪	15世紀	見込み日輪3ヶ所 皮輪 半失透輪	31	27	
C7003	1号通路土	中堅丸壺	10.2	3.9	5.8	—	釉輪 (深青灰白色)	密	大堅輪	18世紀~19世紀前半	見込み人頭輪	31	27	
C7004	1号通路土	中堅扇形壺	10.1	3.8	5.6	—	釉輪 (深青灰白色)	普通	大堅輪	19世紀~中	高台面磨輪	31	27	
C7005	1号通路土1号	中堅不明	—	3.5	—	—	釉輪 (深青灰白色)	密	大堅輪	18世紀~19世紀前半	見込み磨輪	31	27	
C7006	1号通路土	小中壺	12.4	5.6	3.1	真輪山本文 (輪茶園文)	釉輪 (深青灰白色)	普通	大堅輪	18世紀~19世紀前半	見込み磨輪	31	27	
C7007	1号通路土	小中壺	—	5.6	—	見込み印文	釉輪 (深青灰白色)	普通	小堅輪	18世紀~後	見込み毫目輪 見込み人頭輪	31	27	
C7008	1号通路土	瓶	—	7.1	—	飛輪	釉輪 (深青灰白色)	無輪	普通	不規	名器質	31	27	
C7009	1号通路土	中堅身	2.5	—	—	—	釉輪 (深青灰白色)	密	大堅輪	19世紀~中	失透輪 買入 斯波氏孔3	31	27	
C7010	1号通路土	土瓶身	6.5	7.5	11.0	—	青輪 (青綠色)	普通	大堅輪	19世紀~中	底部削面化粧物付 磨輪	31	27	
C7011	1号通路土	土瓶蓋	7.5	—	1.6	—	無輪	普通	大堅輪	19世紀~後	つまみ筋1.7cm	31	27	
C7012	1号通路土	土瓶蓋	—	—	—	青輪山本文	白化粧	普通	不規	19世紀?	—	31	27	
C7013	1号通路土	蓋	4.2	1.2	1.8	—	無輪 (輪茶園文)	普通	圓口	未調	—	31	27	
C7014	1号通路土	灰吹・人・舟?	—	10.5	—	—	無輪 (輪茶園文)	密	大堅輪	19世紀	京・佐賀	31	27	
C7015	1号通路土	灰吹・火人?	—	6.2	—	色绘 (絹) 竹文	釉輪 (深青灰白色)	やや粗	東北窓?	不明	買入	32	28	
C7016	1号通路土1号	桶	—	31.0	—	—	無輪 (輪茶園文)	粗	やや粗	—	内面のこく一部に真輪付される	32	28	
C7017	1号通路土1号	桶類	—	—	—	—	無輪	粗	波浪	17世紀	—	32	28	
C7018	1号通路土	不明	—	8.6	—	—	眞輪 (輪茶園文)	粗	不規	19世紀	—	32	28	
C7019	1号通路土	壺	6.3	3.6	2.3	—	釉輪 (輪茶園文)	粗	丸輪孔	19世紀	芯立 内外面の一部に底部挖付	32	28	
C7020	1号通路土	壺	4.7	5.1	4.7	—	釉輪 (輪茶園文)	密	大堅輪	19世紀	底部孔あり	32	28	
C7021	1号通路土	土瓶身	—	—	—	眞輪文字 (輪茶園文) 「一貫」	無輪	やや粗	東北窓?	不明	京・佐賀	32	28	
C7022	1号通路土	小中壺	22.2	12.5	10.5	—	釉輪 (輪茶園文)	粗	やや粗	19世紀	見込み人頭輪あり	32	28	
C7023	6号通路土	小中壺	—	5.5	—	乳頭輪真輪 (輪茶園文)	山本文	普通	大堅輪	19世紀~中	高台面黒青あり 見込み山本文あり	32	28	
C7024	6号通路土	桶	31.5	—	—	眞輪 (輪茶園文)	粗	丸輪孔?	19世紀?	—	—	32	28	
C7025	15号通路	瓶	—	8.3	—	眞輪 (輪茶園文) 青花文	釉輪 (深青灰白色)	密	大堅輪	19世紀~中	買入 半失透輪	33	29	
C7026	15号通路	瓶	—	—	—	—	眞輪 (輪茶園文)	密	大堅輪	19世紀~中?	—	33	29	
C7027	15号通路	壺	7.0	—	—	—	眞輪 (輪茶園文)	密	大堅輪	19世紀~中	抹み部分削平による窓のモチーフ	33	29	
C7028	17号16号土	灯明皿	9.2	3.5	1.9	—	眞輪 (輪茶園文)	普通	大堅輪	19世紀~中	口縁削面化粧物付 磨輪	33	29	
C7029	17号16号土	袋形不明	—	3.2	—	—	眞輪 (輪茶園文)	普通	大堅輪	19世紀後	明治67年以降 失透輪	33	29	
C7030	17号16号土	土瓶身	—	7.2	—	木瓜形	青輪 (青綠色)	普通	大堅輪	19世紀~後	失透輪	33	29	
C7031	17号16号土	土瓶蓋	5.2	—	—	26	自現・熟輪 (輪茶園文)	釉輪 (深青灰白色)	密	大堅輪	19世紀~後	買入 半失透輪	33	29
C7032	1号通路土	中堅丸壺	9.3	—	—	捺染捺文草文 (輪茶園文)	釉輪 (深青灰白色)	密	京・佐賀?	18世紀	買入	33	29	
C7033	4号通路	中堅扇形壺	—	—	—	眞輪山本文 (輪茶園文)	釉輪 (深青灰白色)	密	普通	18世紀	—	33	29	
C7034	4号通路	小堅丸壺	10.4	—	—	—	眞輪 (輪茶園文)	普通	大堅輪	18世紀~19世紀	買入 半失透輪	33	29	
C7035	4号通路	桶形黑不明	6.6	3.0	3.5	—	眞輪 (深青灰白色)	普通	大堅輪	18世紀~19世紀	高台面黒青あり 失透輪	33	29	
C7036	4号通路	片口壺	15.3	—	—	—	—	粗	鐵口・美濃?	不明	漆刷記	33	29	

表17 武家屋敷地区第33地点出土陶器器皿鑑定表  
Tab. 17 Notes on glazed ceramics from HK13(2)

登録番号	出土場所	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様	釉面	胎面	出土・生産地	製作年代	備考	国	國級
CT037	4号通路埋土 灰吹・火入	灰吹	—	—	—	—	普通 (淡青灰白色)	普通 (淡青灰白色)	普通	古・伝業	18c.	質人	33 29
CT038	4号通路埋土 灰吹・火入	灰吹	49	—	—	—	普通 (淡青灰白色)	普通 (淡青灰白色)	普通	大堀町馬?	18c.	失透釉	33 29
CT039	4号通路埋土 蓋	蓋	58	—	—	—	普通 (青緑色)	普通 (青緑色)	普通	大堀町馬?	18c.前~中	失透釉	33 29
CT040	4号通路埋土 板掛	板掛	210	214	—	翼龍除頭文 体部貼付輪文	輪物 (弓衣袖)	やや粗	無口 (1) 美濃	18c.前半	体部貼付輪 底部23%面焼化物有	33 29	
CT041	4号通路埋土 窓道具	窓道具	120	—	36	—	無輪	粗	不明	不明	内面部下半段釉	34 29	
CT042	4号通路埋土 不明	—	—	—	—	型押窓弁・輪紋文	無輪 (脚部褐色)	普通	不明	不明	内面部較少	34 29	
CT043	11号A1層 合子蓋	合子蓋	54	—	12	赤色 (赤・小嘴)	無輪 (淡黄灰白色)	普通	京・佐賀	18c.	質人	34 29	
CT044	11号A1層 土瓶蓋	土瓶蓋	46	—	—	—	無輪 (淡青灰白色)	普通	大堀町馬?	18c.前~中	失透釉 つまみ付け1cm 質人	34 29	
CT045	11号A1層 猪体	猪体	—	—	27	—	無輪 (茶褐色)	普通	不明	不明	体部表面無釉	34 30	
CT046	11号・灰瓦 中型壺形瓶	中型壺形瓶	11.0	4.7	6.4	口唇部鉢輪	無輪 (淡灰灰白色)	やや粗	無口・天蓋	18c.	質人・端着	34 30	
CT047	11号・灰瓦 中型壺形瓶	中型壺形瓶	78	62	55	赤色 (赤・黒) 端輪文	無輪 (淡青灰白色)	普通	京・佐賀	18c.	質人	34 30	
CT048	11号・灰瓦 中型壺形瓶	中型壺形瓶	—	45	—	真輪 (暗褐色・底上・折)	無輪 (淡青灰白色)	普通	太堀町馬?	18c.末~19c.前	高井の墨書き「小」	34 30	
CT049	11号・灰瓦 灰吹	灰吹	5.7	4.9	4.3	—	無輪 (暗褐色)	粗	東北地方?	18c.	—	34 30	
CT050	11号・灰瓦 急須?	急須?	34	—	1.8	—	無輪 (淡灰白色)	普通	大堀町馬?	18c.	つまみ付け7cm 質人	34 30	
CT051	11号・灰瓦 急須?	急須?	56	4.5	6.8	精輪 (黒) 突兀文 (16弁)	無輪 (淡青灰白色)	粗	京・佐賀	18c.前半	質人	34 30	
CT052	11号・灰瓦・灰瓦 餘器不明	—	—	—	—	—	無輪 (暗綠色)	粗	東北地方?	18c.	承応か 前後にセ製作り 中空	34 30	
CT053	11号・灰瓦 人形	人形	—	—	—	—	無輪 (暗褐色)	粗	不明	不明	「質庄」は宝曆一年 (1752年) に宮崎郡 原町に詣業	34 30	
CT054	21号・灰瓦・灰瓦 瓶	瓶	30	12.5	35.5	真輪文字 「落成新居の花」 落成 (灰白色)	普通	無口・天蓋	20c.初~前	—	—	35 30	
CT055	4号・灰瓦・灰瓦 香炉の蓋	香炉の蓋	4.4	—	—	真輪 (黒) 同心円文	粗石袖	普通	17c.前	志所藏品	34 30		
CT056	8号・灰瓦・灰瓦 猪体	猪体	4.3	—	21	—	無輪 (淡綠灰白色)	普通	18c.~19c.前	つまみ付け14cm 質人	34 30		
CT057	11号・陶器 立合盆1個・灰瓦	立合盆	—	27.0	—	—	無輪 (脚部褐色)	粗	東北地方?	不明	見込み日焼あり 底部常温品め模	35 30	
CT058	7号・北側 立合盆1個・灰瓦 仏板器	仏板器	—	5.6	—	—	無輪 (淡青灰白色)	普通	大堀町馬?	18c.末~19c.前	底部墨書き「く」か 牛矢通輪 質人	34 30	

表18 武家屋敷地区第13地点出土土質土器皿観察表  
Tab. 18 Notes on unglazed ceramic plates at BK13

登録番号	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整	回転方向	炭化物付着部位	備 考	国	国版
		内面	体部外面	底面系切法						
CH001	1号溝埋土	—	6.3	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切無調整b	右 内面底部	中央に孔あり、孔周辺に接着付着	36 31
CH002	4号遺構埋土	8.0	4.7	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明 口縁一部		36 31
CH003	4号遺構埋土	10.3	5.2	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切無調整a	左 口縁～内面の一部		36 31
CH004	4号遺構埋土	10.6	6.5	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切無調整a	左 内外表面薄に炭化物、全面黒色化		36 31
CH005	15号遺構埋土	23.6	19.2	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切無調整b	左 内外表面薄に炭化物、全面黒色化		36 31

表19 武家屋敷地区第13地点出土土質土器(皿以外)観察表  
Tab. 19 Notes on unglazed ceramics (except plates) at BK13

登録番号	種類	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整	備 考	国	国版
CH006	皿	8区西 A1刷	4.7	3.8	4.1	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	底部内外面炭化物付着	36	31

表20 武家屋敷地区第13地点出土瓦質土器観察表  
Tab. 20 Notes on fumed ceramics at BK13

登録番号	種類	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整	備 考	国	国版
CG001	方形鉢状	6号遺構埋土	—	—	4.1	内面:ナデ 外面:ミガキ	受熱により赤色化?	37	31
CG002	不明	6号遺構埋土	—	—	—	内面:ナデ 外面:ナデ、ミガキ	外面炭化物付着 幅4.8cm	37	31
CG003	不明	ピット16号埋土	—	—	—	内面:ナデ 外面:ナデ	器面赤色化 幅10.7cm 厚さ2.1cm	37	31
CG004	鉢類	4号遺構埋土	17.5	13.8	12.4	内面:ロクロナデ 外面:迷轉した列点文 スタンダード工具による施文か	内面黒色化 底部内面にタール状炭化物付着	37	31
CG005	蚊造り?	4号遺構埋土	—	—	—	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、ミガキ	内面炭化物付着	37	31
CG006	鉢類	1区 1層・複乱	18.2	13.1	5.9	内面:ロクロナデ 口唇部:ミガキ	三足か	37	31
CG007	不明	1区 1層・複乱	—	—	—	内面:器面が摩滅しており、不明 外面:ロクロナデ 口唇部:ミガキ	口縁内面花型文様の刻印 器厚1.4cm	37	31
CG008	鉢類	1区 1層・複乱	12.2	—	—	内面:ロクロナデ 口唇部:ミガキ	外面部印あり 内面には刻印を押したときの 指纹が観察される	37	31
CG009	鉢類	2区 1層・複乱	—	9.4	—	器面が摩滅しており、不明	三足 底部回転系切痕か	37	31

表21 武家屋敷地区第13地点出土土製品観察表  
Tab. 21 Notes on clay objects and figures at BK13

登録番号	出土場所	種類	素材	口径／長さ(cm)	底径(cm)	高さ／厚さ(cm)	特 徴	国	国版
C0001	1号溝埋土 不明	土人形	土師質	—	—	—	中実 外面ミガキ 刻印あり	38	32
C0002	1号溝埋土1層	土人形 狐(稚狐)	土師質	—	1.8	—	左右合型作りの後、礎部を手づくね 宝玉をくわえる	38	32
C0003	1号溝埋土	土人形 犬	土師質	4.9	—	4.2	左右合型作り	38	32
C0004	4号遺構埋土	土人形 馬?	土師質	—	—	—	左右合型作り 中空 腹部と胸焼け(尻焼け)を表現 腹部は開口か 武家屋敷地区第11地点に類似例あり	38	32
C0005	1区 1層・複乱	土人形 狐(稚狐)	土師質	—	—	—	左右合型作り 中空	38	32
C0006	1区 1層・複乱	土人形 猿	土師質	—	—	3.8	手づくね 中実 頭部のみ型使用か 手・足・尾・耳は粘土貼り付け 摘描きで体毛表現	38	32
C0007	1区 1層・複乱	土人形 猿	土師質	—	—	—	手づくね 中実 手・足・尾は粘土貼り付け 摘描きで体毛表現	38	32
C0008	1区 1層・複乱	菊花状円板	土師質	2.2	—	0.9	型作り 中実 片面に型による菊花状文様	38	32
C0009	1区 1層・複乱	ミニチュア 盖	土師質	—	2.9	1.2	ロクロ成形 つまみは粘土貼り付け 底部回転系切痕a 右回転 最大径4.3cm	38	32

表22 武家屋敷地区第13地点出土古代瓦観察表  
Tab. 22 Notes on ancient roof tile under for Nara and Heian periods at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴			備考		国	国版
T001	8区西 A1層	不明	表面には格子状の布目 厚さ1.4cm			古代瓦		39	32

表23 武家屋敷地区第13地点出土軒丸瓦観察表  
Tab. 23 Notes on round eaves tiles at BK13

登録番号	出土場所	瓦当文様	丸当直径(cm)	瓦当内径(cm)	周縁幅(cm)	釘穴	刻印	備考	国	国版
T002	1号溝理土	連珠三巴文(右巻き)	—	—	2.0	—	—		39	32
T003	ビット16埋土	三引両文	14.1	11.5	1.4	1ヶ所	—		39	32
T004	1区1層・複疊	三引両文	14.9	11.5	1.7	—	—		39	33

表24 武家屋敷地区第13地点出土軒平瓦観察表  
Tab. 24 Notes on flat eaves tiles at BK13

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当直長(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	長さ(cm)	備考	国	国版
T005	1号溝理土2c層	三枚葉2a+唐草1a類	太刺	5.4	—	—	—		39	33
T006	1区1層・複疊	繩結梗+唐草3b類	太刺	5.3	—	—	—		39	33
T007	1号溝理土1層	不明	太刺	5.2	—	—	25.3	刻印(山に「守」)	46	38

表25 武家屋敷地区第13地点出土軒棟瓦観察表  
Tab. 25 Notes on eaves-pan tiles at BK13

登録番号	出土場所	全長(cm)	全幅(cm)	きさ幅(cm)	きさ尾(cm)	尻切込長(cm)	頭切込長(cm)	瓦当小部分文様	小巴径(cm)	瓦当垂れ部分文様	瓦当垂れ形狀	釘穴	国	国版
T008	1号溝理土2a層	—	—	—	—	—	—	三巴文(右巻き)	8.5	—	—	—	39	33
T009	1号溝理土1層	—	—	—	—	—	—	三巴文(左巻き)	9.0	三枚葉+唐草1a類	中刺	—	39	33

表26 武家屋敷地区第13地点出土丸瓦観察表  
Tab. 26 Notes on round roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	頭幅(cm)	尻幅(cm)	玉縁長(cm)	胴長(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	釘穴	刻印	備考	国	国版
T010	1号造構土埋土	—	12.6	3.0	23.2	5.7	1.8	—	—		40	34
T011	1号溝理土	—	14.3	3.5	23.4	7.5	2.1	なし	なし		40	34

表27 武家屋敷地区第13地点出土平瓦1類観察表  
Tab. 27 Notes on type 1 of flat tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	谷深頭(cm)	谷深尻(cm)	厚さ(cm)	備考	国	国版
T012	1号溝理土2層	—	—	—	—	—	2.1	刻線あり(指描)	41	34
T013	1号溝理土2層	—	—	—	—	—	2.0	刻印(「モ」か)	46	38
T014	1号溝理土	—	—	—	—	—	2.1	線刻あり、刻印(山に「守」)	41・46	34・38

表28 武家屋敷地区第13地点出土平瓦観察表  
Tab. 28 Notes on flat roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	頭幅(cm)	尻幅(cm)	長さ(cm)	谷深頭(cm)	谷深尾(cm)	厚さ(cm)	溝	釘穴	刻印	備考	国	国版
T015	1号造構a埋土	24.2	26.3	278	3.1	3.7	2.3	—	—	—		41	34
T016	1号造構b埋土	23.7	—	287	3.6	—	2.3	—	—	—		41	35
T017	1号溝理土2a層	24.5	—	295	3.8	—	2.2	なし	—	—		42	35

表29 武家屋敷地区第13地点出土棧瓦観察表  
Tab. 29 Notes on a kind of pan tiles at BK13

登録番号	出土場所	全長(cm)	全幅(cm)	きさ幅(cm)	きさ尾(cm)	尻切長(cm)	頭切込幅(cm)	釘穴	備考	国	国版
T018	1号溝理土	—	—	—	—	—	—	3ヶ所	面戸付棧瓦	42	35
T019	1号溝理土1層	25.2	29.2	—	13.5	11.5	—	—		42	36

表30 武家屋敷地区第13地点出土板塀瓦観察表  
Tab. 30 Notes on pan tiles used for fence at BK13

登録番号	出土場所	左石L+R(cm)	全長(cm)	全幅(cm)	きさ幅(cm)	桟長(cm)	桟幅(cm)	厚さ(cm)	枝つなぎ	枝断面	刻印	釘穴	溝	備考	国	国版
T020	1号造構b上面瓦集中部	R	36.8	32.4	29.2	35.8	5.7	2.2	平行	方形	—	4ヶ所	あり		43	36
T021	1号造構b上面瓦集中部	R	—	—	—	—	—	2.3	平行	山形	—	2ヶ所	不明	面戸付板塀瓦	43	36
T022	1号造構b上面瓦集中部	L	—	—	—	—	4.8	2.3	平行	山形	—	2ヶ所	不明	面戸付板塀瓦	43	37
T023	1号造構b上面瓦集中部	L	37.2	32.0	29.0	35.5	5.7	2.0	平行	方形	—	4ヶ所	あり		44	37
T024	1号造構b上面瓦集中部	L	36.7	31.7	29.0	34.6	5.7	2.0	平行	方形	—	4ヶ所	あり		44	37
T025	ピット17埋土	L	36.3	31.8	29.2	—	5.2	1.5	平行	方形	—	3ヶ所	あり		45	38

表31 武家屋敷地区第13地点出土面戸瓦観察表  
Tab. 31 Notes on filler tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	国	国版
T026	5号柱列柱4	92	—	—	1.7		45	38

表32 武家屋敷地区第13地点出土輪違い観察表  
Tab. 32 Notes on ridge decoration tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	上幅(cm)	下幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	国	国版
T027	1区1層・複瓦	128	102	14.5	5.3	1.8		45	38

表33 武家屋敷地区第13地点出土その他の瓦観察表  
Tab. 33 Notes on various roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴	備考	国	国版
T028	1号溝理土	谷丸瓦	瓦の尻を上にして、重ねが右に付く 重ねの下部は直線的でなく、抉りが入り、面戸状になる 厚さ20cm		45	38
T029	1層・複瓦	鬼瓦			46	38

表34 武家屋敷地区第13地点出土古銭観察表  
Tab. 34 Notes on coins at BK13

登録番号	出土場所	銭名	外径 (mm)	穿孔 (mm)	重量 (g)	備考	国	図版
MC001	1号溝埋土	寛永通寶(新)	25.2	6.2	22	寛形・文銭	47	39
MC002	4号遺構埋土	寛永通寶(四文銭)	27.5	5.5	129.1	鉄錢 完形 26枚付着 すべて四文銭とみられる 最後尾の裏文「渡」「盛」	47	39
MC003	1区東 A1層	寛永通寶(新)	24.0	6.5	1.3	はげ寛形	47	39
MC004	1区東 A1層	寛永通寶	23.0	6.5	1.8	鉄錢 一部欠損	47	39
MC005	1区 1層・複数	寛永通寶(古)	23.0	6.5	2.2	寛形	47	39
MC006	1区 1層・複数	寛永通寶(新)	24.5	6.0	2.3	寛形	47	39
MC007	1区 1層・複数	寛永通寶(新)	23.5	7.0	1.6	寛形 銘化顯著	47	39
MC008	1区 1層・複数	寛永通寶(古)	23.0	6.0	2.3	寛形	47	39
MC009	1区 1層・複数	寛永通寶	21.8	6.5	1.8	寛形	47	39
MC010	1区 1層・複数	寛永通寶(古)	24.0	5.8	2.5	寛形	47	39
MC011	1区 1層・複数	寛永通寶(新)	25.0	6.0	2.7	寛形・文銭	47	39
MC012	1区 1層・複数	寛永通寶(古)	24.0	5.5	1.3	1/2欠損	47	39
MC013	1区 1層・複数	十銭白銅貨	22.0	4.0	3.4	寛形「十銭」「大日本 大正十二年」	47	39
MC014	1区 1層・複数	寛永通寶	22.2	6.5	1.8	鉄錢 はげ寛形	47	39

表35 武家屋敷地区第13地点出土煙管吸口観察表  
Tab. 35 Notes on pipes (mouthpieces) at BK13

登録番号	出土場所	全体形状	全長 (mm)	ラウロ直徑 (mm)	吸口直徑 (mm)	備考	国	図版
MO001	1号溝埋土1層	II B	34.5	9.2	4.2		48	39
MO002	1区 1層・複数	II B	36.5	11.0	7.0	内部にラウロ存 銘化顯著	48	39
MO003	1区 1層・複数	II B	68.0	10.0	0.3×0.7	瓦の目文	48	39

表36 武家屋敷地区第13地点出土銅製品観察表  
Tab. 36 Notes on various implements made of copper at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	国	図版
MO004	8号遺構埋土	小柄の柄	片面に文様あり 花のモチーフか 幅1.4cm	49	39
MO005	1号溝埋土1層	不明	長さ3.7cm 幅0.3cm	49	39
MO006	1号溝埋土1層	管状製品	アワセメあり 長さ4.5cm 幅0.7cm	49	39
MO007	1号溝埋土	小柄の柄	片面に文様あり 長さ9.5cm 幅1.4cm	49	39
MO008	1号溝埋土	不明	細状のものを通した金具か 長さ3.7cm 幅1.5cm	50	39
MO009	1号溝埋土	管状製品	長さ3.7cm 最大幅9cm アワセメあり 一端に補強帶のようなものが観察される	49	39
MO010	1号溝埋土	輪状製品	アワセメあり 小孔2ヶ所 留め具か	50	39
MO011	1号溝埋土	不明	蓋状 直径3.1cm 高さ0.2cm 内面に付着物	50	39
MO012	4号遺構埋土	不明	幅0.8mmの線状製品	50	40
MO013	4号遺構埋土	目貫	文様あり 薄板の型による押し出しか	50	40
MO014	4号遺構埋土	簪?	長さ13.5cm	50	40
MO015	4号遺構埋土	管状製品	アワセメあり 内部に木質? 残存 長さ3.3cm 幅0.5cm	50	40
MO016	4号遺構埋土	不明	幅1.2cm 2個1対の小孔が4ヶ所あり 片面に漆付着	50	40
MO017	4号遺構埋土	不明	幅1.0cm	50	40
MO018	1区東 A1層	簪?	長さ11.5cm	50	40

表37 武家屋敷地区第13地点鐵製品観察表  
Tab. 37 Notes on various implements made of iron at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	国	図版
MO019	4号遺構埋土	留め金具		51	40
MO020	15号遺構埋土	さな?	孔あり 全体に劣化しており、被熱痕か	51	40
MO021	15号遺構埋土	飾り金具	表面に漆が残存	51	40

表38 武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品観察表  
Tab. 38 Notes on stone tools and stone implements from BK13

登録番号	層位・遺構	器種	長さ・最幅・厚さ (mm)	長さ・最幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	国	国版
S001a	4号遺構埋土	調片	25.5	16.7	22.3	9.2	石英安山岩	S001bと接合	52	41
S001b	4号遺構埋土	調片	35.1	36.2	38.1	44.0	石英安山岩	S001aと接合	52	41
S002	1区東 A1層	調片	17.0	13.7	3.3	0.8	石英		52	41
S003	1区 1層・擾乱	調片	15.6	26.9	5.9	2.1	石英安山岩		52	41
S004	1区 1層・擾乱	調片	10.9	21.6	4.3	0.8	石英		52	41
S005	1区東 A1層	火打石	46.1	20.9	22.4	30.5	メノウ		52	41
S006	1号溝埋土	磨石	21.9	21.8	5.2	3.8	粘板岩	正円薄型	52	41
S007	1区東 A1層	磨石	22.2	22.2	4.4	3.5	粘板岩	正円薄型	52	41
S008	1区 1層・擾乱	磨石	21.6	21.6	5.4	3.4	粘板岩	正円薄型	52	41
S009	1号溝埋土	破片	—	61.8	—	146.9	粘板岩		52	41
S010	4号遺構埋土	規破片	30.6	20.8	5.5	3.9	粘板岩		52	41
S011	1区 1層・擾乱	不明石製品	39.5	19.0	5.0	8.0	石灰岩か		52	41
S012	1区 1層・擾乱	砾石	70.8	58.6	12.4	77.6	粘板岩		52	41
S013	1区 1層・擾乱	砾石	47.5	39.4	8.5	25.4	粘板岩		52	41
S014	1区 1層・擾乱	砾石	67.7	48.5	19.6	56.5	粘板岩		52	41
S015	4号遺構埋土	印鑑	26.5	—	16.1	4.6	粘板岩	字あり(判読不能)	52	41

表39 武家屋敷地区第13地点出土ガラス玉観察表  
Tab. 39 Notes on glass implements at BK13

登録番号	種類	出土場所	特徴・法量など	国	国版
G001	ガラス玉	4号遺構埋土	直径1.1cm 穿径0.26cm 螺旋状巻き付け成形か	—	41

表40 武家屋敷地区第13地点出土貝類集計表  
Tab. 40 List of Mollusca from BK13

出土場所	種	状態・点数	重量(g)
1号溝埋土	チョウセンハマグリ	R1	14.6
	シジミガイ科	左右不明 1	0.7
		L6	7.0
ビット144埋土	マガキ	R2	2.8
		破片複数	27.7
4号遺構埋土	マガキ	破片 1	0.7
1層・擾乱	種不明	破片 5	14.5

表41 武家屋敷地区第13地点出土魚類・哺乳類集計表  
Tab. 41 List of Pisces (Fish) and Mammalia from BK13

出土場所	種	部位
1層・擾乱	魚類種不明	椎骨
	ウマ	上顎臼歯(L)

## 第VI章 検出遺構の検討

今回の調査では、遺構埋土の掘り下げは最小限にとどめたため、出土遺物について、詳しい検討を加えることは難しい。遺構についても、全てを掘り下げていないため、詳しい特徴などは明確でないものも多い。それでも、確認した遺構プランをもとに、検出した遺構を、絵図の記載と対比させて検討することは可能である。確定的な結論に至らない部分も多いが、検出遺構について、若干の検討を加えてみたい。

### 1. 沢状遺構の変遷

4号遺構は、沢状の遺構であり、かなりの部分が埋まりつつも、IIb期までは機能していた千貫沢の支流であると考えられる。今回の調査区は、これまでの調査・研究からすると筋道橋通沿いに該当すると考えられる（調査報告1）。仙台城関連の絵図の中で、この地域において最も古い沢は、「奥州仙台城并城下絵図」（天和二年：1682年）（仙台市史編さん室編2006：p.344）に認められる。この沢の表現は、「侍屋敷」とのみ記載された屋敷地内に谷頭が描かれ、千貫沢に合流するように描かれる。おそらく、沢はそれ以前にも存在していたのであろうが、絵図に表現されたのは、この絵図が最初である。同様の表現の沢は、「仙台城下五厘掛絵図」（元禄四・五年：1691・92年）（図53-1）にも描かれている。この絵図の沢は、「三澤左京殿」と「太田次郎兵衛」屋敷地境に位置しており、谷頭は三澤側にある。また、「仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」（寛文年間～元禄年間：17世紀後半）（図54、註）では、後述する既の建物と共に、近辺の道路の様子が描かれている。そこ



1. 元禄四・五年（1691・92年）仙台城下五厘掛絵図



2. 宝曆十～明和三年（1760～66年）仙台城下絵図



3. 天明六～寛政元年（1786～89年）仙台城下絵図



4. 安政三～六年（1856～59年）安政補正改革仙府絵図

1・3・4 「絵図・地図で見る仙台」 2 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」

図53 武家屋敷地区第13地点周辺の絵図  
Fig. 53 Picture maps around the area of BK13

では、屋敷地側に位置する脛の東側で道路が狭まり、千貫沢側の道路端もちょうどそこで狭まっている。その狭まった場所に橋があり、その下に沢が流れているものと推測できる。

時代は下って、『仙台城下絵図』（宝暦十～明和三年：1760～66年）では、沢自体の表現は無いが、その部分が空白地として区画されている（図53-2）。そして、『仙台城下絵図』（天明六～寛政元年：1786～89年）には非常に細い線として描かれており、ちょうど「高泉主計」と「古内進」屋敷地境に位置する（図53-3）。さらに、『安政補正改革仙府絵図』（安政三～六年：1856～59年）（図53-4）では、屋敷地内における沢の表現は消え、千貫沢に合流する部分がわずかに表現されるに留まる。これらの絵図からすると、この沢は、17世紀後半には幅の広い沢であったが、18世紀後半にはかなり埋没し狭くなっていた状況が窺える。19世紀中頃にも千貫沢に合流する沢は存在していたようであるが、詳細は不明である。

今回の調査区内で検出された4号遺構と対比させるならば、Ⅰ期の頃は不明であるが、Ⅱ期の頃にかなり埋没した状態でわずかに存在した状況と合致する（図19）。また、調査区内の4号遺構は、Ⅲ期の頃には埋められ、その上に1号溝新段階が存在していたと捉えた。推測ではあるが、千貫沢との合流地点近辺まで谷頭が南側に移動した可能性も考えられる。また、絵図上の沢（4号遺構）は屋敷地の境であった。後述するように、下馬区域との関連もあるが、4号遺構の東西では遺構密度がかなり異なってきており、区画ごとの土地の使い方の違い、あるいは屋敷地内での使われ方の差異が窺える。

## 2. 脣との関連

絵図との対比から、本調査区は武家屋敷地区内に位置するが、その中に下馬と記載された区域が含まれている。『奥州仙台城絵図』（正保二年：1645年）（図4-1）では侍屋敷とのみしか記載がないが、『仙台城下絵図』（寛文四年：1664年）（図4-2）では、区画こそあるものとくに記載は無い。その後、『仙台城下絵図』（寛文八・九年：1668・69年）（図4-3）には屋敷地と同じ表現で「下馬」と記載されている。『仙台城下大絵図』（延宝六～八年：1678～80年）（図4-4）では、その下馬の区域の西と南側部分の線が無くなり、道路と同じ表現となる。それ以降は、この区域は基本的にやや広い道路として表現されることになる。

おそらく下馬の成立時にはすでに存在していた可能性は高いが、この区域に附属する脣がある。この区画の脣である「北下馬脣」が絵図に表現されるのは、『仙台城下絵図』（宝暦十～明和三年：1760～66年）（図53-2）からである。そして、『仙台城下絵図』（天明六～寛政元年：1786～89年）（図53-3）と『安政補正改革仙府絵図』（安政三～六年：1856～59年）（図53-4）では、北側屋敷地に接して描かれている。これらの絵図からは、幕末まで建物が存在していたことがわかる。この脣は、①『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』（寛文年間～元禄年間：17世紀後半）（以下①）（図54）では、図と共に「長式拾間、横三間、腰掛幅三尺ニテ四ヶ所」と記載されている。図では、20間の建物よりさらに東側に脣が付属している。その後の②『御修復帳・古』（安永年間：1772～81年頃成立）（以下②）（図54）や、③『御修復帳・新』（文化元年～文政十三年：1804～30年頃）（以下③）（図54、仙台市史編さん委員会編2006：p.369）でも同じ施設が示されている。これらの絵図の違いは、①では脣が4基存在しているが、②では3基、③では1基となり削減されている。また、腰掛が①・②では4箇所存在していたが、③では西側2箇所が削減されている。それに伴い「ニテ四ヶ所」の記載部分が削除されている。

千貫橋からの距離は不明であるが、現在する千貫沢上道路の東辺から北方向に向かう線を引くと、今回の調査区4区の西側外を通る線となる。仮にこれを裏下馬通の東端と仮定する。また、脣の柱間寸法を6尺3寸とし、裏下馬通東端から今回の調査区1区に向かって20間を測ると、おむね1号遺構の西端あたりまで到達する（図55）。この絵図との対比と、今回検出した遺構の時期や配置関係からは、脣には1号柱列（1期・6尺3寸）が該当するものと考えられる。そして、1号溝古段階を筋道橋通北端とするならば、1号柱列は脣南端にある。

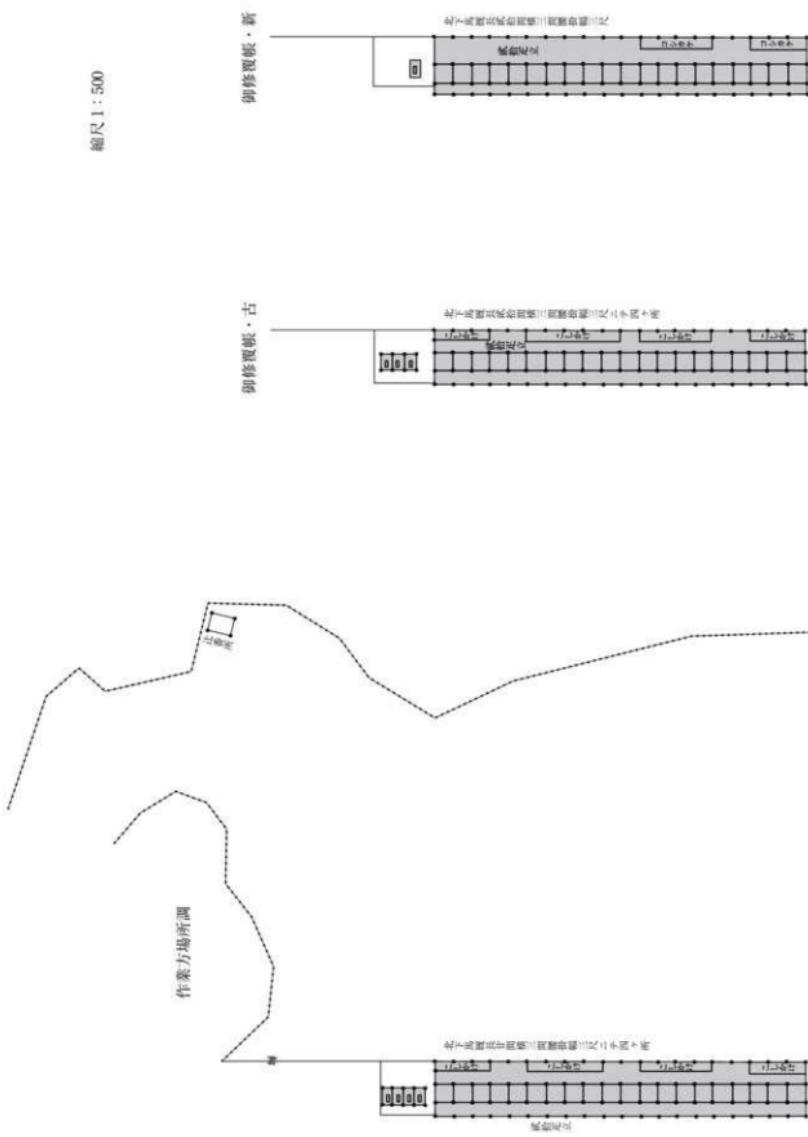


図54 「北下馬屋」の繪図  
Fig. 54 Picture maps of the stable of the north side of Secondary Citadel

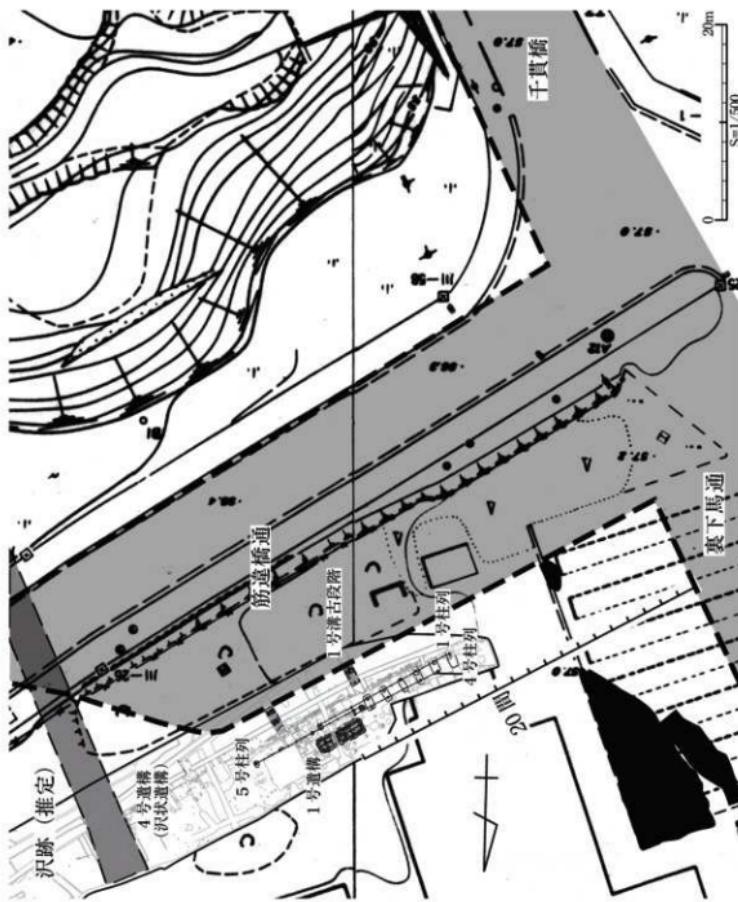


図55 武家屋敷地区第13地点検出遺構と絵図の対比  
Fig. 55 Comparison with the picture maps and the features.

また、1号柱列の掘り方と重複して検出されたことからⅡa期と時期比定したが、ほぼ1号柱列と対向する4号柱列（6尺3寸）や、東側へと伸びる5号柱列（6尺3寸）は、柱間寸法などから建物である可能性もあり、建て替えなどの疑と関連する遺構であることも考えられる。

1号遺構に関しては、時期や位置関係から層跡と推定できる。絵図の記載では、時期が新しくなるにつれ層は削減されている。今回の調査でも、東側の1号遺構bがまず埋められ、西側の1号遺構aのみが最後に機能していた状況が指摘できる。遺構の項で説明したように、1号遺構bでは、埋土から18世紀の陶器（CT002）が出土しており、19世紀には埋没していたことがわかる。絵図からすると、③（1804～30年頃）には層が1基だけ記載されているが、以上の点から1号遺構aがそれに該当するものと解釈できる。

今回の調査では、遺構の精査を行なっていないため、仮定に仮定を重ねた推論となるが、現在の調査区に関して絵図を用いて積極的に解釈するならば、以上のような推論も可能であろう。

註）仙台城については、城下絵図や仙台城全体を描いた絵図以外に、「御修復帳」と総称される絵図がある。仙台藩の施設の維持管理を行っていた「作事方」という役所があり、ここで管理していた施設の平面図をまとめたものである。仙台城の付属施設や、領内の寺社、橋などが描かれており、3種類が残っている。一つは『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』で、宮城県図書館に所蔵されている（以下「作事方場所調」と略）。幕末から明治初期の混乱で散逸したものをまとめ直したもので、寛文年間から元禄年間、17世紀後期のものと考えられる。二つ目は、「御修復帳」と表紙に書かれたもので、東北大学大学院工学研究科で所蔵している（以下「御修復帳・古」と略）。おおよそ安永年間（1772～81）頃のものである。三つ目が、「御修復帳」と表紙に書かれたもので、宮城県図書館に所蔵されている（以下「御修復帳・新」と略）。文化・文政年間（1804～30）頃のものである。「北下馬観」については、「御修復帳・新」の図の写真が、『仙台市史城館編』に掲載されている。「作事方場所調」と「御修復帳・古」については、写真を仙台市博物館から提供していただいた。図54は、これらの写真をもとに、建物の寸法で縮尺を合わせてトレースして作成した。

## 第VII章　まとめ

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査成果について、最後に簡単にまとめておきたい。

今回の調査では、掘立柱建物、掘立柱列、溝、沢状の遺構などが検出された。東北大学川内北地区では、近代の建物などで破壊されていない部分では、江戸時代の遺構が良好に遺存していることが、あらためて明らかとなつた。

検出遺構の多くは、遺構プランの確認にとどめたため、出土遺物はあまり多くない。そのため、遺構の変遷は、切り合い関係を中心的に検討し、I～IV期に分けられた。各期の推定時期は、次のように考えることができる。

I期 17世紀

II期 18世紀から幕末（19世紀中葉）

III期 明治初頭（19世紀後葉）

IV期 明治20年（1887年）前後以降

沢状の遺構は、城下絵図に描かれたものがあり、二の丸地区と北方武家屋敷地区の間を流れる千貫沢の支流と考えられる。調査では、次第に埋没していく様相がとらえられた。この沢につながる西から東に流れる溝が確認され、3段階の変遷が認められた。この溝の北側に、掘立柱建物や石組の長方形の遺構などが検出された。これらは、絵図との対比から、二の丸裏門である「台所門」につながる「千貫橋」の外側に設けられた「北下馬廻」や、廻に附属する廻の可能性が考えられる。必ずしも、絵図とうまく合わない部分も残っているが、位置関係から見て、今回の調査区が「北下馬廻」の周辺に相当することは、間違いないものと考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、大部分が江戸時代のもので、江戸時代以前の遺物は、古代の瓦が1点出土しているだけである。

江戸時代の遺物には、陶磁器、土器、土製品、瓦、古銭や煙管を含む金属製品、石製品、動物遺存体などがある。遺構埋土を掘り上げたものが少ないとあって、木製品・漆塗製品の出土は少ない。この点を除くと、これまでの武家屋敷地区での調査において出土した遺物と、大きな違いは見られない。陶磁器は、17世紀初頭から近現代のものまでが含まれている。19世紀前葉から中葉のものや、明治期に入ってからの資料が多い。

今回の調査では、比較的良く絵図と対比して考えることができ、絵図に描かれた「北下馬廻」に相当する可能性の高い遺構を指摘することができた。このことは、仙台城周辺の武家屋敷地区に置かれた施設を、考古学的に検討していく上で、重要な知見を加えることとなったと言えるであろう。

## 〈引用・参考文献〉

- 《仙台市教委刊行仙台城関係報告書・東北大学刊行報告書以外（50音順）》
- 愛知県陶磁資料館 1984 「近世城館出土の陶磁」
- 青山礼志 1982 「新訂貨幣手帳」ボナンザ
- 赤松和佳 2006 「畿内出土の17～18世紀の京焼について」『京焼の成立と展開－押小路、栗田口、御室－』 関西陶磁史研究会研究集会資料 24～48頁
- 浅川滋男・箱崎久編 2001 「埋もれた中世の住まい」同成社
- 阿刀田令造 1936 「仙台城下絵図の研究」斎藤報恩会博物館図書部研究報告4
- 石川俊秀 1989 「高崎遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書19
- 市田京子 2000 「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 26～54頁
- 江戸遺跡研究会編 1991 「よみがえる江戸」新人物往来社
- 江戸遺跡研究会編 1992 「江戸の食文化」吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2000 「江戸文化の考古学」吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2001 「図説江戸考古学研究事典」柏書房
- 江戸遺跡研究会編 2004 「江戸の祈り 信仰と願望」吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2009 「災害と江戸時代」吉川弘文館
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1992 「江戸出土陶磁器・土器の諸問題」シンポジウム資料
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1996 「江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ」シンポジウム資料
- NHKプロモーション 2007 「乾山の芸術と光輝」
- 大月義徳・小岩直人・平野信一・松本秀明 1994 「II 自然の現在のすがた 2 地形と地質」『仙台市史特別編1 自然』46～93頁
- 大橋康二・西田宏子監修 1988 「古伊万里」別冊太陽
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 152～157頁
- 大橋康二・尾崎栄子 1988 「有田町史 古窯記」有田町教育委員会
- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 大橋康二 1994 「古伊万里の文様 初期肥前陶磁器を中心に」
- 大平 茂・松本 瞳 1992 「三田市下相野窯址－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書X VII」兵庫県 文化財調査報告書第107冊
- 小川啓司 1974 「そば猪口絵柄事典」
- 関西陶磁史研究会 2006 「京焼の成立と展開－押小路、栗田口、御室－」
- 喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1992 「守貞謹稿」第一～五巻 東京堂出版
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 九州近世陶磁学会 2002 「国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる」第一分冊
- 九州近世陶磁学会 2002 「国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる」第二分冊
- 九州近世陶磁学会 2004 「受容層の違いによる九州陶磁の様相」
- 古賀 孝 1974 「切込焼」
- 古建築研究会編著 1992 「宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－」宮城県文化財調査報告書第151集
- 小林 克 2000 「あかりの道具研究の方向」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 221～242頁
- 小林謙一 1991 「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』1～46頁
- 小林清治編 1982 「仙台城と仙台領の城・要害」日本城郭史研究叢書第二巻 名著出版
- 小林博範・斎藤 進・小島正裕ほか2000 「汐留遺跡Ⅱ－旧汐留貨物駅跡地内の調査」東京都埋蔵文化財センター調査報告第79集
- 小林博範・西澤 明・小林 裕ほか 2003 「汐留遺跡Ⅲ－旧汐留貨物駅跡地内の調査」東京都埋蔵文化財センター調査報告第125集
- 財团法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006 「江戸のやきもの－生産と流通－」
- 財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター 1999 「列島に伝わる大窯製品 東日本の様相」
- 斎藤鉄雄 2004 「第二章第三節 城下の災害」『仙台市史通史編5近世3』仙台市 122～137頁
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 「柴田コレクション展Ⅰ－初期伊万里から柿右衛門へ－」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991 「柴田コレクション展Ⅱ」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1993 「柴田コレクション展Ⅲ」

- 佐賀県立九州陶磁文化館 1994 「よみがえる江戸の草くらしのなかのやきもの」平成6年度特別企画展
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1993 「世界の染付展」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 「柴田コレクションIV -吉伊万里様式の成立と展開-」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1996 「名品図録」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997 「柴田コレクションV -延宝様式の成立と展開-」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 「柴田コレクションVI -江戸の技術と装飾技法-」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999 「柿右衛門 -その様式の全容-」
- 坂田啓編 1995 「私本仙台藩士事典」創栄出版
- 佐藤広史ほか 1990 「切込窯跡」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 佐藤 巧 1979 「近世武士住宅」叢文社
- 白神典之 1990 「堺鉢と明石鉢」「江戸の陶器」江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 47~51頁
- 白神典之・増田達彦 1999 「環濠溝都市出土の調理具・貯蔵具」「関西近世考古学研究」Ⅶ 79~100頁
- 白川昌三 1987 「新寛永通宝カタログ」新寛永クラブ
- 島崎とみ子 2000 「江戸時代の料理と器具」「江戸文化の考古学」吉川弘文館 86~98頁
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡」
- 新宿区歴史博物館 1990 「江戸のくらし -近世考古学の世界-」
- 鈴木本三 1937 「仙台風俗志」(1977年歴史図書社より再刊)
- 鈴田由紀夫 1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」「柴田コレクションIV -吉伊万里様式の成立と展開-」272~279頁
- 関根達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」「東北大大学埋蔵文化財調査年報10」51~90頁
- 関根達人 1999 「相馬焼の生産と流通」「江戸の物流 -陶磁器・漆器・瓦から-」江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨 65~90頁
- 関根達人 2006 「流通①北海道・東北」「江戸時代のやきもの -生産と流通-」記念講演会・シンポジウム資料集 潤戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 199~228頁
- 岸沢長介編 1978 「切込」東北大学文学部考古学研究会
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史 陶磁史篇四」
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇六」
- 瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2006 「江戸時代のやきもの -生産と流通-」記念講演会・シンポジウム資料集
- 仙台市教育委員会 1967 「仙台城」
- 仙台市教育委員会 1994 「仙台市青葉区文化財分布地図」
- 仙台市教育委員会 1995 「仙台市太白区文化財分布地図」
- 仙台市教育生涯学習部文化財課 2004 「仙台城跡整備基本構想」
- 仙台市教育生涯学習部文化財課 2005 「仙台城跡整備基本計画」
- 仙台郷土研究会 1991 「仙台藩歴史用語辞典」「仙臺郷土研究」復刊第16巻第1号(通巻242号)
- 仙台市史図録編纂委員会編 1986 「増補改訂版 目で見る仙台の歴史」宝文堂
- 仙台市史編さん委員会編 1994 「仙台市史特別編1 自然」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 1995 「仙台市史特別編2 考古資料」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 1997 「仙台市史資料編3 近世2城下町」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 1997 「仙台市史特別編4 市民生活」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2001 「仙台市史通史編3 近世1」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2003 「仙台市史通史編4 近世2」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2004 「仙台市史通史編5 近世3」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2006 「仙台市史特別編7 城館」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2008 「仙台市史通史編6 近代1」仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2009 「仙台市史通史編7 近代2」仙台市
- 平重道編 1973 「伊達治家記録二」宝文堂
- 高倉淳はか編 1994 「絵図・地図で見る仙台」今野印刷
- 高橋富雄はか著 1979 「角川日本地名大辞典4 宮城県」角川書店
- 高橋幹夫 1994 「江戸萬物辞典 絵で知る江戸時代」芙蓉書房出版
- 高橋幹夫 1994 「江戸の暮らし図鑑 道具で見る江戸時代」芙蓉書房出版
- 高橋良一郎 1977 「相馬のやきもの」ふくしま文庫40 福島中央テレビ
- 田口昭二 1983 「美濃焼」考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社

- 多治見市教育委員会 1993 「美濃窯の焼物 特集写真でみる美濃焼の歴史」多治見の古窯3
- 谷田有史 2000 「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』吉川弘文館 171~191頁
- たばこと塙の博物館編 1983 「きせる」
- 千葉正樹 2003 「第三章仙台城下の景観と構造 第一節城下町の景観」『仙台市史通史編4 近世2』160~187頁
- 坪井利弘 1976 「日本の瓦屋根」理工学社
- 坪井利弘 1977 「国産瓦屋根」理工学社
- 坪井利弘 1979 「棟瓦屋根のデザイン」理工学社
- 坪井利弘 1981 「古建築の瓦屋根」理工学社
- 東京国立博物館 1997 「特別展 日本のかな 鉄のわざと武のこころ」
- 東北電気通信局 1967 「東北の電信電話史」
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2008 「2007年度宮城県内主要発掘紹介 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点」『宮城考古学』第10号 宮城県考古学会 210頁
- 東北陶磁文化館 1987 「東北の近世陶磁」
- 東北歴史資料館 1990 「宮城県の諸職」東北歴史資料館資料集27
- 東北歴史資料館 1993 「宮城県の瓦職」東北歴史資料館資料集34
- 東北歴史資料館 1995 「仙台・堤のやきもの」
- 東北歴史資料館 1995 「宮城県の桶職」東北歴史資料館資料集38
- 土岐市美濃陶磁歴史館 1993 「桃山の華 大阪出土の桃山陶磁」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 1994 「大阪出土の桃山陶磁II」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 1996 「特別展衆家のやきもの 堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2002 「第14回織部の日特別展 美濃桃山陶」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2003 「第15回織部の日特別展 織部の流通圏を探る 東日本」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2004 「第16回織部の日特別展 織部の流通圏を探る 西日本」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2005 「第17回織部の日特別展 織部様式の成立と展開」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2006 「第18回織部の日特別展 天下人とやきもの」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2007 「第19回織部の日特別展 ポスト織部の時代 元和寛永の茶陶」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2008 「第20回織部の日特別展 桃山時代の茶陶生産」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2009 「第21回織部の日特別展 遺跡にみる茶の湯とやきもの」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2010 「第22回織部の日特別展 公と武 京と江戸のやきものの文化」
- 都立一橋高校内遺跡調査団 1985 「江戸 都立一橋高校地點発掘調査報告」
- 中井さやか 1992 「近世の漆椀について—その器種と組み合わせを考える—」『江戸の食文化』吉川弘文館 180~204頁
- 永井久美男編 1997 「近世出土銭I」兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編 1998 「近世出土銭II」兵庫埋蔵銭調査会
- 水田久光 1956 「日本の郷土玩具」東京創元社
- 西 和夫 1990 「図解古建築入門」彰国社
- 西沢岱歎 1957 「日本の人形と玩具」岩崎書店
- 西沢岱歎 1965 「日本郷土玩具事典」岩崎美術社
- 日本馬具大鑑編集委員会 1991 「日本馬具大鑑 第四巻近世」日本中央競馬会
- 日本民具学会 1989 「信仰と民具」雄山閣
- 日本民具学会 1997 「日本民具辞典」ぎょうせい
- 丹羽基二 1971 「家紋大図鑑」秋田書店
- 根津美術館 1998 「華南のやきもの 黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて」
- 根津美術館 2002 「知られざる唐津 二彩・單色釉・三島手」
- 根津美術館 2004 「仁清の茶碗」
- 根津美術館 2005 「特別企画展大名茶陶高取焼展図録」
- 野馬追の里原町市立博物館 1999 「相馬のやきものー収蔵資料を中心としてー」
- 乘興 実 1999 「近世備前焼の描鉢・素描メモー」『関西近世考古学研究』Ⅶ 119~130頁
- 長谷部栄爾監修 1997 「明末清初の民窯 中国の陶磁10」平凡社版
- 長谷川真 2006 「近世波焼の諸相」『江戸時代のやきものー生産と流通』
- 畠中英二 2003 「信楽焼の考古学的研究」サンライズ出版
- 畠中英二 2007 「続信楽焼の考古学的研究」サンライズ出版

- 原町市教育委員会 1995 「相馬地方の古陶」
- 早坂芳雄 1958 「宮城県酒造史 本編」
- 早坂芳雄 1962 「宮城県酒造史 別篇」
- 平泉研究会 1996 「地鎮・造構の廃棄儀礼検討会資料」
- 福島県立博物館 1990 「企画展東北の陶磁史」
- 福田敏一・石崎俊哉ほか 1997 「汐留遺跡I - 旧汐留貨物駅跡地内の調査」 東京都埋蔵文化財センター調査報告書第37集
- 福田敏一・石崎俊哉ほか 2006 「汐留遺跡IV - 旧汐留貨物駅跡地内の調査」 東京都埋蔵文化財センター調査報告書第189集
- 藤沢 敦 2008 「宮城県の考古学 - この10年の歩みと展望 - VII. 近世」『宮城考古学』第10号 宮城県考古学会 89~102頁
- 藤沢良祐 1998 「瀬戸市史 陶磁史編六」瀬戸市史編纂委員会
- 平凡社 1989 「別冊太陽 江戸細密工芸尽くし」
- ボーラ文化研究所 1989 「日本の化粧 - 道具と心模様」ボーラ文化研究所コレクション 2
- 堀江 格 1998 「岸窯跡 - 近世窯跡の調査 -」福島市埋蔵文化財報告書111
- 本田勇編著 2003 「史料仙台伊達氏家臣団事典」丸善
- 松本惟六・羽野植三 1939 「時代腕大観」文化出版局
- 三浦正幸監修 2002 「最新日本名城古写真集成」別冊歴史読本第27巻第14号 新人物往来社
- 宮内 懇 1991 「箱」ものと人間の文化史67 法政大学出版局
- 宮城県教育委員会 1998 「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第176集
- 宮城県図書館 1993 「宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録」
- 宮城正俊 1982 「新説切辺焼」
- 官澤智士 1983 「近世民家の地域的特色」講座・日本技術の社会史第七卷建築 日本評論社 151~182頁
- 村上 直・木村 碩・藤野 保 1988 「藩史大事典第1巻北海道・東北編」雄山閣
- 室井 輝 1973 「竹」ものと人間の文化史10 法政大学出版局
- 両角まり 1996 「瓦質土器類の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題II』 85~98頁
- 山崎信二 2008 「近世瓦の研究」同成社
- 山本忠尚 2001 「和英対照日本考古学用語辞典」東京美術
- 吉岡一男ほか編 2005 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」今野印刷
- 渡辺浩一 2003 「第三章仙台城下の景観と構造 第二節武家屋敷と武士」『仙台市史通史編4 近世2』 188~207頁 仙台市
- 渡辺信夫ほか編著 1994 「宮城県姓氏家系大辞典」角川書店

《仙台市教育委員会刊行仙台城跡および関連遺跡調査報告書（報告書番号順）》

- 佐藤 洋ほか 1985 「仙台城三の丸跡」仙台市文化財調査報告書第76集  
金森安孝・根本光一 2002 「仙台城跡1－平成13年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第259集  
金森安孝・伊藤 隆 2003 「仙台城跡2－平成14年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第264集  
渡部 紀・中山 純・豊村幸宏・伊藤 隆 2004 「仙台城跡3－平成15年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第270集  
渡部 紀・中山純・伊藤隆 2004 「仙台城跡4－平成15年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第271集  
金森安孝 2004 「仙台城跡第1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第4分冊石垣図版編」仙台市文化財調査報告書第275集  
金森安孝・渡部 紀 2005 「仙台城跡第1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第3分冊出土遺物編」仙台市文化財調査報告書第282集  
鈴木 隆・渡部 紀 2005 「仙台城跡5－平成16年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第285集  
斎野裕彦・北原正範・瀧谷正信 2005 「仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（1）概要報告書」仙台市文化財調査報告書第289集  
佐藤 淳ほか 2005 「若林城跡－第4次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第292集  
鈴木 隆 2006 「仙台城跡6－平成17年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第297集  
渡部 紀 2006 「仙台城跡第1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第2分冊構造編」仙台市文化財調査報告書第298集  
金森安孝・渡部 紀・鈴木 隆 2006 「仙台城跡地震災害石垣復旧事業及び史跡整備事業報告書」中門跡・清水門跡」仙台市文化財調査報告書第299集  
橋本顕嗣・古川久雄・村尾政人 2006 「仙台城跡登城路第1次調査－平成17年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第300集  
佐藤甲二・竹内俊之ほか 2006 「仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（2）概要報告書」仙台市文化財調査報告書第302集  
佐藤 淳 2010 「若林城跡－第6次・第7次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第306集  
鹿野仁子・鈴木 隆・渡部 紀 2007 「仙台城跡7－平成18年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第309集  
竹内俊之ほか 2007 「川内A遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書1－」仙台市文化財調査報告書第312集  
佐藤甲二・竹内俊之ほか 2007 「仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（3）概要報告書」仙台市文化財調査報告書第316集  
廣瀬真理子・中山豊 2007 「桜ヶ岡公園遺跡－第2次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第318集  
佐藤 淳・佐藤好司・後藤太一・高梨雅幸 2008 「若林城跡－第5次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第323集  
渡部 紀・在川宏志・鹿野仁子 2008 「仙台城跡8－平成19年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第330集  
土橋尚起・関美男・福井流星 2007 「仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書II－」仙台市文化財調査報告書第342集  
佐藤 淳・在川宏志 2009 「仙台城跡9－平成20年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第348集  
伊藤雅和ほか 2008 「桜ヶ岡公園遺跡－第3次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第335集  
渡部 紀 2009 「仙台城跡第1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第1分冊本文編」仙台市文化財調査報告書第349集  
渡部 紀・黒田恵之・大口和樹 2009 「仙台城跡－追廻地区遺構確認調査－」仙台市文化財調査報告書第350集  
佐藤 淳・福井流星 2009 「仙台城跡登城路第2次調査－平成21年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第354集  
馬場由行・福原千恵・伊勢 契 2010 「仙台城跡－北方武家屋敷第2次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第356集  
佐藤 淳・在川宏志 2010 「仙台城跡10－平成21年度調査報告書－仙台城本丸大広間跡調査成果の総括」仙台市文化財調査報告書第374集  
佐藤 淳・瀬戸かな子・吉村 品・北野桂子 2010 「若林城跡－第8次・第9次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第377集  
鈴木 隆・関根信夫 2010 「桜ヶ岡公園遺跡－第4次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第378集  
佐藤 淳・瀬戸かな子・服部英世 2011 「若林城跡－第11次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第383集  
主浜光朗・結城慎一・守谷健吾・萩澤太郎 2011 「桜ヶ岡公園遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書IV－」仙台市文化財調査報告書第384集

- 主浜光朗・結城慎一・土任 隆・武田芳雄 2011 「川内B遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書V－」仙台市文化財調査報告書第385集
- 主浜光朗・結城慎一・長林 大・辻本 彩 2011 「仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VI－」仙台市文化財調査報告書第386集
- 佐藤 洋・村上芳成 2011 「仙台城跡II－平成22年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第395集
- 工藤信一郎・水野一夫・蒲 明男・岩瀬雄史 2012 「川内B遺跡ほか－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書X－」仙台市文化財調査報告書第401集
- 渡部 紀・工藤信一郎・水野一夫・水上匡彦・横井 奏 2012 「仙台城跡ほか－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－」仙台市文化財調査報告書第402集
- 渡部 紀・工藤信一郎・水野一夫・山本信夫・土橋尚起・武田芳雄 2012 「桜ヶ岡公園遺跡Ⅱ－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ－」仙台市文化財調査報告書第403集

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報1	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第1地点（NM1）	
		仙台城跡二の丸第2地点（NM2）	
東北大学埋蔵文化財調査年報2	1986	仙台城跡二の丸第3地点（NM3）	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和59年度（1984年度）事業概要	
		青葉山B道路第1次調査（AOB1）	
東北大学埋蔵文化財調査年報3	1990	青葉山B道路第2次調査（AOB2・旧称AOF）	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山E道路第1次調査（AOE1）	
		昭和60年度（1985年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報4・5	1992	仙台城跡二の丸第6地点（NM6）	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		芦ノ口道路第1次調査（TM1）	
		芦ノ口道路1976年考古学研究室による調査（TK）	
東北大学埋蔵文化財調査年報6	1993	研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和61年度（1986年度）事業概要	
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報7	1994	仙台城跡二の丸第4地点（NM4）	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点（NM7）	
		仙台城跡二の丸第8地点（NM8）	
東北大学埋蔵文化財調査年報8	1997	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点（NM5）	
		平成1年度（1989年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報9	1998	仙台城跡二の丸第5地点（NM5）付帯施設部分	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第5地点（NM5）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第5地点（BK5）	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	川渡農場町西道跡第1地点（KW1）	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		平成2年度（1990年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第5地点（NM9）	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成3年度（1991年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（NM10）	
		芦ノ口道路第2次・3次調査（TM2・TM3）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		平成4年度（1992年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第13地点（NM13）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	青葉山地区分布調査	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
		平成5年度（1993年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	仙台城跡二の丸第12地点（NM12）	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第14地点（NM14）	
		青葉山E道路第2次調査（AOE2）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成6年度（1994年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（NM15）	
		青葉山E道路第3次調査（AOE3）	
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成7年度（1995年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（NM11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点（BK4）	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2001	青葉山E道路第4次調査（AOE4）	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
		平成8年度（1996年度）事業概要	
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2001	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第6地点（BK6）	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		青葉山E道路第5次調査（AOE5）	
		芦ノ口道路第4次調査（TM4）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19	2001	平成9年度（1997年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（NM16）	
		青葉山E道路第6次調査（AOE6）	

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大學埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要 研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	東北大學 埋蔵文化財調査研究センター
東北大學埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大學 埋蔵文化財調査研究センター
東北大學埋蔵文化財調査年報18	2003	平成12年度（2000年度）事業概要 仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	東北大學 埋蔵文化財調査研究センター
東北大學埋蔵文化財調査年報19 第1分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要 芦ノ口道路第5次調査（TM5） 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 道構	東北大學 埋蔵文化財調査研究センター
東北大學埋蔵文化財調査年報19 第2分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報19 第3分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 木簡・墨書きある木製品	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報19 第4分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） その他の遺物	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報19 第5分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7） 分析・考察	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第8地点（BK8） 青葉山E道路第7次調査（AOE7） 青葉山E道路第8次調査（AOE8）	東北大學 埋蔵文化財調査研究センター
東北大學埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第9地点（BK9） 芦ノ口道路第6次調査（TM6）	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大學埋蔵文化財調査室
東北大學埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（BK10） 青葉山新キャンパス地区試掘調査	東北大學埋蔵文化財調査室

〈東北大学埋蔵文化財調査室調査報告〉

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告 1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点 (BK11) 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点 (BK12) 川内地区の船団記載人名の検討 川内地区における江戸時代の道路の復元	東北大学 埋蔵文化財調査室
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告 2	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点 (BK13)	東北大学 埋蔵文化財調査室

〈東北大学埋蔵文化財調査室年次報告〉

書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

## 国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成6年5月17日 規第56号

### (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

### (目的)

第2条 調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

### (職及び職員)

第3条 調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

### (室長)

第4条 室長は、調査室の業務を掌理する。

2 室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

3 室長の選考は、第6条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

### (文化財調査員)

第5条 文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

2 文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

### (運営委員会)

第6条 調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

### (運営委員会の組織)

第7条 運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一 東北大学施設整備・運用委員会各地区キャンパス整備委員会の委員 各1人

二 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人

三 発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四 施設部長

### (委員長)

第8条 委員長は、室長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会の会務を総理する。

3 委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

### (調査部会)

第9条 運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

(調査部会の組織)

第10条 調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 調査室の特任准教授
- 二 文化財調査員
- 三 発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授 若干人
- 四 施設部計画課長
- 五 発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

(部会長)

第11条 部会長は、室長をもって充てる。

2 部会長は、調査部会の会務を掌理する。

(委嘱)

第12条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

(任期)

第13条 第7条第1号から第3号まで並びに第10条第3号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の委員は、再任されることができる。

(幹事)

第14条 運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

(事務)

第15条 調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

(雑則)

第16条 この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附 則

1 この規程は、平成6年5月17日から施行する。

2 東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

3 東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のように〕略

附 則（平成16年4月1日規第207号改正）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則（平成18年4月26日規第80号改正）

1 この規程は、平成18年4月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年4月1日から適用する。

2 平成18年4月1日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第4条第3項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成18年5月16日までとする。

附 則（平成19年4月1日規第76号改正）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

RESERCH REPORTS  
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY  
No.2 MARCH 2013

The Archaeological Research office  
On the Campus, Tohoku University  
1-1, Katahira, 2chome, AobaWard, Sendai  
980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of BK13 (Loc.13 of *samurai* residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2008 and 2009.

The purpose of this excavation is to recognize the archaeological features still remained in the area. Therefore, the excavation was halted at the stage when features were recognized. In the excavation of BK13, we detected a characteristic soil layer which was named the layer A, below the bottom of the first layer in the eastern survey area. It is a brown silt layer containing yellowish brown clay blocks. And a lot of artifacts dated to various periods of occupation have been excavated from there. The past excavations show that this layer is the result of place use as farmland. Besides, structures of swamp, some ditches, colonnades, and buildings were found. These features of structure are classified into temporal phases I- IV.

Phase I is 17th century.

Phase II is from the 18th century to around the last stage of Edo period (the middle stage of 19th century).

Phase III is the beginning of the Meiji period (the latter stage of the 19th century).

Phase IV is around the 20th year of Meiji (1887).

It is considered that the ditch which flows from east to west had changes in 3 stages. The structure of a swamp stream, which flows from north to south, had been buried gradually. The ditch and the swamp were connected at Phase II. This swamp was drawn on the illustrated maps made in the 17th – 19th century. In addition, we recognized features which were the "toilet" and "stables" among the structures of this locality. These "toilet" and "stables" were illustrated on the maps made in the 18th–19th century.

Most artifacts belong to the Edo period and after. Only one artifact is dated before Edo period, it is a roof tile dated to Nara or Heian period. A lot of artifacts are discovered from No.1 ditch, No.4 structural remain and layer A. They are pieces

of porcelain, glazed ceramics, unglazed ceramics, clay objects and figurines, roof tiles, old coins, tobacco pipes, various metal implements, stone implements, animal remains and so on. Usually, many wooden implements and lacquer wares are found at this site. However, in this excavation term, few wooden implements and lacquer wares were found and their conditions are bad. The porcelain and glazed ceramics are dated from the beginning of the 17th century to the Meiji period. Among them, those of early to middle 19th century and the Meiji period are abundant.

No.1 ditch yielded porcelain and glazed ceramics from wide ranging periods. The major parts are dated to 19th century. But a few older ones, which are dated to the 17th or 18th century, are included.



# 写 真 図 版





1区西全景（左側が北）

圖版 1 武家屋敷地区第13地点全景 (1)  
PLI Views of BK13 (1)



1. 1区西全景（東から）



2. 1区西中央部全景（北から）

図版2 武家屋敷地区第13地点全景 (2)  
Pl. 2 Views of BK13 (2)



1区東全景（左側が北）

図版3 武家屋敷地区第13地点全景（3）  
Pl. 3 Views of BK13 (3)



1. 1区東全景（東から）



2. 1区東全景（西から）

図版4 武家屋敷地区第13地点全景 (4)  
Pl. 4 Features at BK13 (4)

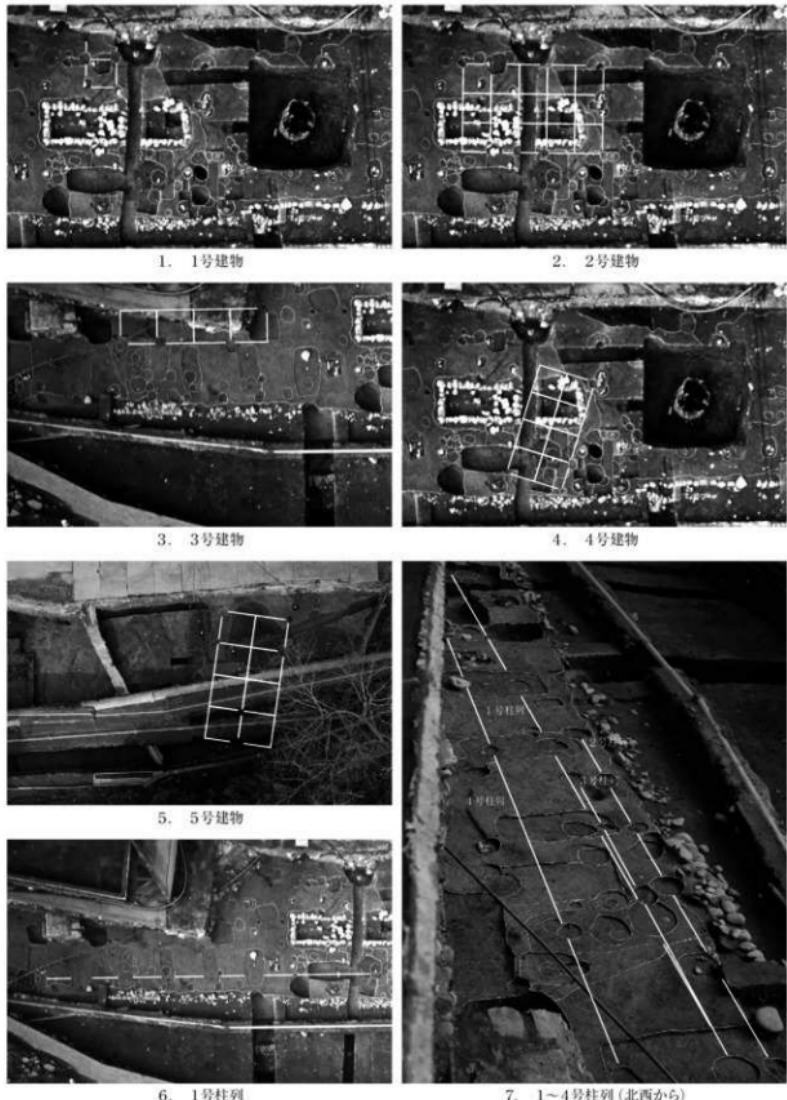


1. 2区全景（北から）



2. 2区から千貫沢を望む（北から）

図版5 武家屋敷地区第13地点全景 (5)  
Pl. 5 Views of BK13 (5)



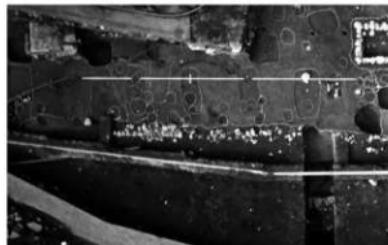
図版6 武家屋敷地区第13地点の遺構 (1)  
Pl. 6 Features at BK13 (1)



1. 2号柱列



2. 3号柱列



3. 4号柱列



4. 5号柱列



5. 6号柱列

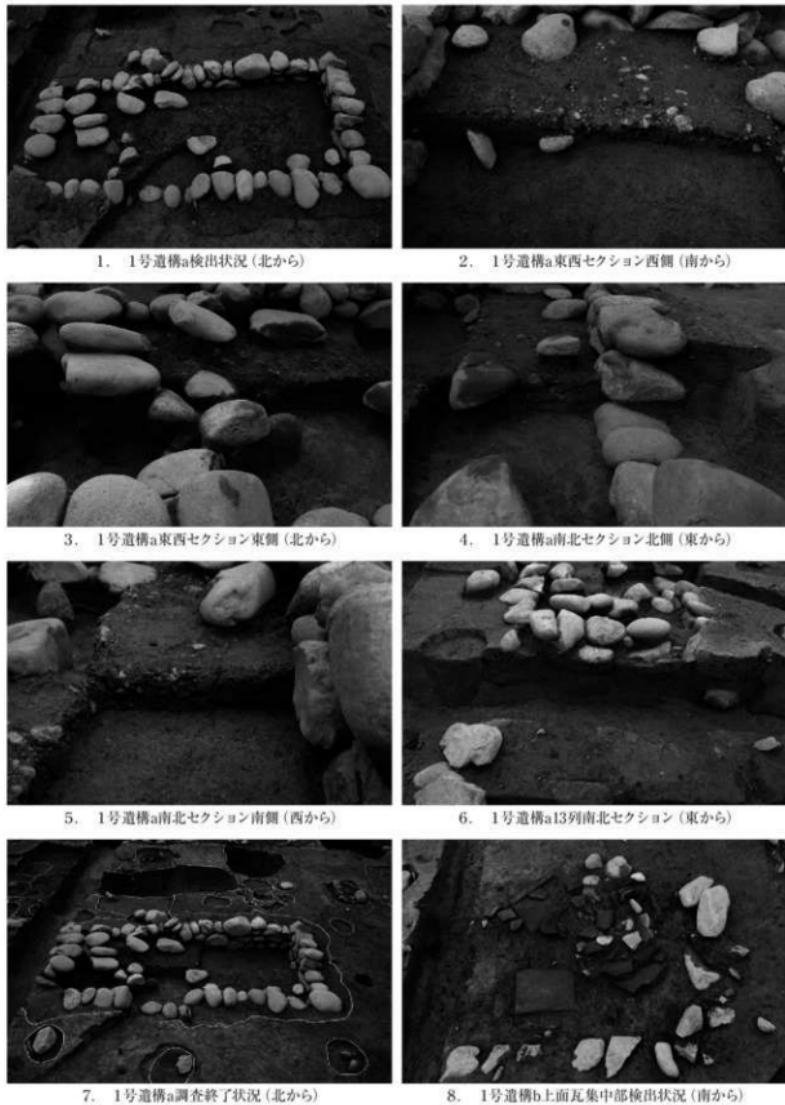


6. 1号造構と周辺の造構 (北から)



7. 1号造構と4号造構西端 (西から)

図版7 武家屋敷地区第13地点の造構 (2)  
Pl. 7 Features at BK13 (2)



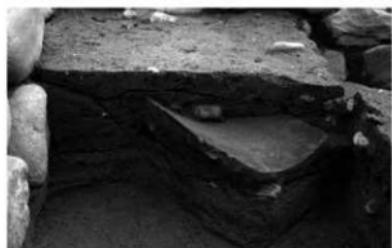
図版8 武家屋敷地区第13地点の遺構 (3)  
Pl. 8 Features at BK13 (3)



1. 1号遺構b検出状況（北から）



2. 1号遺構b東西セクション西側（南から）



3. 1号遺構b東西セクション東側（北から）



4. 1号遺構b南北セクション南側（西から）



5. 1号遺構b南北セクション北側（東から）



6. 1号遺構b13列南北セクション（西から）

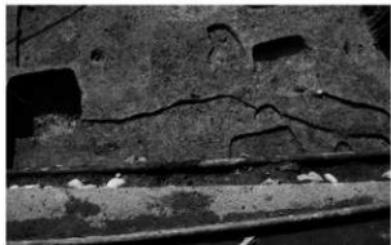


7. 1号遺構b調査終了状況



8. 1号遺構調査終了状況（北から）

図版9 武家屋敷地区第13地点の遺構 (4)  
Pl. 9 Features at BK13 (4)



1. 2号遺構検出状況（北から）



2. 3号遺構検出状況（南東から）



3. 3号遺構南北セクション（西から）



4. 1区東 北壁セクション（4号遺構）19・20区（南から）



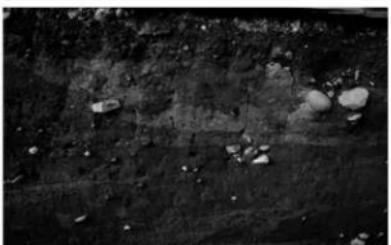
5. 1区東 北壁セクション（4号遺構）20・21区（南から）



6. 1区東 北壁セクション（4号遺構）21・22区（南から）

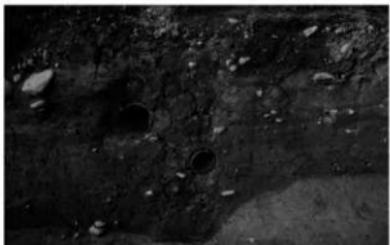


7. 1区東 北壁セクション（4号遺構）23区（南から）

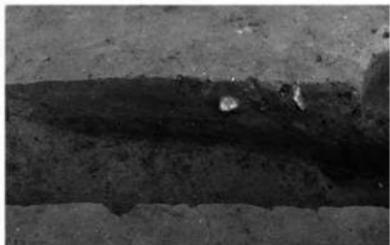


8. 1区東 北壁セクション（4号遺構）24区（南から）

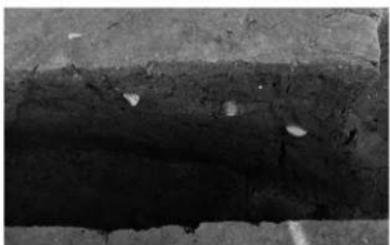
図版10 武家屋敷地区第13地点の遺構 (5)  
Pl. 10 Features at BK13 (5)



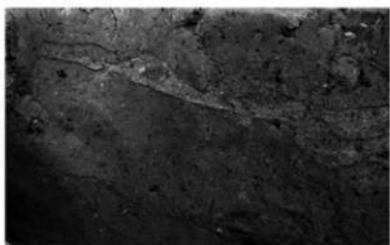
1. 1区東 北壁セクション（4号遺構）25区（南から）



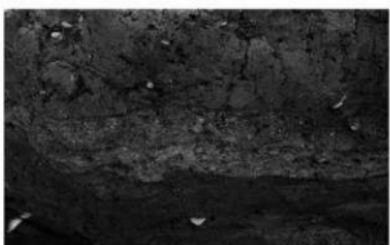
2. 4号遺構F-13区北壁セクション（南から）



3. 4号遺構F-14区北壁セクション（南から）



4. 4号遺構F-14区北壁セクション（南から）



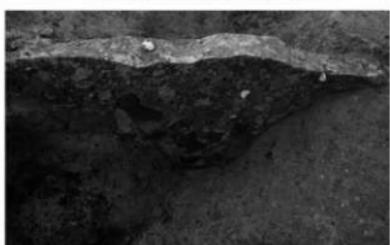
5. 4号遺構F-14・15区北壁セクション（南から）



6. 4号遺構F-15区北壁セクション（南から）



7. 4号遺構G-14区北壁セクション（南から）



8. 4号遺構E・F-20区西壁セクション（東から）

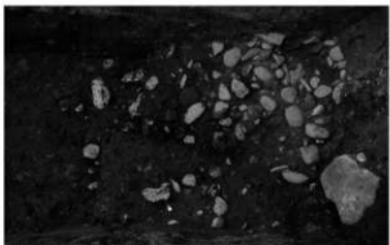
図版11 武家屋敷地区第13地点の遺構 (6)  
Pl. 11 Features at BK13 (6)



1. 4号遺構東端部、15・16号遺構検出状況（北から）



2. 5号遺構検出状況（北から）



3. 6号遺構検出状況（南から）



4. 7号遺構検出状況（北から）



5. 1区西における4号遺構・1号溝・井戸（北西から）

図版12 武家屋敷地区第13地点の遺構  
Pl. 12 Features at BK13 (7)

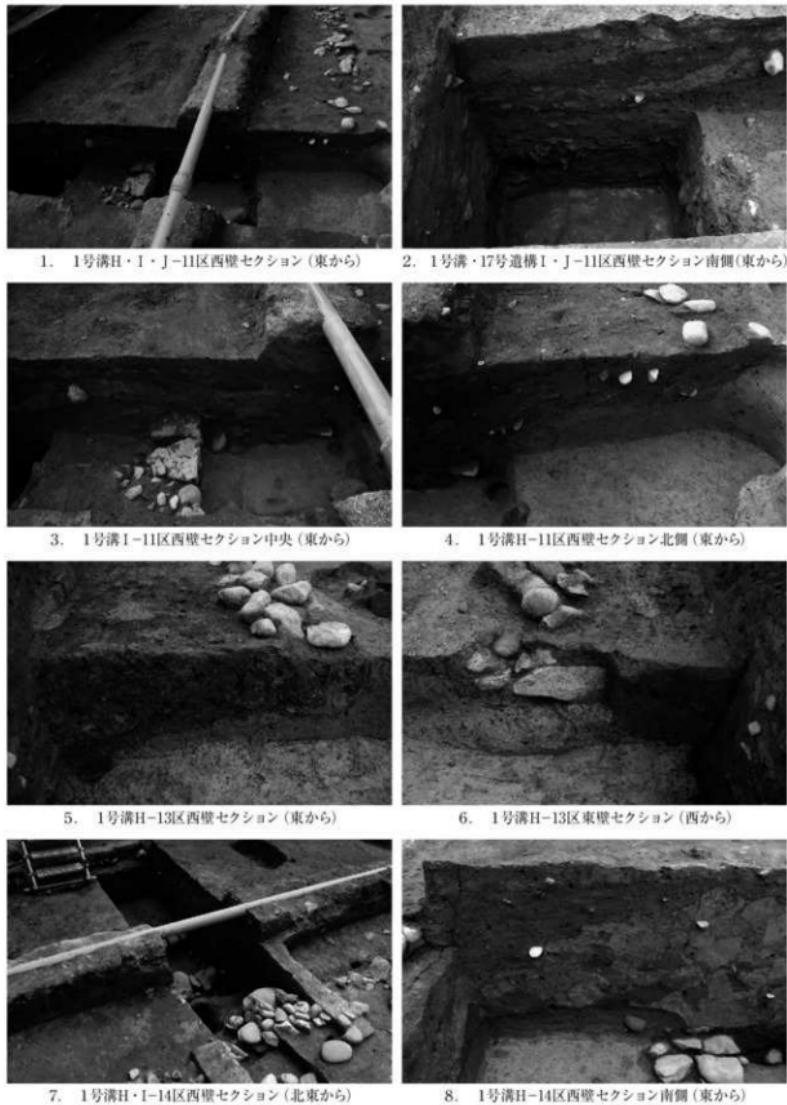


1. 1区西1号溝・4号道橋検出状況



2. 1区東1号溝・4号道橋検出状況

図版13 武家屋敷地区第13地点の遺構  
Pl. 13 Features at BK13 (8)



図版14 武家屋敷地区第13地点の遺構 (9)  
Pl. 14 Features at BK13 (9)



1. 1号溝I-14区西壁セクション中央（東から）



2. 1号溝I-14区西壁セクション北側（東から）



3. 1号溝G-17区西壁セクション（東から）



4. 1号溝G-18区西壁セクション（東から）



5. 1号溝F・G-20区西壁セクション（東から）



6. 1号溝E・F-20区西壁セクション（東から）



7. 1号溝F・G-22区西壁セクション（東から）



8. 1号溝G-22・23区南壁セクション（北から）

図版15 武家屋敷地区第13地点の遺構 (10)  
Pl. 15 Features at BK13 (10)



1. 1区西1号溝石列（東から）



2. 1区東1号溝東端（西から）

図版16 武家屋敷地区第13地点の遺構 (11)  
Pl. 16 Features at BK13 (11)



1. 2区8・9号遺構検出状況（北から）



2. 8・9号遺構C-D区南北セクション（西から）



3. 8・9号遺構C-D区南北セクション（西から）



4. 8・9号遺構D-4区南北セクション（西から）



5. 8・9号遺構D-4区南北セクション（西から）

図版17 武家屋敷地区第13地点の遺構 (12)  
Pl. 17 Features at BK13 (12)



1. 8号造構B-3区西壁セクション北側(東から)



2. 8号造構B-3区西壁セクション中央(東から)



3. 8号造構B-3区西壁セクション南側(東から)



4. 8・9号造構C-2区西壁セクション



5. 8号造構B-2区西壁セクション南側(東から)



6. 8号造構B-2区西壁セクション北側(東から)

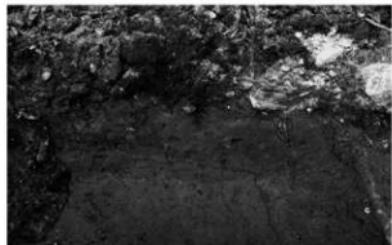


7. 2号溝跡検出状況(西から)



8. 3区13号造構検出状況(西から)

図版18 武家屋敷地区第13地点の造構 (13)  
Pl. 18 Features at BK13 (13)



1. 3区東壁セクション（西から）



2. 4区全景（北から）

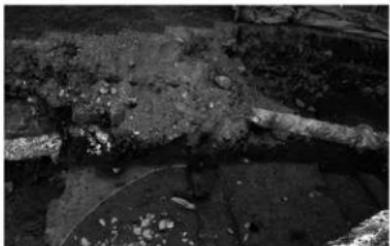


3. 4区北 8・10・11号道構検出状況（南西から）



4. 4区南 8・9・12号道構検出状況（北から）

図版19 武家屋敷地区第13地点の遺構 (14)  
Pl. 19 Features at BK13 (14)



1. 4区南 西壁セクション（東から）



2. 5区全景（北から）



3. 5区C-34区東壁セクション北側（西から）



4. 5区E-32区東壁セクション南側（西から）

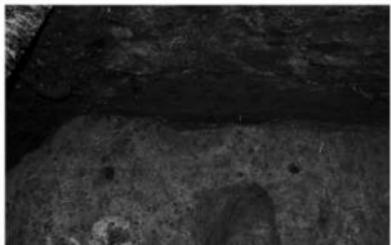


5. 6区全景（東から）

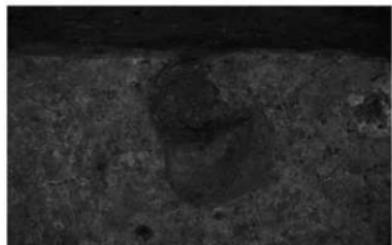
図版20 武家屋敷地区第13地点の遺構 (15)  
Pl. 20 Features at BK13 (15)



1. 6区E-30区南壁セクション西側（北から）



2. 6区ピット213セクション（南から）



3. 6区ピット212セクション（北から）



4. 6区ピット212完掘状況（北から）



5. 7区全景（西から）



7. 8区東 南壁セクション西側（北から）



6. 8区東全景（北から）

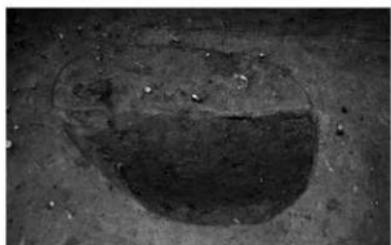
図版21 武家屋敷地区第13地点の遺構 (16)  
Pl. 21 Features at BK13 (16)



1. 8区東14号遺構南北セクション（西から）



2. 8区東ピット215セクション（南から）



3. 8区東ピット216セクション（北から）



4. 8区東ピット214・215・216完掘（南から）



5. 8区西全景（南から）

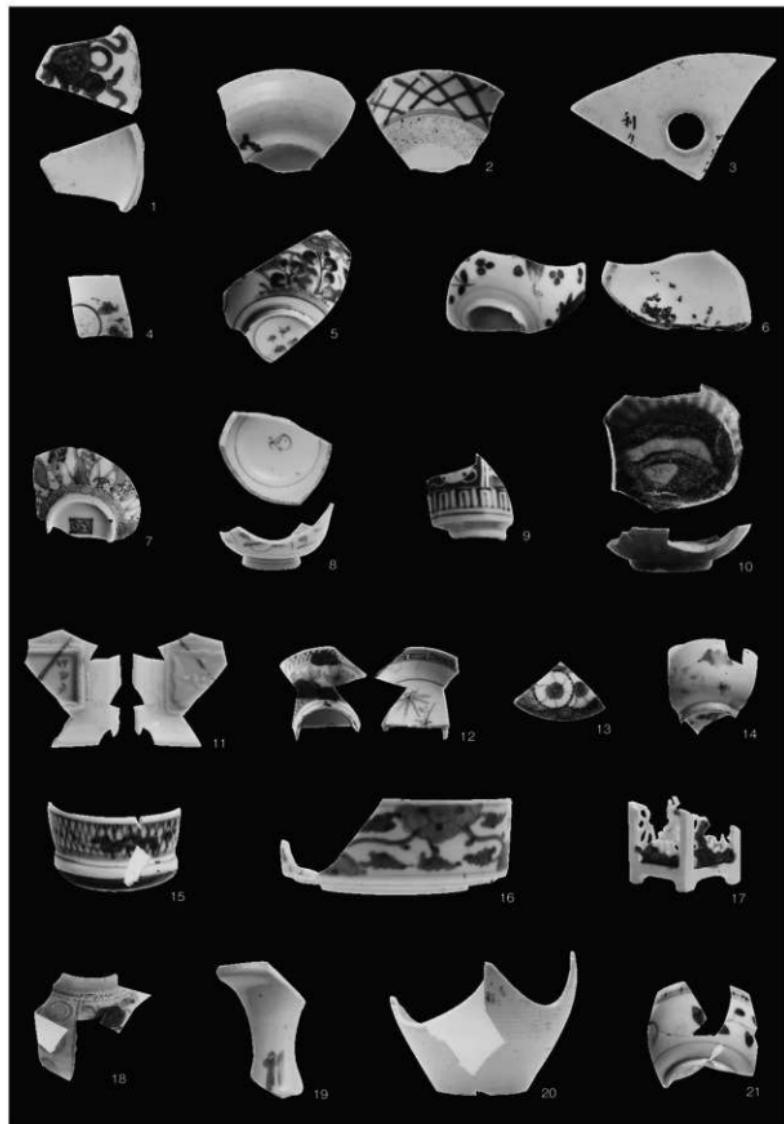


6. 8区西ピット217・218セクション（南西から）



7. 8区西ピット217・218セクション（南西から）

図版22 武家屋敷地区第13地点の遺構 (17)  
PL 22 Features at BK13 (17)



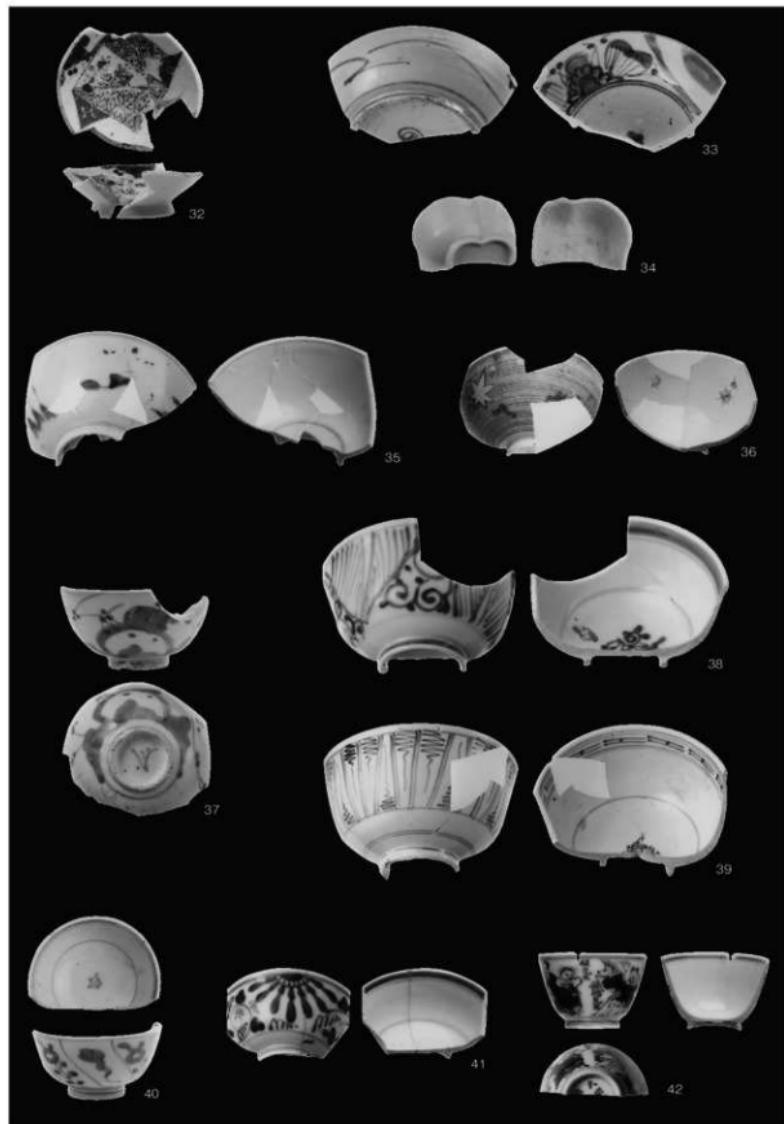
圖版23 武家屋敷地区第13地点出土瓷器 (1)  
Pl. 23 Porcelains from BK13 (1)

S = 1 : 3



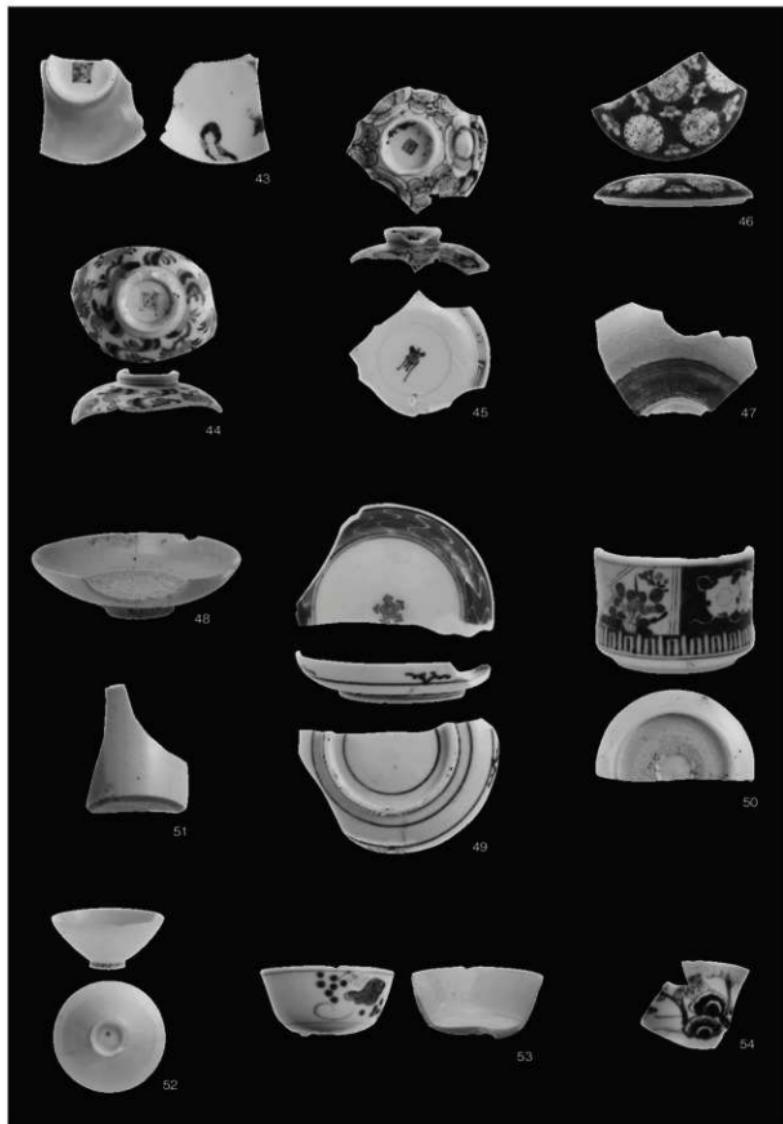
圖版24 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (2)  
Pl. 24 Porcelains from BK13 (2)

S = 1 : 3



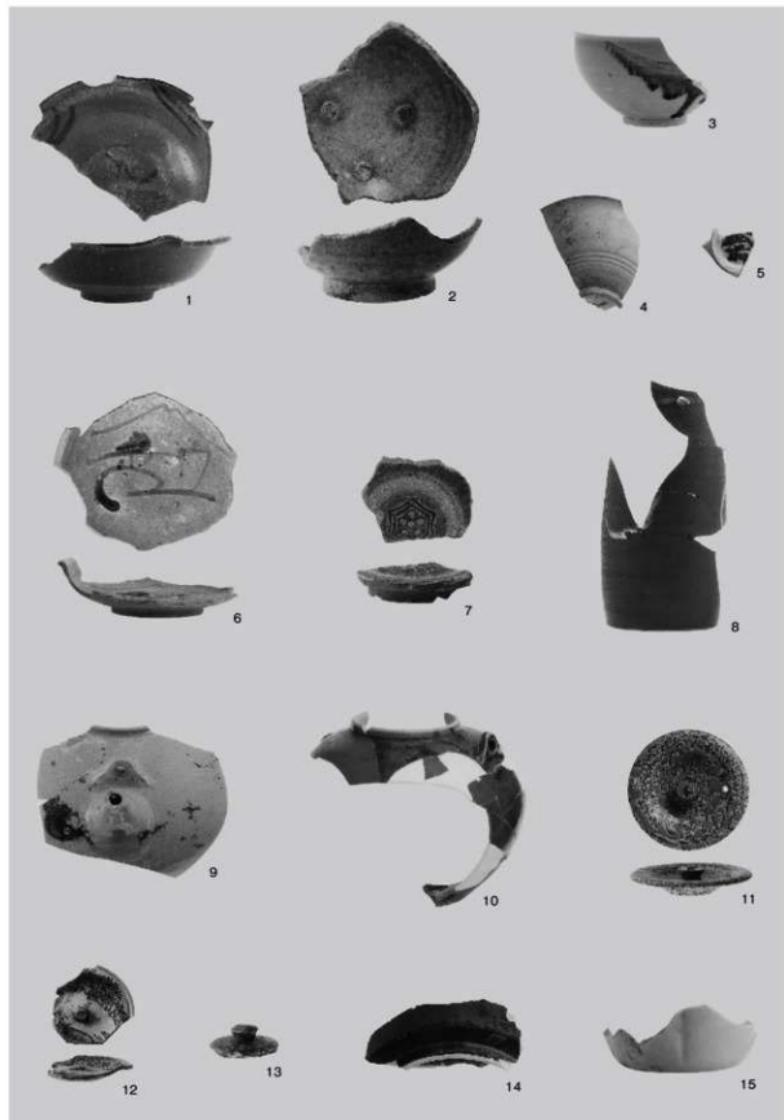
圖版25 武家屋敷地区第13地点出土磁器 (3)  
Pl. 25 Porcelains from BK13 (3)

S = 1 : 3



圖版26 武家屋敷地区第13地点出土瓷器 (4)  
Pl. 26 Porcelains from BK13 (4)

S = 1 : 3



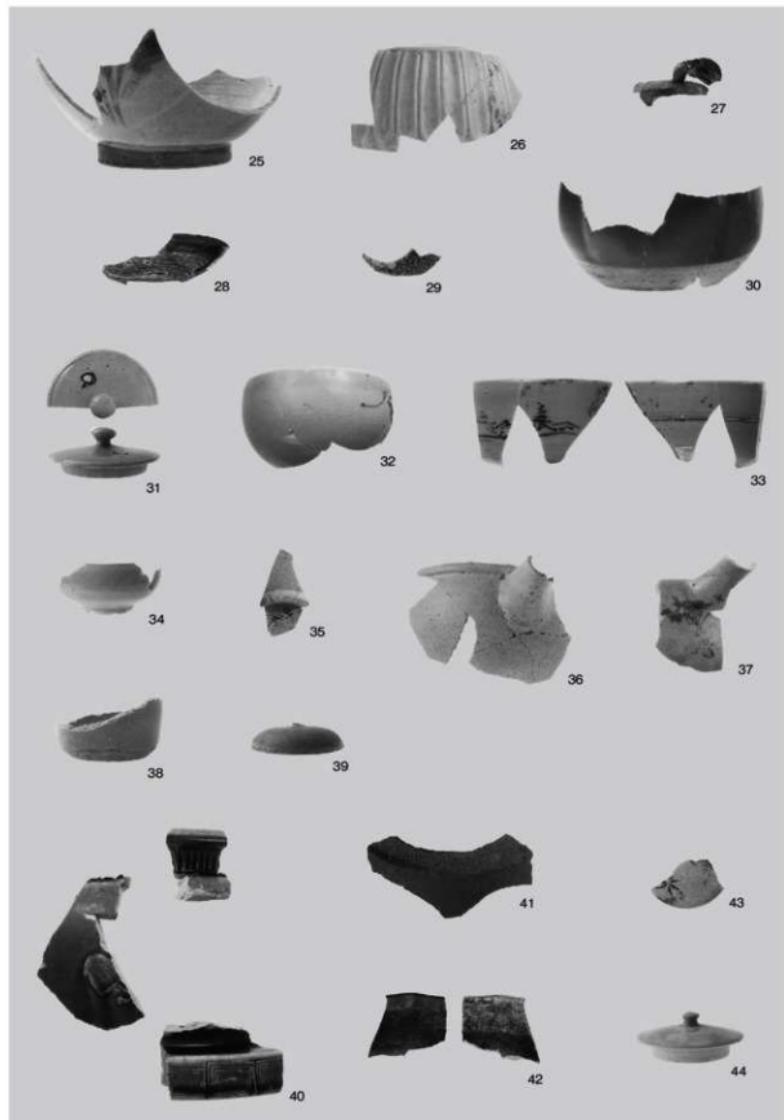
图版27 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (1)  
Pl. 27 Glazed ceramics from BK13 (1)

S = 1 : 3



圖版28 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (2)  
Pl. 28 Glazed ceramics from BK13 (2)

S = 1 : 3



图版29 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (3)  
Pl. 29 Glazed ceramics from BK13 (3)

S = 1 : 3



图版30 武家屋敷地区第13地点出土陶器 (4)

Pl. 30 Glazed ceramics from BK13 (4)

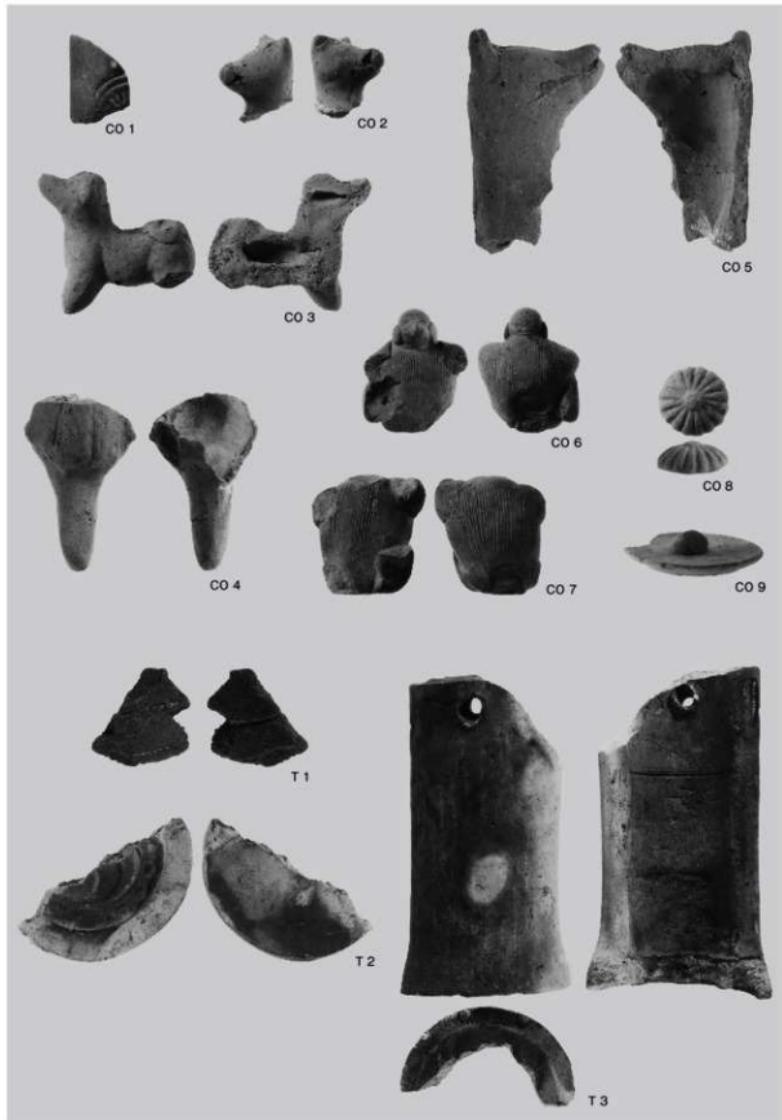
45~53·55·56·58 S=1:3

54·57 S=1:4



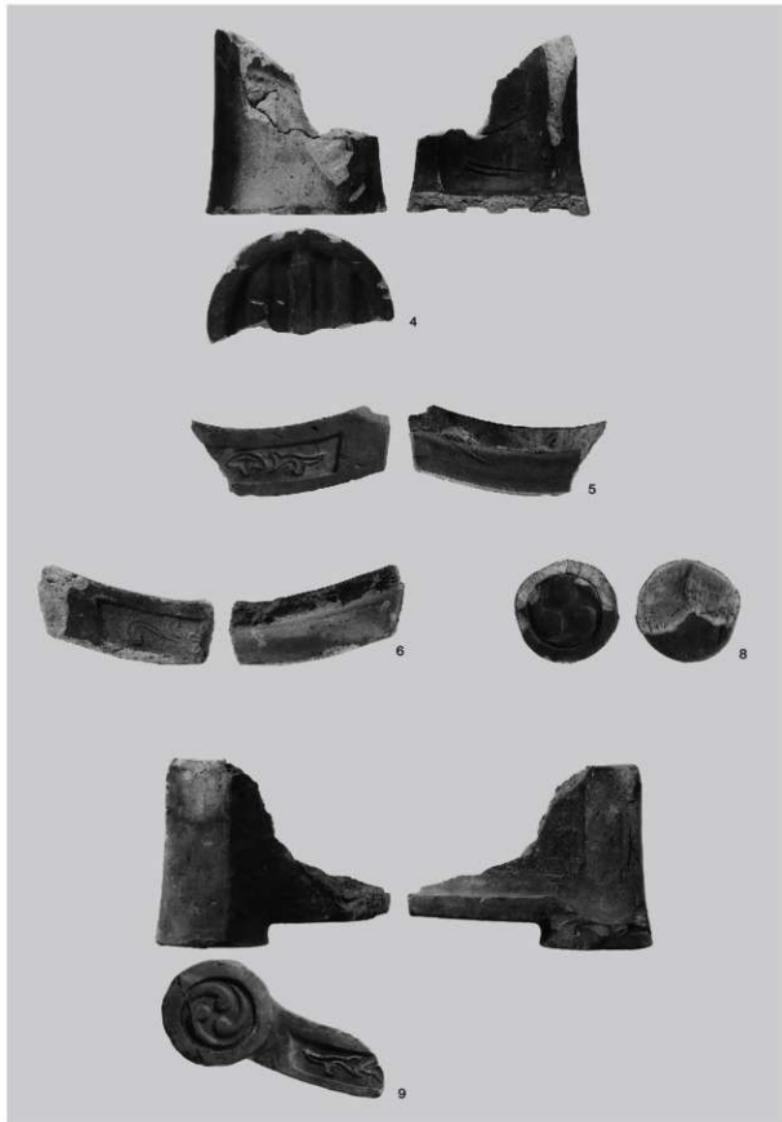
图版31 武家屋敷地区第13地点出土土器  
Pl. 31 Unglazed ceramics from BK13

S = 1 : 3



图版32 武家屋敷地区第13地点出土土製品・瓦 (1)  
Pl. 32 Clay objects and figures, various roof tiles from BK13

CO 1~9 S = 2 : 3  
T 1 S = 1 : 3  
T 2 · 3 S = 1 : 4



圖版33 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (2)  
Pl. 33 Various roof tiles from BK13 (2)

S = 1 : 4



10



11



12



14



15

圖版34 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (3)

Pl. 34 Various roof tiles from BK13 (3)

S = 1 : 5



16



17



18

圖版35 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (4)  
Pl. 35 Various roof tiles from BK13 (4)

S = 1 : 5



圖版36 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (5)  
Pl. 36 Various roof tiles from BK13 (5)

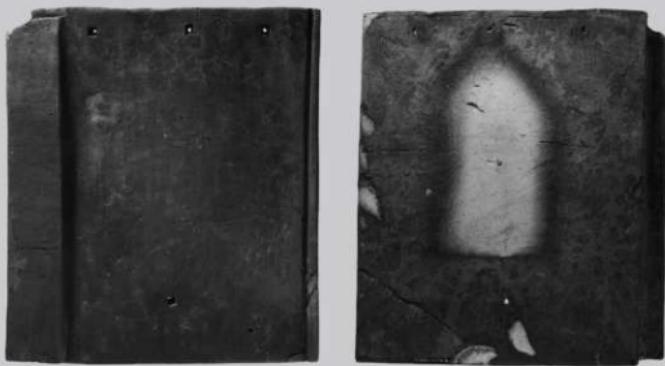
S = 1 : 5



22



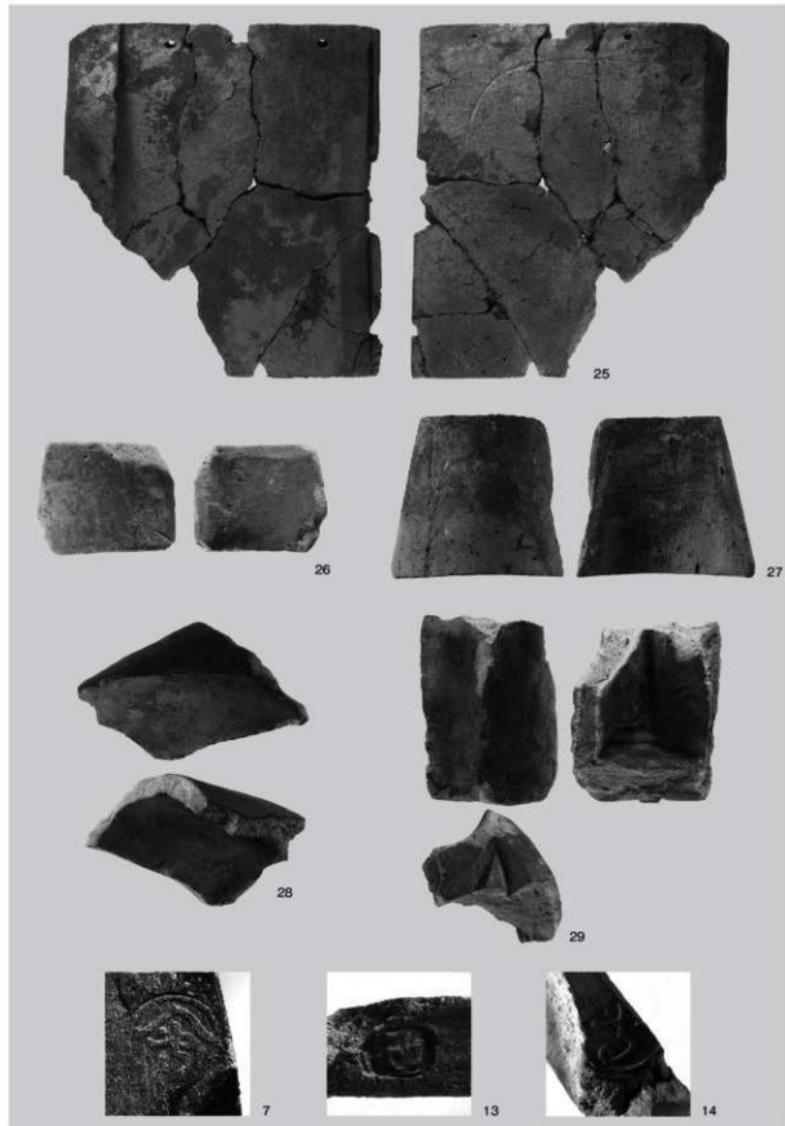
23



24

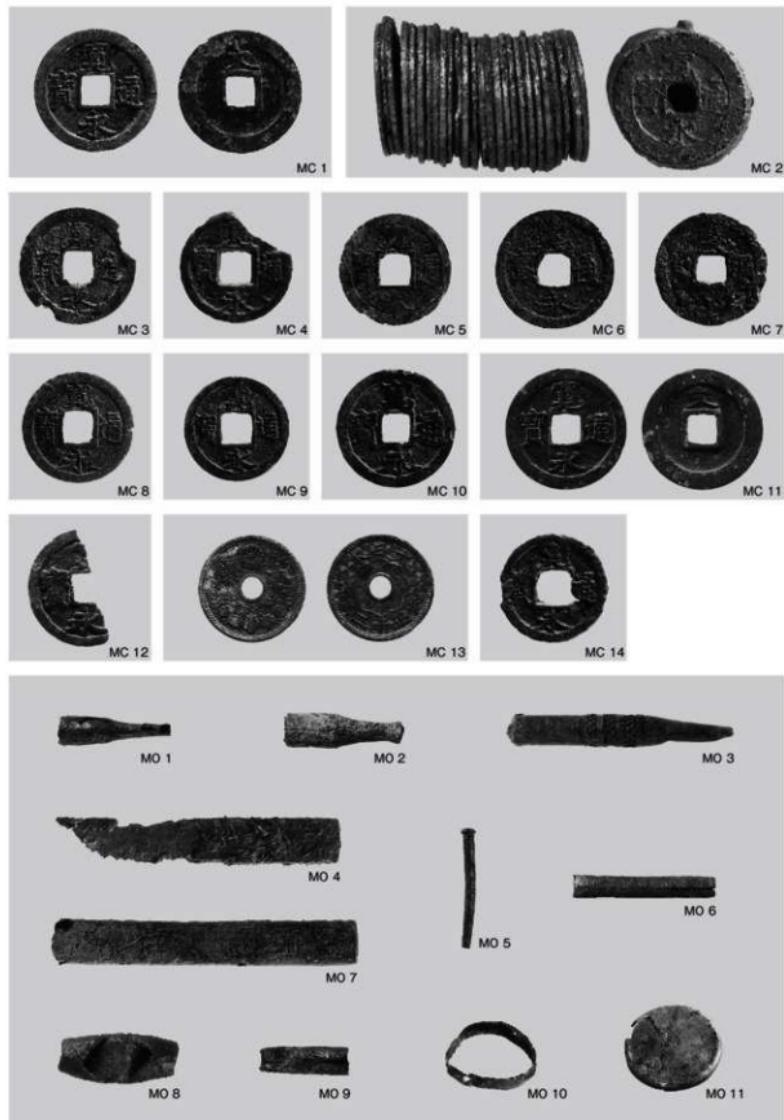
圖版37 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (6)  
Pl. 37 Various roof tiles from BK13 (6)

S = 1 : 5

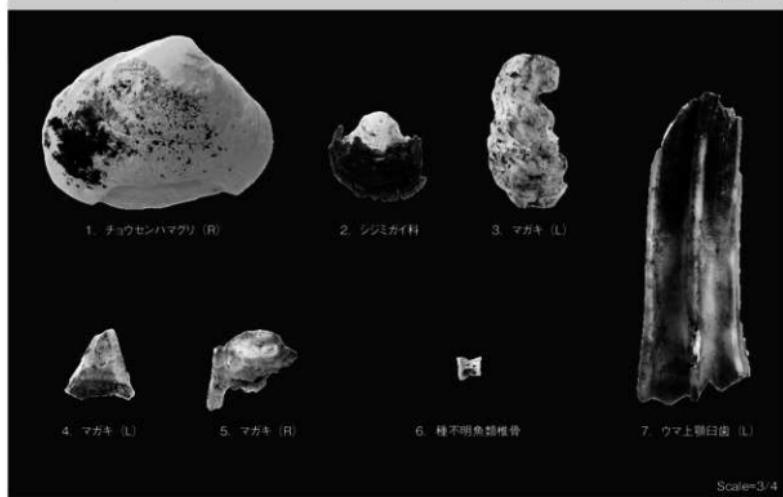
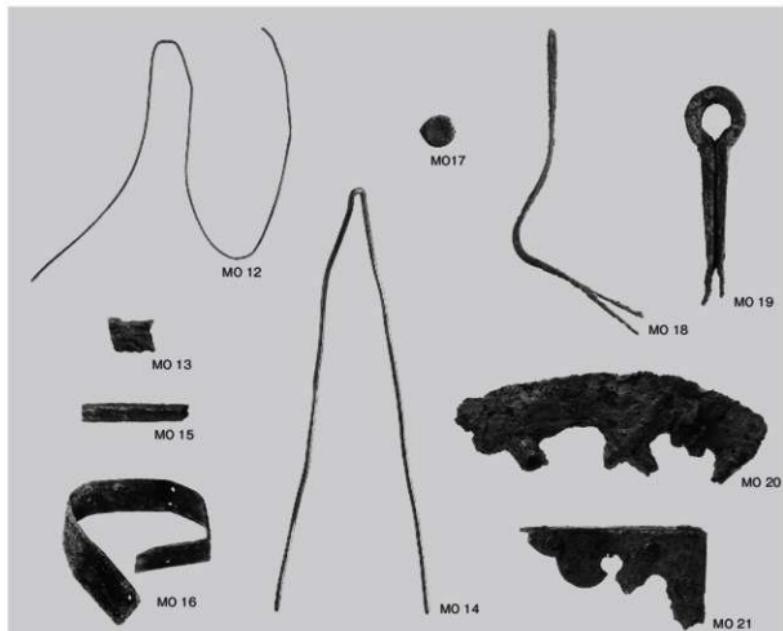


圖版38 武家屋敷地区第13地点出土瓦 (7)  
PL. 38 Various roof tiles from BK13 (7)

25 S = 1 : 5  
26~29 S = 1 : 4  
7 · 13 · 14 S = 1 : 1

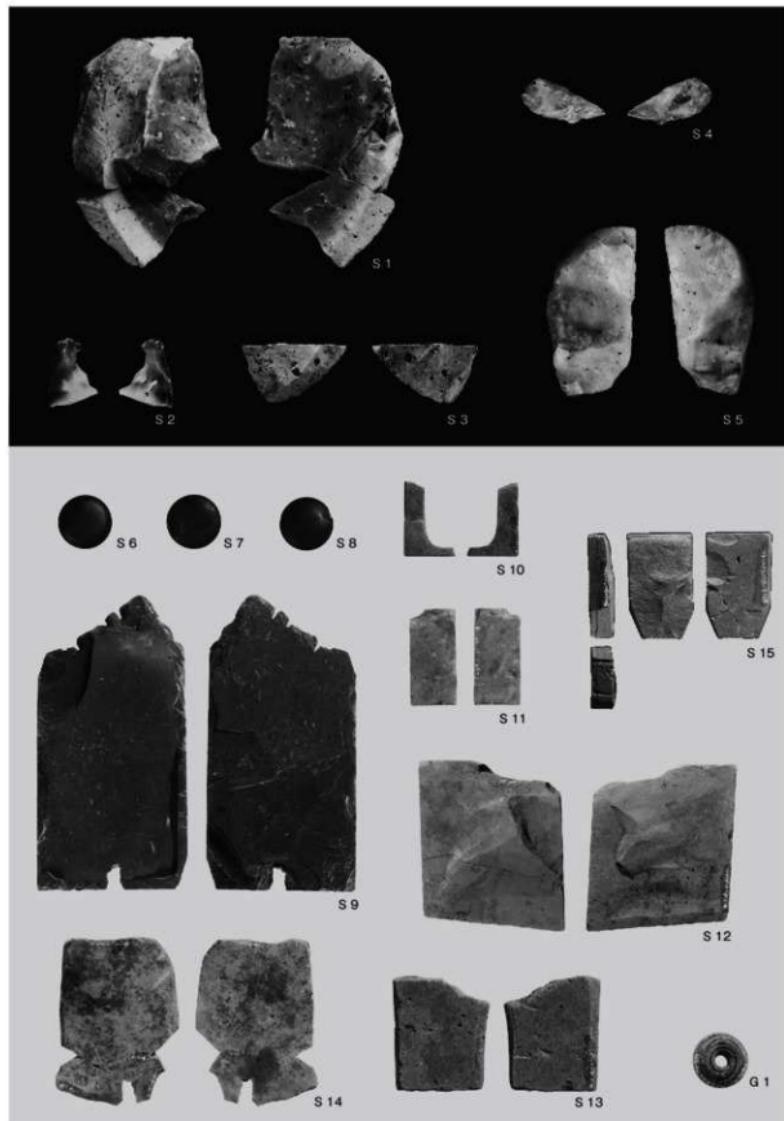


図版39 武家屋敷地区第13地点出土古銭・煙管・その他の金属製品 (1)  
PL. 39 Coins, pipes and various implements made of metal from BK13  
MC1~14 S = 1 : 1  
MO1~11 S = 2 : 3



図版40 武家屋敷地区第13地点出土その他の金属製品(2)・動物遺存体 MO12~21 S=2:3  
Pl. 40 Various implements made of metal, and animal remains from BK13

Scale=3/4



図版41 武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品、ガラス玉  
Pl. 41 Stone tools and stone implements, a glass bead from BK13

S1~5・15 S = 4 : 5  
S6~14 S = 1 : 2  
G1 S = 1 : 1

## 報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるほっぽうぶけやしきちくだい13ちてん						
書名	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点						
副書名							
卷次							
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告						
シリーズ番号	2						
編著者名	阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・菅野智則・川口貴史・傳田惠隆						
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL022-217-4995						
発行年月日	西暦2013年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 調査原因	
せんだいじょうあと 仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	みやぎ せんだいじょうあと 宮城県仙台市 あおば 北区川内41	04100	01033	38度 15分 36秒	140度 51分 10秒	2008.9.1 ～ 2009.3.30  2009.6/15～ 9/11・18、 10/1、11/5、 12/10、 2010.2/3・4	774.8 m <sup>2</sup>  厚生会館増改築 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項
仙台城跡二の丸 北方武家屋敷地区 第13地点	城館	近世	建物・柱列・溝・沢状遺構・ピット			陶磁器・土器・瓦・ 金属製品・土製品・ 石製品	
要約 仙台城跡二の丸 北方武家屋敷地区 第13地点	江戸時代から明治初頭に至る各種の遺構・遺物が確認された。これらの遺構は3時期に大きく区分できる。主な遺構としては、掘立柱建物、溝、沢状の遺構が確認された。出土遺物は、19世紀前葉から中葉、明治期に入ってからの資料が量的には多いが、18世紀代や17世紀に遡るものも若干含まれている。また、絵図との対比から、沢状遺構は千貫沢に合流する沢と推定し、柱列と遺構の一部は「北下馬廻」と対応するものと解釈した。						

---

---

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告2

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点

平成25年3月29日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室  
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1 TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント  
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24 TEL 022 (263) 1166

---

---



## 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点 付属CD-ROM 収録内容

1. 本CD-ROMには、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点から出土した遺物等のカラー写真データ（JPEG形式）が収録されています。
  2. 写真データは、図版別のフォルダに収納されています。そのフォルダ名は、写真図版キャプションと対応しています。
  3. 図版23～41の写真データのファイル名は、観察表の登録番号と同一です。一つの登録番号で、表面・裏面や、見込み・側面・底部など、写真が複数ある場合は、掲載番号にa、b、cなどの記号を付して区別しています。（例：CJ001a.jpg、CJ001b.jpg）
  4. 写真是、整理作業の中で撮影したものです。そのため、一部の写真には、登録番号とは異なった、整理段階で用いた仮番号のラベルがついているものがあります。正式な登録番号は、ファイル名を参照ください。
  5. 本CD-ROMは、学術資料としての観点から、複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、東北大学埋蔵文化財調査室までお問い合わせ下さい。
  6. 本CD-ROMの使用により生じたいかなる損害に対しても、東北大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。
-

